

群馬県女医会60年史







初代会長

真中すず

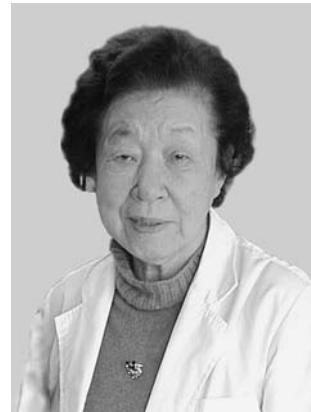
昭和22(1947)年～昭和44(1969)年



第二代会長

岸直枝

昭和45(1970)年～昭和60(1985)年



第三代会長

丸茂晶子

昭和61(1986)年～平成2(1990)年



第四代会長

角田智恵子

平成3(1991)年～平成15(2003)年



第五代会長

田所浪子

平成16(2004)年～



## 発刊に当たって

群馬県女医会 会長 田所 浪子

平成17年に県女医会の事務局を前橋が担当することになりました。此の期に何をなすべきかと理事会で話し合い、丁度戦後の混乱期から県女医会が発足して約60年、今迄何の記録も残されていないので、県女医会60年史として出版しようと大きな計画に取り組みました。

先ず創生期の真中すず先生を知る女医達が集まり座談会形式の会を持ったのですが、記憶とは不確かなもので代々の会長順もまとまらず、各自の会長時代をまとめることになりました。又会員に募集した原稿、各編集委員が出来るだけ原稿を集め、特筆すべき事業については担当者に原稿を依頼しました。併し中々原稿は集まらず毎月の編集会議も1年余となりました。

女医の記録を調べて居りますと、明治時代の女医への苦難な開拓期をへて女医学校が作られ、女医の数も微増し大正・昭和初期迄平穏な時代が続き、大東亜戦争勃発と共に軍医として出征した男医に代わり内地で女医の大活躍がありそして終戦、此処で又米国の統治下で一大変革が行われて、医学教育の高度化、男女共学の開放と女医にとっては前途の開けた改革でありました。此の様に変革が多かった今日、県女医会の60年史は非常に機を得た企画であったと思います。まだ何人かの生き字引のいるうちに、何らかの記録を残さねば悔いが残ると思います。

併し私共編集委員では形にもなりませんので、最初の編集会議から朝日印刷の高橋弘様がリードして下さり、通史にまとめて下さった中村ひろみ様が協力下さいました。殊に通史としてその当時の社会背景の中に女医会の歩みを組み入れ、歴史小説かと思われるような読み易い文にまとめて下さいました。1年余に渡り会場を提供下さり、資料を保管し編集会議の連絡雑務をお引き受け下さった副会長の山田・山下両先生、又編集委員の皆様、原稿をお寄せ下さった各位に心より御礼申し上げます。



## 群馬県女医会60年史発刊によせて

日本女医会 会長 小田 泰子

群馬県女医会が創立60年を迎えられ、60年史を発刊されたことを心よりお慶び申し上げます。

社団法人・日本女医会は明治35（1902）年に創立されました。創立理念は「研鑽・親睦・地位向上」でした。現在もこの理念は変わりません。ということは女性医師の地位向上は、100年以上を経過しても、未だ達成されないこととなります。このような大きな目的に立ち向かうには、女性医師の力を結集することが必要です。日本女医会にご入会下さい。

日本では教育における男女平等はほぼ達成されました。その結果、向上心のある多くの女性が高等教育を受けるようになりました。特に医師を目指す女性が増え、現在は全医師の約17%を女性医師が占めるようになりました。最近の医師国家試験合格者を見ますと、女性医師の割合は40%に達しつつあり、女性医師数はさらに増えると予想されます。

しかし、多くの時間と費用を使って教育された女性が社会に出た後、受けた教育の成果を社会に還元することができないとしたら、それは女性にとってだけでなく、社会にとって大きな損失です。投入した努力と資金を回収できる社会の仕組みが必要です。

社団法人・日本女医会は「女性医師活性化の社会的コスト」を論点に、女性医師の地位向上に資することを目指して活動を開始しました。しっかりした理論構築をして女性医師だけでなく女性全般の地位向上、働きやすい社会環境の整備に向かって新たな歩みを始めようとしています。

人生は台本もなくリハーサルもないまま主役を演じる舞台に例えられます。自分の人生劇場を、持てる力を十分に発揮して全力で生き抜きましょう。

群馬県女医会のますますのご発展を祈念します。



## 群馬県女医会創立60周年に寄せて

群馬県医師会 会長 鶴谷 嘉武

群馬県女医会の設立60周年に当たり、心よりお慶び申し上げます。

貴会が誕生した昭和22年は、日本国憲法が施行され、主権在民のもとに衆議院議員選挙と第1回の参議院議員選挙が施行され、日本国の新たな船出の年でした。敗戦後の厳しい経済情勢の中で社会基盤の整備は進まず、衛生状態は劣悪で伝染病が蔓延しました。キャサリン台風の襲来で利根川が決壊し16万人を超える罹災者が出た年でもあります。また、多くの新生医師会が、誕生したのもこの年の秋です。

貴会の歴史は、日本の戦後史の一頁をなし社会の変遷と共に地域医療を支え、今日の高い医療水準到達への推進力となってきました。同じ医療人として、その足跡に深甚なる敬意を表する次第です。中でも、昭和20年代の衛生状況の悪い混乱期の中で、伝染病の撲滅や保健衛生の向上を目指した献身的な取り組みは、保健行政推進に欠かせない原動力であり近代日本医療の礎をなしております。

今日、医師不足で地域医療の崩壊が叫ばれる中、医師の約3割を占める女性医師の存在はますます重要度を増し、女医会の盛衰がそのまま地域医療の将来を暗示するもので、貴会の果たすべき役割はますます裾野が広がっております。昨今、女性医師への支援事業や労働環境の整備、地域医療・福祉の増進・公衆衛生活動、女性医師相互の研鑽、男女共同参画など幅広い事業に取り組んでおられますが、地域住民が期待する医療の確立のために、なお一層のご尽力をご期待する次第です。

60年の歴史を振り返るとき、その道程は決して平坦ではなく各種障害を乗り越えて輝かしい今日の女医会が有るところです。少子高齢化社会が加速的に進み、社会構造が大きく変化していく今、地域医療の発展のために群馬県医師会の片腕としてお力をお貸し下さいますようお願いを致しております。

結びに、設立60周年を機に、群馬県女医会の益々のご発展と会員各位のご健勝をお祈り申し上げ、お祝いの言葉といたします。



## 「群馬県女医会史」の発刊 おめでとうございます

国際女医会 会長 平 敷 淳 子

この度は、群馬県女医会史が発刊されますこと、お喜びを申し上げます。

お忙しい先生方のご尽力の賜物に、心から敬意を表します。

群馬大学医学部を中心とする研究、診療と教育、地域医療の実践、公衆衛生や学校保健等の広い分野でご活躍の先生方のご功績を一冊の本にまとめて、残していくことは素晴らしいことです。

きっと若い先生がたの role model としてひも解かれていくことと期待しております。

全国的、世界的に女子医学生の数が増大し、ほぼ1：1の男女比の医学部も多くなっています。2004年にアメリカの医学部でも女子医学生の割合は52.9%と報告されています。

日本の女性医師の数も2008年で52,000強となっています。希少価値と珍重された時代から、日本の医師不足の根源に女性医師の増加をあげている報告もあります。

女性医師が差別なく働けるようにご努力して下さった諸先輩の足跡を汚さぬよう、将来に女性医師のプライドと使命感が受け継がれますよう祈りながら、本史の発刊の意義を高く評価したいと思います。



# 目 次

発刊に当たって	群馬県女医会 会長 田所 浪子
群馬県女医会60年史発刊によせて	日本女医会 会長 小田 泰子
群馬県女医会創立60周年に寄せて	群馬県医師会 会長 鶴谷 嘉武
「群馬県女医会史」の発刊おめでとうございます	国際女医会 会長 平敷 淳子

群馬県女医会の歩み .....	1
1 群馬県女医会誕生前夜.....	3
明治の前橋と真中すず／女性の医学教育への門戸を開いた高橋瑞子／明治初期の衛生対策／真中すず、群馬で最初の女性医師として産婦人科医院開業／徐々に増加する群馬の女性医師たち／県内各地の先駆者たち／繁栄と結核／昭和3年 中澤於君、高崎で初の女性開業医に／昭和9年 岸直枝が桐生で初の女性開業医に／戦争へとひた走る日本／戦争直前・戦中・戦後の女性医師たちの日々／戦後史のスタート	
2 群馬県女医会の歩み.....	22
戦後の女性医師たち／昭和22年 群馬県女医会結成／昭和22年～30年 群馬県、日本国内の様子／昭和31年～45年 群馬県女医会の様子／昭和31年～45年 群馬県、日本国内の様子／昭和45年～ 岸会長時代／昭和55年 第25回日本女医会総会(伊香保)開催／昭和57年 ぐんま思春期研究会発足／昭和60年 母乳育児をひろめる会発足／昭和60年 日航機墜落事故／急増する女性医師／進まない就業環境の整備／苦難を乗り越え広がる、女性の活躍の場／昭和61年～ 丸茂会長時代／平成3年～ 角田会長時代／平成16年～ 田所会長時代／群馬県女医会のあらたな使命	
3 補 遺.....	46
女性医師に対する就業支援の動き／群馬県における平成の女性医師の数／増える女性医師の割合、急がれる環境整備／群馬県内の女性医師の就業環境整備	
第一代 真中すず会長の時代 .....	53
第二代 岸直枝会長の時代 .....	56
第三代 会長として .....	59
第四代 会長として .....	62
第五代 会長として .....	65

地域医療の現場から .....	67
女性医師たちの戦後／ぐんま思春期研究会／日航機墜落事故／女性医師の就業環境／母乳育児推進／女性医学研究者輩出に向けて／国際活動／市民相談／群馬県女医会フォーラム／秋季講演会及び学術講習会等	
時代を駆け抜けた女性医師たち.....	109
高橋瑞子／服部けさ子／湯本アサ／中澤於君／高間美さ保／岸 直枝／石澤雪江／野村真世子／旦尾雅子	
私の忘れられない一枚 .....	131
昭和44年桐生女医会／キャンパス内にあった無認可保育所／ハワイ大学夏季セミナー／社交ダンス部発足／メーデーの日に／前橋医専最初の女医たち／カナダ思春期・家族計画事情視察研修の旅／世界性科学会参加の折に／学校教育相談カウンセリング研修の旅の折に／日本歯科大学微生物講座教授時代／バーミンガム市医療視察訪問／荻野吟子女史生家長屋門	
群馬県女医会総会 .....	145
資 料 編 .....	163
群馬県女医会年表.....	165
群馬県の女性医師たち.....	172
群馬県女医会会則.....	182

あとがき

# 群馬県女医会の歩み



# 1 群馬県女医会誕生前夜

## ■明治の前橋と真中<sup>まなか</sup>すず

群馬県の女性医師第1号、「真中<sup>まなか</sup>すず」は、明治14(1881)年11月30日真中福太郎・まさの長女として、前橋の紺屋町(今の千代田町4丁目)に生まれました。さかのぼること明治3(1870)年には、日本で最初の器械製糸工場として前橋藩営「前橋製糸」が操業、明治5(1872)年には日本の製糸業興隆に大きく貢献した「官営・富岡製糸場」が操業を開始。すずが青春時代を過ごした明治の前橋そして群馬は、明治維新後、日本の国が強く大きくなる時期を産業面で支える、豊かな地域でありました。同時代人である詩人・萩原朔太郎は明治19年生まれで、すずより5歳年下です。横浜開港後、日本の上質な絹は

「マエバシ」というブランドでヨーロッパで通用していて、当時の前橋には直接欧米から経済・文化が流入していました。そんな絹の動きと、世界的に評価される詩人・朔太郎がこの地に生まれたことはけして無関係とは思われません。

すずは、明治40(1907)年、前橋市紺屋町(現在の千代田町)に真中医院(産婦人科)を開業します。さきほどの朔太郎の実父も萩原密蔵という医師でした(密蔵は、明治27年設立の『群馬医会(のち上野医会、群馬県聯合医会)』の発起人4人のうちのひとり)。写真(口絵参照)には、すずが、その密蔵をはじめ、当時の群馬の医師とともに写真に収まっています。当たり前ですが、すず以外は、全員男性。この写真を見ても、当時、女性が医者になることがどれほどたいへんだったか想像できます。大正6(1917)年、青木シゲが、青木明眼院(前橋)の医師になるまでの10年間、群馬の女性医師は、すずひとりでした。

## ■女性の医学教育への門戸を開いた高橋<sup>みずこ</sup>瑞子

真中<sup>まなか</sup>すずは、東京の「済生学舎」で学び、明治38(1905)年、医術開業試験に合格しています。女性が医学の勉強をするのが困難だった時代、済生学舎は女子学生を受



真中<sup>まなか</sup>すず 1881-1969  
群馬県女医1号、群馬県女医会初代会長(二之沢病院 森田豊穂氏提供)

け入れる数少ない学校でした。その済生学舎ももちろん、最初から女性に門戸を開いていたわけではありません。明治17年、済生学舎の学校長・長谷川泰を三日三晩訪ね、女性としてはじめて入学を許された高橋瑞子は、その後、日本で3番目の女性医師となりますが、瑞子が最初に医療に携わった地は、上州の前橋でした。

高橋瑞子は、嘉永5（1852）年生まれ、三河国幡豆郡の西尾藩士の娘です。明治10年代の半ば、縁あって、前橋の産婆・津久井磯子の弟子となります。磯子は、前橋の産科医として名声のあった津久井文讓の妻で、明治3（1830）年、夫の死後、嗣子（甥）一郎を助けて門戸を張り、群馬県産婆会会長として手腕をふるいました。前橋かるたでも、「うぶ声高く 津久井いそ」と「う」の札に読まれています。磯子は瑞子の資質を高く評価し、学資の援助もしてやり、瑞子を東京浅草の紅杏塾という産婆学校で学ばせます。明治15年、瑞子は内務省免許の資格取得後、前橋に戻り、「新産婆」という看板をかかげて開業します。瑞子はたいへん向上心の強い人だったようで、産婆免許取得後の明治16年、2人の同志の女性とともに内務省衛生局局長に「医術開業試験」を請願、つまり医師として開業するための試験を受けさせてくれと申し出ています。しかし、局長の返事は「産婆をやりながら、今しばらく待つように」というものでした。一説には、そのため、医師を目指すための資金調達も兼ねて、産婆を開業したとも言われています。いずれにしても、能力の高い瑞子は、前橋で産婆として活躍しますが、群馬でも国の免許をもった産婆は瑞子ひとりだったため、たちまち名声を博し、『日本女医史・追補』によれば、瑞子は、土地の有力者を説いて産婆学校も設立したとあります。

当時の群馬県内では、明治15年に正式に県庁が前橋に置かれ、明治17（1888）年には高崎に陸軍15連隊が創設されます。また、日本鉄道株式会社によって、上野―高崎―内藤分停車場（前橋）が完成し、現在の高崎線が全線開通、新しい時代に向けて、活気づいていました。



高橋瑞子 1852-1927  
日本女医3号(『先駆者たちの肖像』(助東京女性財団 平成6年刊より)



津久井磯子 1829-1918  
群馬県産婆会会長(『郷土史にかがやく人々』群馬県 昭和45年刊より)

『群馬の医史』によると、明治21年から23年にかけて、前橋産婆学校（前橋立川町）、上毛産婆学校（前橋堅町98番地）、産婆学校（松井田）、産婆学校（伊勢崎）と、県内に4つの産婆学校が創立されます。磯子が主幹を務めているため、瑞子が設立に尽力したのは、上毛産婆学校ではないかと思われます（およそ20年後には、開業試験に受かった真中すがが、上毛産婆看護婦養成所で講師を務めた後、日本橋で臨床に従事し、前橋に開業します）。

順調に産婆を務めていた瑞子の医師への思いは強く、明治17年上京。医術開業試験の予備校的存在だった済生学舎の門前に三日三晩立ち尽くし、その年の12月、正式に女子の入学が認められました。一方、同17年、女性に初めて医術開業試験が認められ、荻野吟子（埼玉県生まれ）が日本の女性医師第1号となっています。しかし、荻野は女子師範学校を卒業後、侍医の高階経徳が経営する私立の医学校・好寿院に特別に入学を許されて学びました。当時、女性が医学を勉強できる学校はほとんどありませんでした。瑞子が突破口を開いてくれたおかげで、済生学舎からは、同34年、女子学生が締め出しにあうまでの18年間に、約100名の女性医師が誕生したのです。群馬県では、真中すががその恩恵にあずかることとなりました。

## ■明治初期の衛生対策

群馬県女性医師第1号の真中すがが、医療の道を目指したきっかけは、幼いころに、母と弟、妹を相次いで伝染病で失ったためです。明治期は、発疹チフス、疱瘡、コレラ、インフルエンザ、赤痢、ペスト等様々な伝染病がはやり、時に大流行となりました。

明治の時代を迎えても、県内には衛生についての施設もなく、一般的にも衛生思想に乏しい時代でした。明治6年、群馬県が一時熊谷県になった時、県が師範学校に生理の教科を設けて、はじめて衛生思想の喚起につとめました。翌7年、熊谷に衛生所を設け、県内の医師の統制と県民の衛生保持についての施策を行い、上野国甘楽郡富岡町と吾妻郡原町に出張所を設置します。8年には種痘規則を定めています。同年、衛生所を師範学校内に移し、医師・産婆・針治・導引・売薬業者等の取締法を設け、その徹底を図りました。

明治9年、熊谷県が廃止され、第2次群馬県となった際、一時県庁を高崎に移し、衛生所も同地に置かれましたが、同年9月、県庁が前橋に移る際、下村善太郎含む25名の有志が、師範学校と衛生局（衛生所）等の新築費として4,000円の寄付を申し出ています。これは県庁と一緒に、師範学校と衛生所を前橋に誘致するためでした。

この寄付により、衛生所が前橋横山町に仮設され、同時に「群馬県医学校」が置か

---

れます。明治13年には、医学校に附属病院が設けられます。これ以降、様々な伝染病対策がとられるようになります。

## ■真中すず、群馬で最初の女性医師として産婦人科医院開業

医療の道を志した真中すずは、明治35年、医術開業試験の予備校的存在であった東京の済生学舎に入学します。当時の医師には、大学卒業者・専門学校卒業者・試験による者に加え、江戸時代以来の開業者とその子弟、奉職履歴による者、がありました。すずは、その中の「試験による者」を目指すため、医術開業試験の予備校で学んだこととなります。前にも述べたとおり、当時、女性が医学を学べる数少ない学校として、済生学舎の門戸を開いたのは、高橋瑞子でした。

角田智恵子（群馬県女医会第4代会長）は、すずからこんな逸話を聞いています。「浅草の親戚の家から、芝の済生学舎まで歩いて通ったそうです。昔ですから、勉強道具を風呂敷に包んで肩に背負い、草履履きで、朝の5時ころ出発したようですね。浅草から上野の駅前を通ったらいいんですが、その時おまわりさんに、チョイチョイと呼ばれて『早く家へ帰りなさい』って言われた。それで真中先生が『私はこれから勉強に行くんだ』って言うと、おまわりさんは『ああそうか』と納得したらしいんですが、そんな風に、家出娘に間違われたって言ってました」。小さな体で、懸命に医学を修得しようとしていたすずの姿が想像できます。

しかし、女性に医術を学ぶ機会を与えていた済生学舎も、ちょうどそのころ、医学専門学校への昇格運動のため、女子学生の締め出しを行っています。締め出された女子学生は女子医学研修所を組織し、勉強を続けます。結局、済生学舎は廃校となりますが、行き場を失った男子学生と合同して、私立東京医学校となります。同時に開校した日本医学校にも女子学生が20数名在籍し、明治43年、東京医学校が日本医学校に吸収されます。

そんな混乱の中、すずは、明治38年11月、24歳で後期試験に合格し、みごと医師免許を受けるのです。ちなみに、済生学舎の女子学生締め出しがきっかけで、吉岡荒太・彌生夫妻が、明治33年、私塾東京女医学校（のち東京女子医学専門学校から東京女子医科大学）を開きます。創立者の吉岡彌生も、済生学舎の出身で、すずより15年ほど先輩ですが、彌生が開業試験を受けた頃、開業試験の合格率は30%ほどだったそうです。

医師免許を手にしたすずは、一時帰郷して、同38年上毛産婆看護婦養成所の講師となり、その後再度上京し、日本橋の楠田病院、向島の蔵数医院などで臨床を修業。明治40年6月30日、いよいよ前橋の自宅近くで産婦人科を開業します。



## ■徐々に増加する群馬の女性医師たち

真中すずが前橋で開業した明治から大正にかけての日本並びに群馬は、各地のインフラがものすごい勢いで整備される時代でした。前橋に県内初の発電所が作られ、電灯がともったのが明治27年、前橋に電話が開通したのが36年、すずが開業した翌年の明治41年、前橋で1府14県の連合共進会——今で言う東日本博覧会のような催し物——が開催され、それをきっかけに前橋・渋川間、高崎・渋川間、渋川・伊香保間に、ちんちん電車が開通、明治45年には前橋に都市ガスが入ります。

生活環境が整ってきた様は、人口の増加にも見てとれます。統計資料の残る明治16年以降、群馬県の人口は急速に増大し、明治28年に31だった出生率は、大正元年に37.5を記録し、翌2年には県人口が100万人を突破します。

また、医師をはじめとする医療関係者の数も、明治中期以降、年を追うごとに増加し、特に大正時代は増加のテンポが急速となります。明治期の医政は、いわばそれまでの漢方医から転換し、西洋医学を広めることが主力でした。そのため、江戸時代以来の開業経歴による免許は時代を追うごとに減り、それに代わって、学校卒業者と開業試験合格者が増えました。

とはいえ、女性が医師を目指すことの困難な時代は、この後もしばらく続きます。県内ではむしろ、明治21年に4つの産婆学校が設立されたことからわかるように、この時代の群馬は、やっと産婆や看護婦の養成が充実してきた時期といえます。

そんな中、真中すずを先頭に、群馬の女性医師も徐々にその数を増やしていきます。



明治41年1府14県連合共進会(群馬県主催)の正門前通り  
第一会場(清王寺町)は、現在の県民会館(日吉町)近  
辺。共進会開催決定の際、発電所が建設され、会場内は  
夜でも明かりがとまり、幻想的な光景が展開された(『目  
で見る 前橋の100年』郷土出版社 平成18年刊より)

### \*群馬県の女性医師たちの動き

真中すず・明治40年開業、青木シゲ・大正6年開業、佐藤志づ・明治23年生まれ富岡市甘楽郡勤務、海宝キヨ・明治27年生まれ館林市邑楽郡勤務、小沢綾子・明治34年生まれ邑楽郡小泉町三科医院勤務、兼田マリ・大正15年群馬日赤支部病院勤務

表1 ■明治中期から大正期の群馬県の医師数

単位：人

年次	大学卒	専門学校卒	試験	履歴	従来開業者	総数
明治17	2	65	16	17	395	495
26	4	32	118	13	279	446
35	4	53	242	8	161	472
44	11	98	276	4	93	482
大正7	58	156	327	3	67	611

(『群馬の医史』群馬県医師会 1958, 12, 10)

(明治35年の数字は、出典文献ママ)

表2 ■明治中期から大正期の群馬県の産婆数

単位：人

年次	総数
明治17	159
26	180
36	190
44	252
大正7	376

(『群馬の医史』群馬県医師会 1958, 12, 10)

表3-1 ■明治中期の前橋の医師数

単位：人

年次	総数	内訳		資格			
		内外科	専門	医学士	試験(内専門)	卒業	従来開業者(内専門)
明治16	34	31	3	1	12	3	15
20	33	28	5	1	12(1)	6	14(4)
26	30	28	2	2	13	6	9(2)
30	30	25	5	1	22(5)	5	2
35	36	31	5	1	30(5)	7	3

(『前橋市医師会史』前橋市医師会 1982, 10, 15)

(明治16・35年の数字は、出典文献ママ)

表3-2 ■大正期の前橋の医師数

単位：人

年次	総数	学校卒			試験	女性	旧試験	従来開業	歯科
		帝大	医専	東大医専					
大正2	76	7	21	4	26	1	7	2	8
3	83	8	26	4	29	1	6	1	8
4	89	8	28	4	31	1	5	2	10
5	86	7	33	4	27	1	3	2	9
6	77	11	22	—	23	2	3	2	14
8	78	8	22	1	25	2	3	2	15
10	83	8	26	1	24	2	3	1	18
12	74	10	17	—	23	2	2	1	19

(『前橋市医師会史』前橋市医師会 1982, 10, 15)

表4 ■資格別医師数

単位：人

資 格	昭和24		昭和25	
	男	女	男	女
国家試験及第	36	7	142	13
大学卒業	412	—	460	1
官公私立(指定)医学専門学校卒業	415	108	404	63
外国学校卒業(試験含む)	5	1	16	1
試験及第(旧試験を含む)	78	2	49	3
昭和21年勅令第42号によって免許を得たもの	3	—	5	—
限地開業・従来開業・奉職開業	18	—	33	—
医師数	967	118	1,109	81

(『群馬県衛生統計概要 昭和23・24・25年』群馬県衛生部)

下町の住民に密着した医療活動を続け、繁華街の医師とも言える真中すずは、気丈夫人物でした。32歳の時、日本医学校で2歳年上だった寿一と結婚し、1男4女をもうけます。寿一は、山梨県・群馬県・警視庁の勤務でした。すずは、医師として、また母として忙しい日々を過ごす一方、大正元年から昭和11年まで社団法人積善会の嘱託医を25年間続け、昭和3年から11年間は方面委員を担います。

群馬県の女性医師1号としての気概もあったことでしょう。昭和11年6月発行の『日本女医会雑誌』には、日本女医公許50周年記念祝賀会(同年5月10日上野・精養軒にて開催)に出席した真中すずの名前があります。荻野吟子が日本の女性医師第1号となってから50年目のお祝いの席に、すずは、前橋の百軒町で女性医師をしていた宮田フミ(生年・開業年不明)とともにかけつけています。

同雑誌の資料によれば、荻野が開業した明治18年にひとりだった日本の女性医師は、明治42年には約120人に増え、昭和10年時点では3,200人ほどになっています。地域別に見ると昭和11年時点での全国の女性医師の数は、東京都で1,000人弱、大阪府で約300人、愛知・兵庫が各145人ほど、新潟・福岡が各80人ほど、群馬県の女性医師の数は約45人となっています。



大正時代 前橋の商店街のにぎわい

廉売デーでにぎわう商店街。大正期から昭和初期の前橋には製糸工場が建ち並び、休日になると女工が市中に繰り出し、買い物を楽しんだ(『目で見ると見る 前橋の100年』郷土出版社 平成18年刊より)

---

県内45人の内訳は、明治期は済生学会出身の真中かず1人、大正期になると、女性医師の出身校はほぼ東京女子医学専門学校となるので、同校の卒業生でおよそ10人、昭和期に入ると東京女子医専に帝国女子医学専門学校（現・東邦大学）の卒業生が加わり、約35人で合計45人といった構成です。

## ■県内各地の先駆者たち

群馬の女性医師創生期、県内の各地域には、それぞれの経歴で医師の職についた女性先駆者たちがいました。産婆に携わりながら、医試験受験学校を経て開業試験に合格し、医師になった者。開業医の娘として、跡を継ぐため医学専門学校を経て医師免許を取得した者。他地域から、行政職や日本赤十字社群馬支部病院（大正2年3月創立）の医師として、群馬に赴任した者等です。

昭和初期、徐々に県内の女性医師の数が増えますが、中毛に限らず、西毛地域や富岡甘楽にも多くいます。これは、当初群馬が熊谷県にあったことや、富岡製糸場があったことが関係しているのではないかと思います。

また、この時期、その後、群馬県女医会に深く関わる女性医師たちが、登場します。昭和3年、高崎初の女性医師・中澤於君<sup>おきみ</sup>が開業。昭和5年、無医村医療に尽力し、山間部を馬で往診したという佐藤タミが、下仁田で開業。同5年、その後眼科医会の理事なども務める松本千満喜が館林で開業。長く群馬県の行政職として広範な活躍をする高間美さ保が昭和6年に卒業、昭和8年には、桐生で最初の女性開業医・岸直枝、高崎の女医会を牽引する勝俣栄子、桐生の女医会を牽引する疋田静枝がそれぞれ、女子医学専門学校を卒業し、続々と医療の世界に邁進していきます。

## ■繁栄と結核

大正4～7年の第1次世界大戦を経た日本は、巨大な軍備と資本、農業生産力を持ち、世界の中でも強い国の一員となっていきました。軽工業生産物を中心とする輸出国となり、大きな紡績資本を元に、軍需産業が繁栄、金融資本が確立されていきます。

しかし、繁栄の利潤は、一部の人々に集中、市井の人々や農村・漁村の人々は物価高騰に苦しみ、大正7年には米騒動が起り、大正9年には恐慌が訪れます。貧しい人々が、より貧しくなっていく中、社会には、不満と不安が充満し、やがて国家主義へ向かって動いていきます。

明治から大正期の群馬の主工業である製糸と織物業を見てみると、どちらも女子工員の労働力に頼っています。長い労働時間に加え、零細工場が圧倒的に多く、工員の

健康管理も十分とは言えず、当時恐れられていた結核の温床にもなっていました。

全国結核死亡率は一時低下しましたが、第1次世界大戦を契機に再び上昇します。一部の繁栄を尻目に、生活が立ちゆかなくなった小さな商工業者や農村出身の労働者が都市工場へと集中し、特に急増した男子労働者を中心に、結核感染と過重労働によって発病に至るケースが増えたのです。特に群馬の場合、人口1万人に対する結核死亡率を全国と比較すると、常に全国より下位だった数字が、大正末期から全国は低下するのに、県内ではかえって上昇し、全国平均を上回ります。やがて、工場の衛生管理に注意が向くようになり、昭和に入ると、結核対策も、治療から予防へと移行していきます。

昭和14年には吾妻郡に、県立の結核療養所が開園（昭和22年、国に移管され、国立療養所長寿園となる）、昭和18年には、すでに同15年に開所された群馬県立教員保養所の一部に結核罹患者の一般県民向け療養施設が設置されました。

### ■昭和3年 中澤於君、高崎で初の女性開業医に

群馬県内の商業、交通の要衝であった高崎は、明治33（1900）年に市制施行しました。当時、高崎市の人口は約3万2千人。この時すでに「高崎停車場」の建物は2代目になっています。明治39年高崎線が国営化され、同43年には高崎市の人口も4万人を超えます。大正8年には上毛製粉と日清製粉が合併、大正末期には、丸万製糸、小口組製糸、上州絹糸紡績などの製糸工場や小島鉄工所、高崎板紙、日清製粉、高崎護謨、本間捺染、高崎テープといった企業が勢いづいていました。大正14年には、高崎のメーデーに女性が初参加しています。

昭和5年、柳瀬橋に永久橋がかけられ、昭和6年には、清水トンネル開通により上越線全線が開通、君が代橋と聖石橋にも永久橋が架橋され、高崎と群馬の産業界は、ますます発展していきました。

そのような活気の中、昭和3（1928）年、中澤於君が、高崎市内で初めて女性医師として開業します。於君は明治37年、石田清次郎・ちいの長女として、砂賀町に生まれ、少女期から病弱な弟を看護したことから医師になる決意をしたようです。群馬県立高崎高等女学校から東京女子医学専門学校（現・東京女子医科大学）に進学。当時の東京女子医専には、高女の先輩である戸田クニが、



中澤於君 1904-1982  
群馬県高崎女医1号、高崎女医会  
初代会長、日本女医会群馬県支部  
長(下田尾澄子氏提供)

女性の医学研究の先駆者として活躍していて、強い励みとなりました。

大正15年に卒業し、東京大学附属病院で研修後、高崎に帰り、24歳で八島町に石田眼科医院を開院。昭和4年、中澤賛と結婚しましたが、医院名はそのままでした。

高崎では、明治以来、トラコーマなどの眼病に悩む患者が多く、於君も忙しく診療に追われる毎日でした。優しく、温かく、「医は仁術なり」の精神で診療にあたり、患者の生活上の相談にも応じました。於君と公私にわたり交流の深かった角田（前述）によると、貧乏な患者からは診療代をとらず、我が子のためにと用意していた編み物を差し出すこともあったそうです。

家庭では3男3女の母であり、「愛と平和、自然に率直に」を信条に、家庭と医師を両立させました。

**\*戸田クニ 日本における女性医学部教授第1号（桐生出身）**

明治23年山田郡桐生町大字桐生新町（現在の桐生市本町）で、葉種業を営む戸田芳三郎・タマの長女として生まれる。桐生の尋常・高等小学校各4年卒業後、明治37年群馬県立高等女学校（現在の県立高崎女子高等学校）に入学。明治44年東京女子医学校に入学、翌年、東京女子医学専門学校の開校とともに第1学年に入学。大正5年卒業の年に、医術開業試験にも受かったが、学生のころから臨床よりも基礎医学に強く惹かれていたため、助手として東京女子医専に残る。慶応義塾大学医学部・医化学の末吉雄次教授に認められ、大正12年より慶大の医化学教室に通う。大正14年、母校の助教授に登用され、女子医専出身の教師第1号となる。昭和4年、母校から派遣され、ベルリンのカイゼル・ウィルヘルム生化学研究所で1年間研究後、オーストリアのウィーン大学医化学教室において1年間研究の後、帰国。昭和6年ウィーンで開催される「万国女医委員会」に日本代表として出席。昭和7年教授に任命、昭和9年には論文「体内に於ける『ヒヨリン』の分解について」で医学博士の学位を



昭和初期の高崎・連雀町通り

右手前に見える高島屋ストアは高崎最初の小百貨店  
（『ふるさとの思い出写真集 明治大正昭和 高崎』国審刊行会 昭和56年刊より）



戸田クニ 1890-1946  
東京女子医学専門学校出身初の医学部教授（『高女九十年史』群馬県立高崎女子高等学校 平成元年11月刊より）

受ける。昭和21年8月帰省していた桐生の実家で病に臥し、11月に亡くなる。享年57歳。

## ■昭和9年 <sup>なおえ</sup>岸直枝が桐生で初の女性開業医に

「西の西陣、東の桐生」と並び称された桐生は、織物を中心に栄えた街で、古くから“桐生織物”と呼ばれる絹織物の名産地として知られています。

明治21（1888）年、両毛地区の生糸や、桐生織をはじめとする絹織物の輸送を目的に建設された両毛鉄道（現・両毛線）の桐生駅が開業、明治期の後半は足尾鉄道（現・わたらせ渓谷鐵道）、大正期には東武桐生線が充実します。東武鉄道の開通に合わせて、大正4（1915）年、初代錦桜橋が完成（この時かけられた吊り橋は大水で流失したため、10年後に鉄鋼製洋式ワーレントラス構造の2代目錦桜橋が開通）。大正9（1920）年、桐生町の人口3万7千人強、翌大正10（1921）年に市制施行し桐生市となります。

国内外の政治の激変期だった1920年代から30年代、桐生の織物業は、人絹織物を主体に輸出は2けた台の成長を記録、内地向けの織物も販路を大幅に拡大させ、他産地に例を見ない発展を遂げています。これは、地元桐生産地の技術革新、特に力織機の普及や紋織・人絹などの製織技術の革新が遂げられたためです。

大正14（1925）年桐生瓦斯株式会社設立、昭和3（1928）年上毛電気鉄道上毛線全線開通、昭和7（1932）年上水道が敷設され給水が開始されます。

昭和9（1934）年、そんなこだわりと匠の技が、まちの活力と直結する時代を迎えていた桐生で、岸直枝（旧姓・高木）が初の女性開業医となります。直枝は、明治42（1909）年11月14日、群馬県山田郡大間々町（現みどり市大間々町）で高木茂・かつの次女として生まれました。群馬県立桐生高等女学校卒業後、帝国女子医学薬学専門学校（現・東邦大学）医学部へ進学。昭和8（1933）年卒業の際は東京府立大久保病院で眼科医のインターンとして勤務し、順調なスタートを切りましたが、翌9（1934）年4月に医師であった父・茂が亡くなり、直枝は高木医院の後継者として桐生へ戻りました。桐生では、すでに昭和4年東京女子医専卒業の栃木雪子が、昭和7年、伯父・栃木喜和次の養女となり、喜和次の医院で、片腕として活躍していましたが、一家の大黒柱として、生計をたてるために開業した女性医師は、直枝が初めてでした。



岸 直枝 1909－1997  
桐生の女性開業医1号、群馬県女医会2代会長（『ふるさとの風 岸直枝伝』平成18年刊より）

父・茂の死で残されたのは、母・弟妹にいとも加わった大家族。なおかつ高木医院の経営と、25歳の直枝は苦労の連続でした。眼科が専門だった直枝は、金曜日の午後、診察が終わると上京し、東京で内科医院を開業していた額田晋のもとで内科の研修にも打ち込みました。

「昼夜の別なく、患者さんには親切に」という父の教えを胸に、医療活動を続ける直枝の様子は、当時の医師の様子をよく伝えています。

開業当時は、父と同じように自家用の人力車で往診しました。食事も落ち着いてとれない夜の往診の時は、母が作ってくれたおにぎりを人力車の上で食べたそうです。また、桐生は平地の面積が少ない地域なので、山間の村に行く時は、2人引きや3人引きの人力車で向かいました。

しかし、人力車はなにかと不便なため、翌10（1935）年の後半に、思い切って自動車を購入しました。車は500円のダットサンでしたが、450円にまけてもらったと著書の『心の絆』に書いています。当時の白米10キロが2円50銭、教員の初任給が50円のころです。車は高額な買い物でしたが、医療器具や医薬品も多く積めて、看護婦も同行できるので、能率があがりました。なにより、体が揺れ、疲労の増す人力車と違って、車は体を休めることができるので、直枝にとっては大助かりでした。

もちろん、当時としては珍しく、洋服を着て自動車で往診に出るので、心ない人たちから、ねたみや非難の声があがることもあったようです。時には、振り袖で往診に向かうこともあったと、後年直枝が語っています。



昭和3年 桐生市稚児行列

天満宮大祭の出し物の稚児行列。通りの奥まで行列が続き、盛大に行われた様子が見てとれる（『目で見る 桐生・伊勢崎・みどりの100年』郷土出版社 平成18年刊より）



昭和初期の子どもたち

前橋八幡宮の境内にある菓子屋の前で駄菓子を楽しむ子どもたち。年長の子どもが、小さな子どもの面倒を見ている（『写真集 群馬の昭和・平成4年刊』あかぎ出版 平成16年刊より 撮影 M・H）



## ■戦争へとひた走る日本

昭和初期、群馬県内でも数少ない女性医師たちが、それぞれに奮闘していた頃、日本の世相は徐々に暗いものへと傾いていきます。

昭和元（1926）年には群馬県の紋章が決まり、3年には新庁舎も落成、新しい時代への期待がふくらみながらも、不景気は蔓延していました。桐生では労働組合のストも決行され、県内では「籠の鳥を救え」と決起する紡績の「女工」達もあらわれました。昭和恐慌が蚕糸業を直撃し、昭和5年には前橋の製糸工場が操業休止におこまれ、昭和6年には霜害にも襲われました。

その昭和6年、満州事変が勃発します。全国に広がる不安定な世相に危機感を抱いた政府が、大陸に矛先を向けたと言えるでしょう。翌7年には「満州国」建国宣言、12年には日中戦争へと進展、13年4月1日「国家総動員法」が公布され、人々の日常生活も戦時体制へと組み込まれていきます。

この時期、群馬県内のできごとには、次のようなものがあります。

昭和13年4月第1次満蒙開拓青少年義勇軍満州へ出発／14年11月県政運営として「大政翼賛県政懇談会」設立／15年2月相馬（榛東）村満州開拓団吉林省に入植、4月中嶋飛行機小泉製作所邑楽郡小泉町に設置／10月国勢調査 県人口129万9,027人／16年4月国民学校発足、6月第1次満蒙開拓青少年義勇軍北安省に入植

この年の12月、日本は太平洋戦争に突入します。

昭和16年2月、群馬県医師会が発行した「群馬県病勢調査報告」によると、昭和14、15年の人口1万人に対する県内の医師数は平均2.5人、医師1人に対する推計患者数は県平均約55人（前橋・高崎・桐生市は各60人弱だが、吾妻郡では100人を超え、新田郡でも約70人）となっています。しかし、戦争がはじまり、医師・看護婦などの出征と徴用とによって、医療従事者の不足と質の低下をまねき、薬品や医療資材も不足、徐々に十分な医療活動が困難になっていきました。

もちろん、父や兄は戦地に出征していき、生活環境全般も悪化。日常生活物資の不足はもとより、食料は配給量を制限され、十分な栄養をとることもできなくなります。

## ■戦争直前・戦中・戦後の女性医師たちの日々

群馬県女医会の発足は、この戦争の終結後になりますが、女医会のメンバー達が、戦争直前と戦中・戦後をどのように過ごしたのか、4人の話をまとめてみました。

---

●戦時中のお薬はお米 岸 直枝（著書『心の絆』より）

戦時中は主食のお米がなくて、イモ類が主食がわりでしたので、栄養失調寸前の人がたくさんいました。

ある日、体が衰弱しきった親の子どもが、薬をもらいにきました。

直枝は、さっそくお薬の袋にお米を入れて「これがお薬だよ。家に帰ってお父さんに煎じて飲ませなさい。毎日とりにおいでよ。これは先生からのお見舞いだよ。大事なお薬だよ」

そういつて、私の食べる分の、それこそ貴重なお米を、お薬をとりに来る度にあげました。15日間ぐらい続いたかしら？

お薬ではないのでもちろんただで差し上げました。嬉しいことに、そのお父さんの病気は治りました。

その後、往診に行く途中、直枝の車を見つけると、自転車からさっと降りて、礼儀正しく直立不動でおじぎをする人がおりました。この人は、直枝の奇特なお米で、命が救われた人でした。

●戦時中の青春—高崎高等女学校 田所浪子

昭和19（1944）年、東京都立第十高等女学校に3年生までいて、群馬に疎開しました。両親が群馬町（現在の高崎市）の出身だったんです。学校は高崎高等女学校に編入しました。当時の疎開第1号です。でも授業は日曜だけで、あとは毎日学校工場で午後3時まで働いて、そのあと5時まで2時間看護学、10日間ずつ内科と外科の実習にも行きました。卒業と同時に看護婦になることができるのです。その時、目にした女医さんがたのもしくかっこ良かったんですね。当時従兄のお嫁さんが女医、姉も東京女子医専の2年生、自分もそうなりたいと思いました。

風船爆弾も作りました。浅間山の灰が降ってくると落下傘を作った余りの絹の切れ端布で灰を払うんですが、間に合わない素手で払い指先の指紋は消え血がふき出しました。浅間山は度々噴火し、また汚しては大変と厚い張板を2枚重ねてかついで走りました。重いんですよ。でもできちゃうんですね。少し時間ができると特攻隊員の慰問にも行きました。卒業後は、もちろん東京に戻りたかったんですが、危ないからと母がとても心配しました。それで疎開のつもりで行きなさいと言われ、昭和20（1945）年3月福島女子医専に入学しました（補足 昭和22（1947）年田所は前橋医専に転入し、同校出身の女性医師第1号となる）。

**●前橋空襲—高崎でも被災** 丸茂昌子

前橋が空襲をうけたのは昭和20年8月5日の夜のことでした。

私の家（高崎市請地町）ではおばあさんと病気の妹を明日、信州の父の実家へ疎開（空襲の被害を受けないように他所へ逃げる事）させるための用意をしていました。

夕飯を食べるか食べないうちに、ポーッ、ポーッと警戒警報（これから敵がくるぞ！というしらせのサイレン）。ソレッと私は92歳のおばあさんを背負って、眼の悪い妹の手を引いて、請地町にあった家から北の田んぼのほうへ夢中でにげました。

家から2キロ位はなれた田んぼのまん中にさしかかった時、今度は敵がきたぞ！というしらせの空襲警報が鳴りだしました。今敵が来てはどこにも隠れる事の出来ない田んぼのまん中です。夢中になって妹の手を引っ張って北の方の家の有る方へ駆けるようにして逃げました。

もう空を見上げると敵機がブーン、ブーンと赤城山のほうからずっと南の方まで大きく円を書いて旋回しています。

やっと農家のあるところへついたので、まずお婆さんと妹をその農家の前に有る1メートルくらいの川の橋の下にかくしました。おばあさんは手を合わせて南無阿弥陀仏とお念仏をあげています。妹は緊張で声をあげる事も出来ません。私は敵機がどうしているか見る為に外へ出て東の空を眺めました。

その時はもう前橋の上空には数十機のB29がブーン、ブーン、ゴッゴッゴッとして響き上げて旋回しています。前橋の町からは火炎の炎が上がり始めました。炎がメラメラともえあがります。高崎の方からはっきりみえるのです。見えなかった家の影が黒く見えます。

そのうち東の空を見ると1機だけこちらに向かって来る飛行機があります。見ていると私からやや斜めを見上げるようにしたところで、爆弾が投下されました。爆弾は私のほうに向かって落ちて来ます。真正面です。あれが落ちて来たら私の命は有りません。

お婆さんと妹は守らなければなりません。恐い等といっているヒマはありません。お婆さんと妹をもっと大きい橋の下に避難させて、誰かが持って来てくれた布団を水につけ、びしょぬれにして妹とおばあさんの上にかかけました。

そしてあの爆弾がどこに落ちるか見に出ました。さっき私の方をめがけて落ちて来ていた爆弾が私の頭の真上にきていました。アアよかった！爆弾は私の上には落ちない！ホッとしました。

その爆弾は私達の上を通り過ぎて並榎町の望泉閣という所に落ちたのです。そこに

は私の同級生が逃げて田んぼに伏せていました。そのすぐ隣に落ちたのです。友達は危ない所を助かりました。でも、すぐ隣に伏せていた友達の家の隣の子供が直撃弾をうけて即死したという事です。

私達への攻撃はそれでなくなったので、おばあさんと妹をつれて請地町の我が家へ帰りました。

家へきてみると、我が家は漆喰の天井が落ち、ガラスがかけ、家の中は足の踏み場もない有り様です。

やっぱりおばあさんと妹を逃げさせ

ていて良かったのでした。家から300メートル位の所に爆弾が落ちたのです。

防空壕にはいていた私の父や母や看護婦さんは、怪我もなく無事でしたが爆弾が落ちた時は突然雷が百も落ちたかのような物凄い音がして、地鳴りがし、防空壕も崩れるかと思う程だったそうです。つづいてバリバリと小さな爆弾の音がして、その合間には機銃掃射の音もまじり、皆、防空壕の中で肩寄せあって、生きた気持ちはしなかったそうです。このように前橋空襲の被害は、高崎にも及んでいました。

その間じゅう、前橋の上では、数十機の敵機B29がうなりをたてて、前橋市街に無数の爆弾を落としていたのです。市民は逃げまどい、広瀬川という町の中心を流れる川に身を投じ、炎から逃げようとして、いのちを落としました。私の勤務していた日赤病院の下足番のおばさんも其処で死にました。赤十字病院に難を逃れて入院していた海軍の兵隊さんは、助かりました。前橋はすっかり焼け野原になってしまいました。

高崎の私の家族も眠れない夜を不安に襲われながら過ごし、翌日を迎えました。

高崎は前橋空襲のその晩、請地町から台町、並榎までの道に沿って、道沿いに1,000キロ爆弾（1トンの重さの爆弾）を次々に落とされました。そのあと、高崎の町中も8月14日に空襲を受け、火災が起き、高崎市の中央部が被害を受けました。



昭和20年 前橋大空襲

8月5日午後9時30分過ぎ頃、B29の爆撃により前橋の市街地の8割が消失した。アメリカが投下した爆弾は、焼夷弾691トン、破碎爆弾17.6トン、一般爆弾15.2トン。死者535人、被災家屋11,518戸の被害を受けた(『目で見る前橋の100年』郷土出版社 平成18年刊より)

### ●昭和20年の前橋医専附属病院 角田智恵子

昭和16年4月東京女子医学専門学校に入学、同年12月8日日米開戦、20年8月15日敗戦終結となり、9月卒業。まさに戦争とともにあった学生生活でした。でも、戦時

中、女子医学生は、銃後の国民の健康を守り、医療に専念するという使命の下にあって、勤労働員もなく、授業を受けていました。唯一、昭和19年11月から20年2月までの間、2人1組となって、都内国民学校児童の疎開先地の、栃木、群馬、茨城、新潟、長野、富山の各県へ健康衛生管理の目的で、各2回派遣されました。派遣地区によっては、疥癬の集団感染の治療に追われたこと、富山では扁桃炎や手指の瘰癧で通院に付き添ったこと等があげられます。

昭和20年3月10日の東京大空襲では、多数の死傷者が出ました。その際は、東京女子医専の附属病院にトラックで次々運ばれてきた多数の熱傷者の治療の手伝いや、破傷風で死んでいった人たちも手掛けました。

その年の9月に卒業、医師免許証が交付されました。将来の進路については、これから平和になるのだからと、学生時代には最も不得手だった産婦人科を躊躇なく選びました。これからの女性、そして母性のためにと、前橋医学専門学校の産婦人科教室に入局しました。当時、学校周辺は焼け野原で、病院の建物はありませんでした。幸いなことに、産婦人科の清水直太郎教授が、前橋市立産婦人科病院の院長を兼任されていたので、新卒3名の入局者はそちらで働くことになり、木下助教授を入れて医局は5名となりました。当時、被災地だった前橋では、入院できる医療機関は少なく、当病院への患者さんは多く、珍しい症例も経験しました。また、新米の頃、夜間異常分娩で緊急を要する時は、タクシーを頼めなかった頃なので、小遣いさんの迎いで自転車の後荷台に乗って教授自ら、かけつけて下さいました。今では考えられない光景です。そして症例の一件一件について講義していただいた事のありがたさは、今でも忘れられません。

昭和22年ころ、国領町の分院が開かれ、手術部門の外科、産婦人科、泌尿器科、整形外科、X線科等が入り、診療がはじまりました。その年、当科へ旧制大学医学部出身の入局者が4名位あって、診療に加わりました。清水教授は、市立病院を兼任しながら診療を続けていました。23年には、本校生の第1回卒業生が入局し、だいぶ医師数も整ったので、午後の非番の時は、基礎医学教室に行って研究するようにと、教授からお話があったので、私は細菌学教室の研究生に入れていただき、細菌培養からはじめました。私は、24年4月に辞任しましたので、中止となりました。後、開業の傍ら前橋医大の生理学教室の研究生となり、そこで学位を取得しました。清水初代産婦人科教授は、26年九州大学温泉研究所の教授として転任されました。

---

## ■戦後史のスタート

昭和20（1945）年多くの犠牲を払った太平洋戦争が終結しました。群馬県にも10月8日、アメリカ軍およそ1,000人が相馬ヶ原に進駐し、その意味では、日本は占領下から戦後史をスタートさせたと言えます。しかし、8月下旬にはすでに桐生で力織機500台で生産を再開、高崎の山田航空も事務機などの平和産業に脱皮をはじめます。県内の軍需工場では、鍋や釜、自転車などが作られ、軍需から民需への転換が計られます。

12月になると、高崎と沼田の陸軍病院が国立病院となり、太田の中島飛行機製作所は小泉工場とともに米軍キャンプとして接収されます。

暮れ近い12月21日には、県内で最初の教職員組合が高崎で誕生し、戦後民主教育の試みがスタートします。

医師の養成を見ると、昭和初期、国内には17の医科大学と9の医学専門学校がありましたが、戦時中は医療関係者不足のため、多くの医師を養成することが望まれました。そこで、臨時の医学専門学校も急設、中等教育から4年間の医学教育を受ける医学専門学校は、46校に増加。前橋医学専門学校（現・群馬大学医学部）もそのひとつで、昭和18年の開校になります。

また、出征による男性医師不足を補うため、女性医師の養成も急がれました。それまで閉ざされがちだった女性医師への道が、はからずも、開かれていくことになります。昭和18年2月には5年制の名古屋市立女子高等医学専門学校が文部大臣より認可、昭和19年福島県立女子医専、昭和20年1月には北海道庁立女子医専、高知県立女子医専設立が認可、2月には秋田県立女子医専の設立が認可されます。

県内を見ても、昭和15年までの女性医師の誕生は、年間5人ほどでしたが、16年から20年にかけては、2桁を超える年もあり、多くの女性医師を輩出したことになりました。

終戦後は、医療従事者の資質を全面的に高めるため、インターン制度と国家試験が課されることとなります。また、昭和23年の教育制度改革において、医学と歯科医学教育は、高等学校卒業後、6年間の大学教育課程で行われることとなりました。

昭和22年1月帝国女子医専・薬専・理専ともに「東邦」と改称、7月東京女子医専が東京女子医科大学予科に認可、昭和23年2月各官立医学専門学校が医科大学に昇格（この時、前橋医専も前橋医科大学に昇格）、4月大阪女子高等医専が大阪女子医科大学となり、昭和24年には、名古屋、岐阜、福島、秋田、京都、札幌等の女子医専が、秋田を除き学制改革（専門学校廃止）により、医科大学となります。

同年、国立大学設置法により、前橋医科大学は、桐生高等工業専門学校、群馬師範

学校、群馬青年師範学校とともに、群馬大学を構成します。

医師養成に限らず、女性が男性と同じ条件で教育が受けられるようになる契機は、昭和20年マッカーサーによって出された、女性解放、教育民主化を含む5大改革の要求によって訪れました。その後、女子への高等教育機関への開放、女子中等学校と男子中等学校の教育内容を同程度とすること、大学における男女共学などが実施され、昭和21（1946）年には女子大学以外の大学の門が、女子専門学校や高等女学校の卒業生に開かれることとなりました。

このように、医師の養成と合わせ、女性が医師を目指す教育環境が、急ピッチで進むことにより、日本の社会に多くの女性医師が誕生することとなりました。

## 2 群馬県女医会の歩み

### ■戦後の女性医師たち

「戦後のまだ落ち着かない時期だったのでしょうか、昭和22年ころです。私も医者になりたてで、患者さんを見るのに精一杯だったころ、中澤於君先生にとってもかわいがっていただきました。ある日、『あなた、ちょっといらっしゃいよ』という感じで声をかけられて、行ってみると、高崎ですでに女性医師をなさっていた先生たちがいらっしゃいました」（角田智恵子）

のちに群馬県女医会第4代会長となる角田は、昭和20年東京女子医専を卒業し、前橋医専附属病院に勤務していました。高崎高等女学校並びに東京女子医専の先輩でもあった於君とは、公私にわたり交流を深めていく中で、こんなふうに声をかけられました。

特別の会という雰囲気ではなく、はじめのうちは於君が、後輩の女性医師たちに手料理をふるまっていたようです。顔を見せていたのは、於君より5歳年下の勝俣栄子（帝国女子医専卒）、当時高崎保健所に勤務していた海老原ふみ江（帝国女子医専卒）、友松淑子（帝国女子医専卒）、通信診療所勤務の富田浜子（帝国女子医専卒）、群馬赤十字病院勤務の丸茂晶子（東京女子医専）、高崎保健所勤務の秋田喜美（東京女子医専卒）などで、角田はいちばん若い女性医師でした。のちに、吉見水井（昭和20年東京女子医専卒）、新井恭子（昭和26年東京女子医専卒）なども参加しています。

「時おり夕食をご一緒して、懇親会みたいな感じですね。この先生たちとは、築（やな）に鮎を食べに行きました。鰻の蒲焼へも行きました。学生時代には、於君先生の診察を見学させていただいたこともあったりして、特に於君先生は、後輩の女性医師の面倒をみて下さいました」。

ちなみに、当時の前橋の女性医師をみていると、昭和57年発行の前橋医師会史（昭和21年当



昭和25年 前橋市

復興のきざしが見えてきた煥乎堂書店付近（『写真集 群馬の昭和』あかぎ出版 平成6年刊より）



時の前橋医師会の女性会員一覧)等によれば、次のメンバーです。

真中すず(紺屋町)、田中倭子(堀川町)、青木シゲ(細ヶ沢町)、平井尚子(百軒町)、川島ウメヨ(日赤病院)、群馬富美子(前橋医専)、石原喜美子(群馬医専)、石井ツグエ(国領町)、佐々木国子(向町)、真中はるゑ(前橋市立産婦人科病院)、大滝智恵子(同左)、高橋秀子(前橋医専附属病院)、横手ち江(前橋医専)

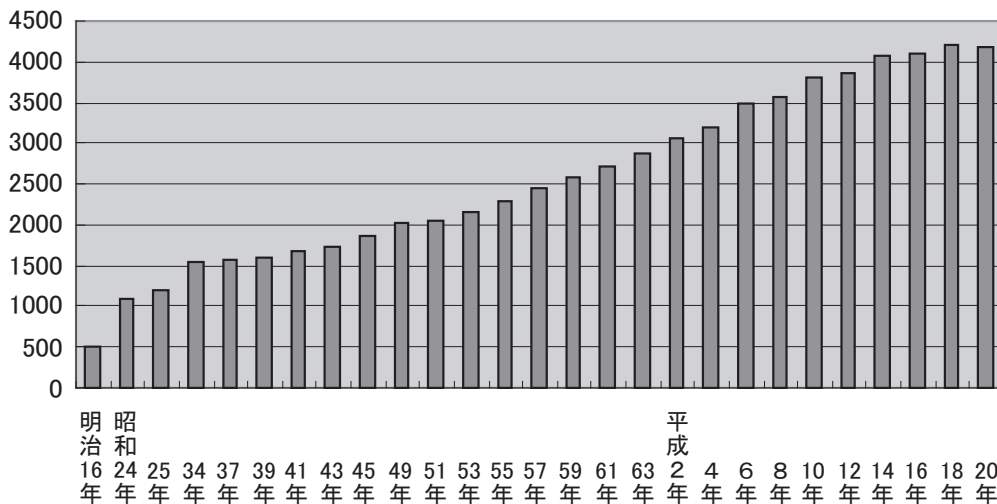
女性医師の先駆者たちにしてみれば、後輩の女性医師が増えることは、この上ない喜びだったのでしょうか。同じような感慨を桐生の岸直枝も、県女医会の講演会で語っています。「私が開業した後10年くらいして、疋田静枝先生が、桐生の女性医師第2号として開業なさいました。桐生にも女性医師さんができたっていうんで、私はとても嬉しかったんです。その頃桐生の医者は、わずか25人くらいで、その中でも女は、疋田先生が来られるまでたったひとり。ずいぶん長いことひとりでした」(『いのち』平成3年2月・県女医会発行)

長いことひとり——この言葉は、多くの先輩女性医師の心の内を代弁しているでしょう。女性が医師を目指すのも困難なら、続けるのも困難だった時代。社会は日々豊かに便利になるものの、昭和に入り、2つの大戦を経験し、激動と混乱のうちに迎えた戦後、医療の充実を願って誕生した多くの女性医師たちを目にして、先をゆく女性医師は、頼もしくもあり、道に迷うことや戸惑うことがあれば、力にもなりたい、その高い志をともにかなえていきたいと思ったでしょう。それぞれの地域で、それぞれの女性が、やさしさと気高さにあふれた女性らしいまとまりを築き上げてゆきました。

## ■昭和22年 群馬県女医会結成

各地域の女医がそれぞれの思いを胸につながりはじめた昭和22年、群馬県女医会が結成されます。きっかけは敗戦後の進駐軍(当時そう呼んでいた占領軍)からの要請でした。『前橋市医師会史』(平成4年刊)によれば、初代会長に推されて活躍した真中すずは、昭和32年の回想で次のように語っています。「吉岡彌生先生等によって創立された日本女医会の活動も終戦当時は窒息状況になっていましたところ、当時占領軍は盛んに日本婦人の地位に向上を叫び、軍政部に居られたネージャー女史が再三再四私どもに働きかけて来ましたので、22年8月私どもは女医の皆さんと語り、群馬県女医会を結成したものです。当時会員は約90名で爾来『会員各自の品性の向上、知識技能の進歩』をめざして努力をつづけました。5月の児童福祉週間には毎年乳児の無料検診をするなど、『社会に貢献する』よう心がけても参りました。」

表5 ■群馬県の医師数の推移



\*昭和50年から平成4年の数値は、医療施設従事者医師数

\*平成6年から平成20年は、医師数

(『医師・歯科医師・薬剤師調査』厚生労働省)

県の統計によれば、昭和24年末時点の群馬県の医師は1,085人、その中で女性医師の数は118人です。数字の上では当時の群馬県の女医の8割弱が設立当初の県女医会に入会したことになります。終戦後の混乱の中、誰よりも先に立って、未来への希望を見出そうとする頼もしい女医たちの姿が浮かんできます。

また、中澤於君を中心とした高崎の女性医師のあつまりにも、時おり、真中すがが顔を見せていました。「真中先生は、いちばんの長老でいらっしゃいますからね。その頃は、私が20代半ば、すが先生の四女はるゑさんとは職場で大の仲良し、於君先生が40歳前後、真中先生は60代後半ですから、ちょうど親子3代くらいの年回りです。真中先生のごことは、みんな、おかあさん、おかあさんって呼んでいました。」(角田)

個々に回数を重ねて、顔を合わせるうちに、高崎や前橋にとどまらず、県内じゅうに声かけをして、みんなで集まってみたい……。そんな思いが募ってくるのは、当然のことでした。徐々に話がかたまり、前橋の敷島公園に、群馬県の女性医師があつまることとなります。昭和30年初頭のことです。

「その時は、吾妻から剣持医院の桜井先生という方もお見えになっていて、ずいぶん遠くからお越しの方もいらっしゃいました。桐生から岸直枝先生がお見えなのが、印象的でした。当時は、ご主人が交通事故に遭われた後で、お忙しい時分だったと記

憶していますが、お越しになれたんだなあと思いました」（角田）

このあつまりに参加した、のちの県女医会第5代会長となる田所浪子は、次のように回想します。「私は、昭和28年に高崎保健所の勤務医からスタートしたので、敷島公園でのあつまりがあったのは、その後だと思います。大勢おあつまりのみなさんの中心に、ひとりのおばあちゃん—その頃の私には、おばあちゃんに見えました—がいらっしゃって、その方が真中かず先生でした」



昭和28年高崎本町3丁目角の東武軌道線

高崎駅を出たちんちん電車は、田町通りを北に向かい、本町3丁目で西に曲がる。角には高崎水力電気会社の営業所があったが、昭和20年代後半には東京殖産金庫になった。庶民の足として親しまれた東武伊香保軌道線高崎線だが、同28年7月に廃止された（『目で見ると高崎・安中の100年』郷土出版社 平成18年刊より）

#### \*戦後の真中かず

群馬県女性医師第1号の真中かずは、医療活動が続ける一方、社会福祉活動にも力を尽くしました。特に第2次大戦後は、婦人会や民生委員、日赤奉仕団、県母子保護連盟などの役員を歴任、母子会設立にも大きな役割を果たしています。これらの功績に対し、数々の表彰をうけています。

昭和24年からは、医師・森田伝一郎が尽力して設置した全国初の肢体不自由児施設「群馬整肢療護園」を経営する財団法人二之沢愛育会の理事長を務めています（昭和41年まで）。昭和29年には「県民の母」の称号を与えられ、広く称えられました。

昭和33年病に倒れ、約10年の闘病生活の後、昭和44年88歳の生涯を閉じます。

昭和34年藍綬褒章授与。昭和40年勲五等宝冠章授与。昭和44年死亡の際、正六位に叙せられています。また、昭和22年から38年まで、県女医会長と記載されています。（『前橋市医師会史』昭和57年発行より）

平成3年発行『広報まえばし』の取材に2人の娘さん（長女・森田やすゑさん＝当時75歳 二之沢病院・現在故人、四女・真中はるゑさん＝同66歳 真中医院後継者・現在故人）は、「間違ったことが嫌いな人でしたね」と口をそろえています。また、母子会活動を一緒に担ってきた小寺和さんも「人情味があって誰にでも平等でした」とこたえています。

はるゑさんと同時期に医師となり、ずすとも親交のあった角田は、「おおらかで気前がいい反面、繊細なところもある魅力的な先生でした」と、その人柄を偲びます。

この敷島公園での集まりの時かどうかははっきりしませんが、昭和32年には、日本女医会の群馬県支部が設置されます。さきの昭和32年・真中かずの回想の一部です。

「殊に本年の六月には会則等も検討して会員115名が今後の協力と日本女医会との連携を契い合った次第です。女医の皆さんも男の先生方に負けられないよう相互の親睦と向

---

上のために更に更に今後努力致しましょう」。戦後の混乱から、日本が力強く復興するのに歩を合わせるように、群馬の女医も、広く大きく、その絆を深めていきました。

「もはや戦後ではない」と表現されたのは、昭和31年版の経済白書（経済企画庁）においてでした。そこで、昭和22年から30年くらいまでの群馬の復興の様子を見てみましょう。

## ■昭和22年～30年 群馬県、日本国内の様子

アメリカの占領下からはじまった国内の復興ですが、群馬県内では、施設・工場の一部を進駐軍が接收した他は政府に返還。学校や農耕地・工場として使用させ、昭和22年には進駐軍もほぼ縮小されていました。昭和32年のジラード事件後、前橋・尾島のキャンプ、相馬が原演習場、太田市の米軍住宅地区なども次々返還。昭和44年の太田大泉飛行場返還により、県内で駐留軍に接收された施設はすべて返還されたこととなります。

人の動きを見てみると、昭和19年と20年の群馬県人口は、131万人から154万人と17%増えています。これは植民地だった台湾・朝鮮や戦争中に占領した地域からの群馬への引き揚げ者が増加したためです。また、戦後、疎開者13万人のうち、そのほとんどは東京方面に帰りましたが、一部の人はそのまま県内に居住したことも人口増のひとつの理由でした。

農業を見てみると、昭和20年の水稲の収穫高は、17年に比べると、約57%にまで落ち込んでいます。そのため、昭和20年に62%だった米食率は、戦後の22年には、なんと36%まで落ち込みます。

庶民の生活を見ても、食糧危機が深刻になった昭和22年7月1日、政府が飲食営業緊急措置令を公布一食糧危機をのりきるため、飲食店・料理店の経営が一斉に休業させられたこともありました。同じく22年の県議会では、学童の中に、弁当を持参できない家庭が増え、義務教育での全面給食実施の意見書が全員一致で採択されたりしています。

しかし、多くの農民による努力のおかげで、さきほどの米食率も昭和24年には52%、31年には100%へ回復と、ほぼ10年かけて戦争の傷跡を修復したことになります。

主要産業の養蚕業では、昭和22年時点の総収繭量は史上最低の209万貫まで落ち込みますが、24年から増産。養蚕業は急速に復興していきます。加えて、昭和25年には朝鮮戦争の特需ブームに沸き、糸価・繭価も上昇。婦人靴下にナイロンが登場したことで、生糸需要はアメリカ輸出から国内需要にシフトしますが、国内用生糸の生産にあっていた座繰製糸の生産量が大幅に伸び、29年の収繭量は、長野県を抜いて、全国

トップとなります。ただしこれ以降は、輸出の低迷や化学繊維の進出があって、蚕糸業は斜陽化していきます。

#### 〔国内と医療関係の動き〕

昭和21年11月3日	「日本国憲法」公布
昭和22年11月1日	新生日本医師会、日本歯科医師会 設立
昭和23年	医師法、医療法等 制定
昭和23年5月	母子手帳配布
昭和25年4月	東京女子医科大学医学部（旧制）第1回入学式
昭和26年3月	新結核予防法制定
昭和26年6月	医薬分業法公布
昭和27年	東京女子医科大学 開設
昭和28年3月	優生保護法（昭和23年公布）に基づく優生手術2万2,424件、人工妊娠中絶80万5,524件と発表される
昭和28年12月	熊本県水俣市で水俣病が発生

### ■昭和31年～45年 群馬県女医会の様子

徐々に、日本が国力を回復し、あらゆることが整備されていく中、昭和30年代の半ばには、医学生に占める女子の割合も増え、女性医師が続々と登場しました。昭和35年調べの厚生省の資料によれば、医師の総数103,131人のところ、男性医師は93,482人、女性医師は9,649人で女性の占める割合は9.36%でした。

日本女医会からのお声掛けにより、昭和32年に発足した群馬支部ですが、残念ながら、発足当時の支部長は不明です。日本女医会の資料によれば、昭和36年・39年の群馬県支部長は高間美さ保、昭和42年は中澤於君となっています。

また、『前橋医師会史』（昭和57年刊）には、「第七章 医療に従事した人々 真中すず先生の職歴」に「昭和22年8月から昭和38年まで 群馬県女医会長（16年間）」とあります。

ただ、現実には、女性医師たちも、戦後の混乱期から立ち直るあいだは、自分の手の届く範囲を整えることで精一杯だったと思われます。社会的に衛生環境や食糧事情が整わない中で、患者と向き合い、せめてもと、身近な後輩の女性医師たちを励まし、時には支え合うことで年月が過ぎたのではないのでしょうか。

群馬県女医会が組織らしい組織となるまでには、もう



高間美さ保 1909－1991  
群馬県結核検診センター所長  
日本女医会群馬県支部長

---

しばらくの時間がかかりますが、その間、女性医師たちは、しっかりと自分の足もとを固めていったに違いありません。

**\*日本女医会**（参考：社団法人日本女医会公式ホームページ）

1957（昭和32）年、群馬県支部がおかれる日本女医会は、次のような女性職業団体です。

1902（明治35）年、前田園子（公許女医第12号、明治24年国家試験合格）が中心となり、女性医師の社会的地位の向上と研鑽のために、日本女医会を創設しました。

1913（大正2）年に「日本女医会雑誌」創刊、翌1914（大正3）年に第1回日本女医会総会開催と次第に形を整え、1920（大正9）年に吉岡彌生（公許女医27号）が会長に就任しました。吉岡彌生は1900（明治33）年に女性のための医学学校「東京女医学校」（現・東京女子医科大学）を創設した人です。

戦前の日本女医会は、女性の社会的地位向上のための社会活動も活発に行い、1927（昭和2）年の婦人参政権運動で街頭アピールをし、1928（昭和3）年の第1回汎太平洋婦人会議には代表を派遣しています。

第2次世界大戦のさなか、事業の柱であった「日本女医会雑誌」の発行継続が不可能になったことにより、しばらく休会となりますが、1950（昭和30）年5月、日本女医会再建第1回総会が開催されて、再び日本女医会の活動が始まりました。総会后、全国の女性医師と速やかに連絡をとりあうため、副会長（当時）の佐藤いや龍知恵子等が全国を精力的に歴遊し、支部結成のため、熱心な賛同者を得ていきました。その結果、1957（昭和32）年末までに全国で50を超える支部が結成され、総会員数は2,000名を超えました。1958（昭和33）年には国際女医会へも加盟しました。

その後も引き続き、女性医師相互の研鑽・親睦および地位の向上、福祉の増進ならびに地域医療等の社会活動、国際交流と親善等を目的に活発に活動をしています。

## ■昭和31年～45年 群馬県、日本国内の様子

一方、群馬県はこの時期、確実に蚕糸県から重化学工業県へと生まれ変わりつつありました。戦後、駐留軍に接収されていた広い土地が次々と返還され、その地に、ダイハツ前橋製作所、三菱電機株式会社群馬製作所、三洋電機株式会社等が進出しました。太田市の中島飛行機は、昭和28（1953）年、富士重工業株式会社と改称し、戦前の発動機生産の技術を生かして、スクーター・軽自動車の生産をすすめました。特に33年に発表された軽自動車のスバル360は、大衆車として人気を集め、41年には国内の軽自動車生産の40%を占める人気ぶりで、その後、大企業に成長します。

群馬県は工業県になったことに伴い、製造業の就業者数は昭和22（1947）年全就業者数のわずか9%でしたが、30年代に急増し、45年には29.5%と、農業就業者数を上回りました。

また、現在の群馬県は自動車保有率の高さで有名ですが、県内のマイカーが急増したのも、この時期です。昭和23（1948）年には、たった619台しかなかった県内の乗用車台数は、50年には61万3,346台となり、その2年前の48年には、保有率全国一となり

ました。

中学校から高等学校への進学率も、昭和26年の36.0%から増え続け、48年には90.8%、高等学校から大学・短大への進学率は26年の19.7%から50年には24.4%に上昇。群馬県は昭和30年代後半からの日本の高度経済成長を力強く牽引した地域であり、また、その恩恵も受ける地域へとなっていきました。

#### 〔国内と医療関係の動き〕

昭和34年 3月	関西医科大学が男女共学の最初の卒業生を出す
昭和36年 4月	国民皆保険発足
昭和37年	厚生省が36年に流行した小児マヒの概況発表。患者数戦後最高の2,453名。生ワクチン服用以後激減する
昭和37年 4月	厚生省がサリドマイド系睡眠薬の製造販売停止を通達
昭和39年	厚生省が38年結核実態調査中間報告発表。結核患者 5 年間に100万人減。
昭和42年 4月	岡山大学教授と地元医師が富山県の奇病イタイイタイ病は三井金属神岡銅業所の排水が原因と発表
昭和43年 5月	富山県のイタイイタイ病が初の公害病として認定
昭和43年 5月	医師法改正によりインターン制度廃止、研修医制度発足
昭和43年 9月	厚生省が水俣病を公害病と認定
昭和44年 7月	アポロ11号月面着陸
昭和45年 3月	大阪で日本万国博覧会開幕
昭和47年 2月	札幌オリンピック開幕
昭和47年 5月	沖縄返還

## ■昭和45年～ 岸会長時代

昭和39（1964）年の東京オリンピック開催を前後して、日本は、未曾有の高度成長期を迎えます。前橋でも39年、「前三デパート」の開店により、大量消費時代の幕開けを告げます。また昭和40年代は「観光ブーム」でもあり、群馬県内各地の温泉地や観光地に首都圏から多くの人々が訪れ、にぎわいました。その反面、自然環境の乱開発や、大きな公害問題も明らかになっていきました。

昭和40年、全国女性医師の数は、10,128人、昭和45年には11,319人で医師総数の9.5%を占めていました。そんな中、群馬県女医会第2代会長に桐生市の岸直枝が就任します。

岸直枝は昭和9年、父の急逝により、若干25歳で、大家族の高木家の大黒柱となり、昼夜の別なく懸命に働きました。桐生市を含む山田郡内の多くの学校で校医も務める中、昭和29年桐生市の医師・岸祐雄と婚約。その直後、祐雄は交通事故で、首から下が動くことのできない重傷を負いましたが、直枝は献身的な看病を続けるとともに、昭和30年岸病院を新築、その後も病院を大きくしていきます。

---

昭和36年に祐雄が逝去した後、39年ヨーロッパへの視察研修ツアーへの参加がきっかけで、41年勢多郡新里村（現桐生市新里町）に障害児施設の「社会福祉法人桐の実会 わたらせ養護園」を開設、精神障害を持つ児童のために尽力します。直枝はまた、医療や福祉活動を精力的にこなす傍ら、寸暇をさいてガールスカウト運動にも協力、昭和54年にはガールスカウト日本連盟会長に就任しています。

「もう、群馬県の女医といたら、私たちにとっては、岸先生がすべて。岸先生という大きな存在がいつまでも私たちを見守ってくださる、そんなふうに思っていました。」のちに群馬県女医会3代会長を引き受ける丸茂晶子も言うように、岸直枝は、群馬県女医会の会長に就任した時すでに、県内のみならず日本の中でも大きな位置を占める女医でした。

会長就任後の昭和46（1971）年5月には、日本女医会より吉岡弥生賞を受けています。この賞は、女医として著しい功績をあげた人に贈られる賞で、直枝もそれまでの顕著な功績が認められたのです。

県女医会5代会長・田所浪子の手元には、昭和46年度の群馬県女医会総会の記録が残っています。開催期日・昭和46年6月20日（日）午前11時より、場所・桐生市医師会館。真中はるゑ（すず四女）あいさつ、議長・海老原ふみ江、司会・金子栄美也、他に当時の支部長や各役員、各地区の代議員の名前が列記されています。

昭和46年当時、日本女医会の年会費は1,500円、県女医会の年会費が500円でした。県女医会の会員数は111人。高崎市19人、桐生市17人、前橋市16人という構成であり、全県で大きな活動をするというよりは、各地域ごとに、それぞれの女医が強い結束の元、ひごろから切磋琢磨していたのでしょう。総会では、真中はるゑから「四季折々においしいものでもいただきながら、歓談しあい、自らの向上にも役立たせたい」との希望意見が出され、全員賛成の上、終了した、と記載されています。

（昭和46年度群馬県女医会総会は、『桐生市医師会史』（昭和51年12月発行）にも記録されています）

#### 〔国内と医療関係の動き〕

昭和48年1月	避妊リング（IUD）の製造許可される
昭和49年11月	医制100周年記念式典が東京にて開催
昭和50年	30年に及ぶベトナム戦争終結
昭和50年7月	沖縄国際海洋博覧会開幕



昭和51年	米の火星探査機パイキング1号が火星着陸
昭和51年	第15回国際女医会議が日本で初めて開催

## ■昭和55年 第25回日本女医会総会（伊香保）開催

昭和35年、池田内閣の下で策定された「所得倍増計画」では、翌昭和36年からの10年間で実質国民所得（国民総生産）を26兆円に倍増させることを目標としました。ところが、その数値は、昭和42（1967）年には達成。日本はわずか7年で、国民1人あたりの実質国民所得の倍増を実現するという、驚異的な経済成長を見せました。

昭和40年代後半から50年代にかけ、日本は大躍進を遂げ、「経済大国」へとひた走ります。その後は、田中角栄の「日本列島改造論」、「第1次オイルショック」、「ロッキード裁判」と政治や経済の動きが、国民生活をダイレクトに揺るがす時代を迎えます。

昭和54年の統計によれば、群馬の車は80万台を突破、同時に交通事故も激増しました。そんな昭和50年代半ば、群馬県女医会が一致団結する機会が訪れます。「第25回日本女医会総会」の伊香保での開催です。

日本女医会の総会は、昭和30年に戦後復興第1回が東京で開催されて以来、第5回が大阪で、第8回の総会後の懇親会が神奈川で行われた以外、すべて東京で開催されていました。しかし、地方支部からは、総会の地方開催を希望する声が寄せられ、昭和40年宮城県仙台市での第10回総会において、「役員改選のある年は東京、改選のない2年は地方」で総会を開催するという原則が決議されました。

その流れで、第25回の総会と研修会が群馬県で開催されることとなりました。多くの女性医師並びに関係者を迎えるにあたり、たくさんの不安がありましたが、歴史・文学・温泉の魅力あふれる伊香保を開催地に選び、旅館一館（福一）を借り切ることで、おもてなしの平準化を保ち、宿泊も研修会も懇親会もすべて一括して旅館に経費を支払うことで、経費と事務の効率化をはかりました。

この時の総会では、国際女医会議記念事業のひとつとして「学術研究助成制度」を創設することが承認され、この年秋には公募が行われました。研修会では、群馬県女医会のコーディネイトにより、当時の群馬大学中央放射線部副部長・平敷淳子先生に「総合画像診断の体系化」の講演をお願いしました。翌日は榛名湖・榛名神社をまわるコースと、桐生のしいたけ会館・機織工場見学とショッピングの2コースに分かれ、全国から集まった会員173人に上州の初夏を楽しんでいただいた後、無事散会となりました。

---

## ■昭和57年 ぐんま思春期研究会発足

時代が豊かになるにつれ、群馬県内の生活もどんどん変化していきました。県民1人あたりの個人所得をみても、昭和30年60,980円だった個人所得が、35年には1.5倍、40年には3.25倍、50年には17.57倍の1,071,420円となっています。個人支出では、30年は所得の48%が食費にあてられていますが、50年代には30%台に下がります。その分、教養雑費の割合は30年代27.9%、40年代26.7%、50年代には45.1%を占め、生活レベルの向上がみてとれます。

その一方、県内でも核家族化が進み、地域の共同体意識が薄れました。孤立する家族が増える中、多くの母親たちが子育て、特に思春期の子どもを抱えた母親の悩みが深まりました。

そこで、昭和57（1982）年10月1日、全国で活躍する指導者の先生方の後援を得ながら、地域の医師、養護教諭、看護職員、カウンセラーなど多彩なメンバーで構成される「ぐんま思春期研究会」が発足されました。

初代会長には岸直枝が就任し、多くの県女医会の医師も参加しました。母親向けに思春期の特徴を学ぶ勉強会や、新社会人となる女性向けに男女平等社会での職業人としての自覚の持ち方セミナーなどを開催。また、性の健康と性の意義を中心に、啓蒙・調査・研究をすすめ、男性や女性、大人や子どもと、あらゆる人々が健やかに過ごせる社会をめざし、現在も活動を続けています。

## ■昭和60年 母乳育児をひろめる会発足

また、昭和60（1985）年3月には、群馬大学小児科学教室出身の女性医師21名を会員とする「母乳育児をひろめる会」も発足。同年4月には「母乳育児電話相談」を開設しました。

高度経済成長期の昭和40年前後は、人工栄養が盛んな時代でしたが、当時から群馬大学小児科の松村龍雄教授は、母乳の重要性を唱えていました。昭和60年は、ちょうどその頃の子どもが、母親になる時期とも重なります。徐々に少子化も進み、乳幼児に接する機会も、子育て経験豊富なお年寄りと接する機会も少なくなり、子育てに戸惑う母親は確実に増えていました。

会では、学会での発表や講演、マスコミを通じての推進活動を通して、母乳育児の大切さを多くの人に知ってもらい、自ら母乳で子育てしている女性医師たちが「電話相談」に応じることで、母乳育児のお母さんたちを支援しました。母乳は人工栄養と違って、赤ちゃんが飲むたびに計量することはできません。そのため、相談内容の多

くは「母乳が足りているのか」「適切な授乳時間や間隔はどれくらいか」という母乳不足への不安でした。不安に思う時に、聞いてくれる人がいる、それだけでも母親の気持ちは楽になります。ましてやその相談相手が女性医師ということであれば、なお安心感が募ったでしょう。その功績により平成9（1997）年女医会総会で日本女医会吉岡弥生賞に輝きました。

好評だった「電話相談」もその役目を終え、2009年3月に終了となりましたが、「母乳育児をひろめる会」の母乳育児への支援活動は、今後も続きます。

## ■昭和60年 日航機墜落事故

経済の発展による恩恵を多くの人々が享受し、謳歌していたこの時代、群馬の医師たちにとって忘れられ無い事故が起きました。昭和60年の日航機墜落事故です。

8月12日午後6時12分、羽田空港を離陸した日航123便大阪行きのパイロット747SR機（乗客・乗員524名）が群馬県上野村御巢鷹山に墜落しました。夕刻に発生した事故であり、通常の航空路から大きく逸れていたため、墜落地点が翌日の早朝まで発見できませんでした。

墜落したのは群馬なのか長野なのか埼玉なのか。情報が錯綜する中、12日午後7時半 前橋赤十字病院救護班2個班に待機指示、午後9時30分 群馬県警察医に待機要請が出されました。13日午前4時 前橋赤十字病院先発隊が上野村役場に向けて出発（午前6時30分 上野村役場に到着） 同日午前4時39分 航空自衛隊が御巢鷹山付近の尾根に激突している日航機を発見 午前6時30分 赤十字病院前橋2個班、原町1個班の救護班が上野村役場に向かいました。

### 8月13日

- 05：45 上野村消防団全員に出動命令
- 07：00 群馬県機動隊が上野村猟友会の案内で現場に向かう
- 08：00 群馬県警察医に出動要請
- 08：49 陸上自衛隊73人が現場上空に到着。現場にいちばん最初に着く
- 09：30 群馬の赤十字病院救護班3個班上野村役場に到着。役場近くの河原に救護所を設置
- 10：54 機体の破片にはさまれている生存者を発見。その後11時40分にかけて生存者4人救出
- 12：20 医師2名・看護師2名（前橋日赤病院・響場外科部長、同佐藤婦長、

- 
- 堅木看護婦、原町日赤病院緒方外科部長）ヘリからロープをつたい事故現場に降下、生存者の応急手当てにあたる
- 13：50 収容ヘリ上野村役場に到着。生存者を大人2名、子ども2名に分け、2台のヘリで藤岡市の多野総合病院に転送

## 8月14日

- 07：00 14名の歯科医師警察医が出動
- 09：00 最初の遺体が現地ヘリポートから45キロ離れている藤岡第一小学校校庭に到着し、検視会場の藤岡市民体育館に搬送される
- 14：00 群馬県医師会へ出動要請
- 14：00 群馬県歯科医師会より藤岡多野歯科医師会に出動要請
- 午後 西毛地区3歯科医師会への出動要請に続き、全県下の歯科医師へ出動要請

当時、日本赤十字社群馬県支部事務局長だった埴田宗三さんは、『前橋赤十字病院八十年史』（平成5年発行）によれば、次のように当時の様子を記録しています。

「8月14日から遺体の検視と身元確認が藤岡市民体育館で始まった。日赤救護班はここでの最高責任者である県警の久保調査官の指揮下に入る。この日の日赤の救護体制は、上野村へ出動した群馬県支部救護班1班を除き、各県支部職員を含め、群馬2個班（24人）埼玉2個班（18人）東京1個班（8人）であった。このほか県医師会60人、同看護婦40人、さらに検死班、身元確認班、広報班等の警察署員229人がいた。これに加えて多数の報道関係者がおり、館内は大変混雑していた。（中略）検視は、鑑識、警察医、医師、看護婦等6人から8人位がひと組となって、1体1～2時間かけて慎重に行われる。看護婦は検視、縫合の介助、洗浄、頭部などの復元、包帯巻き等を行う。（以下略）」

14日の検視終了時間が15日の午前2時30分、その日の早朝から再び検視が始まり、終わりが16日午前4時30分。そしてまたその日の検視がはじまるというすさまじさでした。群馬県女医会の中村保子（内科部長）も、8月14日、前橋赤十字病院救護班第4班の班長として、藤岡市民体育館に出動しました。

前年の昭和59年に設立された群馬県警察医会をはじめ、群馬県医師会では当時の副会長大田武史先生を中心に、地元医師会等が従事していましたが、その困難な状況を聞いた県内の開業医からも交替で協力しようと声があがり、県女医会でも積極的に関

わるため、岸直枝会長が声をかけ、多くの会員が藤岡へ向かいました。

大部分の検視は8月19日ころまででしたが、その後も身元確認作業は9月29日まで藤岡市民体育館で行われ、30日に前橋の県機動センターに移されました。

#### 〈昭和62年6月19日航空事故調査報告書 62-2より〉

日本航空株式会社所属ボーイング式747SR-100型 JA8119は、昭和60年（1985）8月12日、同社の定期123便として東京国際空港（羽田）から大阪国際空港（伊丹）に向けて飛行中、伊豆半島南部の東岸上空に差し掛かる直前の18時25分ごろ異常事態が発生し、約30分間飛行した後18時56分ごろ、群馬県多野郡上野村御巢鷹山中の尾根に墜落した。同機は大破し、火災が発生した。

同機には、乗客509名（幼児12名を含む）及び乗組員15名、計524名が搭乗しており、520名（乗客505名、乗組員15名）が死亡し、4名（乗客）が重傷を負った。

本事故は、事故機の後部圧力隔壁が損壊し、引き続いて尾部胴体・垂直尾翼・操縦系統の損壊が生じ、飛行性の低下と主操縦機能の喪失をきたしたために生じたものと推定される。飛行中に後部圧力隔壁が損壊したのは、同隔壁ウェブ接続部で進展していた疲労亀裂によって同隔壁の強度が低下し、飛行中の客室与圧に耐えられなくなったことによるものと推定される。

疲労亀裂の発生、進展は、昭和53年に行われた同隔壁の不適切な修理に起因しており、それが同隔壁の損壊に至るまでに進展したことには同亀裂が点検整備で発見されなかったことも関与しているものと推定される。

（『藤岡多野歯科医師会八十年史』 平成17年刊）

#### 出動した群馬県の女性医師

『日航123便事故と医師会の活動』（群馬県医師会刊）に掲載された県医師会会員等の中から女性医師を抜粋

（前橋市医師会）太田美つ子、狩野登志子、佐藤ち江、真中はるゑ （高崎市医師会）海老原ふみ江、角田智恵子、友松淑子 （桐生市医師会）新井京子、永田朝子、岸千鶴子、三丸昭子、岸直枝、関田芳枝、星野富美子、宮原茂子 （太田市医師会）堀越素子 （勢多郡医師会）佐々木恵子、高橋弥生、戸塚俊子 （沼田利根医師会）武士清子 （多野総合病院）馬場あい子

乗客・乗員524名のうち、生存者は4名。史上空前の航空機事故にあって、県内の警察関係者並びに医療従事者が不眠不休でことにあたりました。

今後の空の安全を願うとともに、犠牲者のご冥福を心から祈らずにはおれません。

#### 〔国内と医療関係の動き〕

昭和52年9月	王貞治本塁打756号の世界記録樹立
昭和53年7月	はしかの予防接種義務化
昭和53年7月	英国で世界初の体外受精児（試験管ベビー誕生）
昭和53年8月	日中平和友好条約調印
昭和54年5月	英国でサッチャーが初の女性首相に
昭和54年7月	ソニーがウォークマン発売、大ヒット

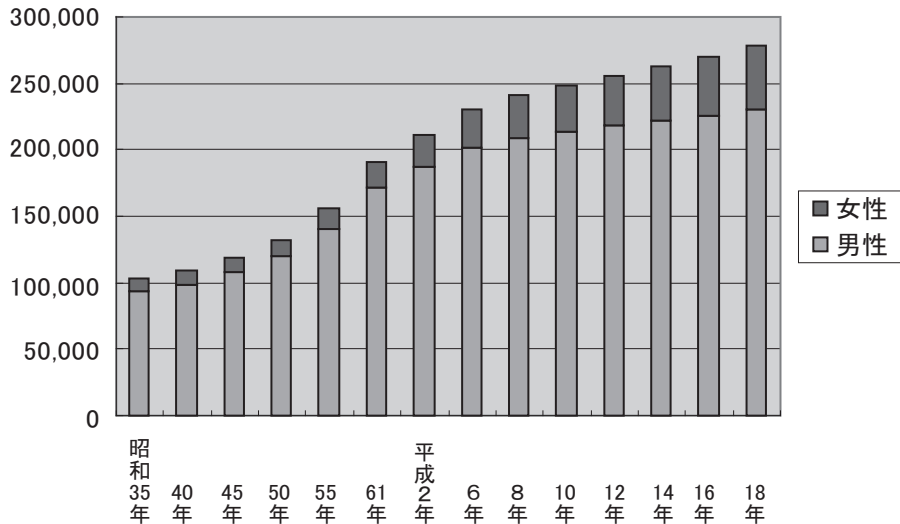
昭和54年12月	角膜及び腎臓の移植に関する法律成立
昭和55年 5月	WHO 天然痘根絶宣言
昭和55年 6月	米国の公衆衛生専門誌にエイズ症例の初めての報告がなされる
昭和55年 7月	モスクワ・オリンピック開幕。日本を含む西側諸国がソ連のアン侵攻を理由に不参加。
昭和55年12月	健康保険法等改正法公布
昭和57年 8月	老人医療費有料化の老人保健法案公布 70歳以上の医療無料廃止
昭和58年 1月	国際婦人年連絡会が優生保護法改正問題に対し、48団体の代表14名が厚生大臣に面会し、「優生保護法の改正に反対する」要望書提出
昭和58年 3月	東北大学医学部 日本で初めて体外受精・着床に成功
昭和58年 4月	東京ディズニーランド開園
昭和58年 6月	厚生省内でエイズ調査研究班の第1回会合が開催されるが、この事実は1996年2月になって初めて明らかにされる
昭和58年 7月	厚生省が医師数に関する検討会を開催。新設医大の増加に伴う医師過剰時代を予測し、適正医師数の新しい目標を策定。
昭和59年 3月	グリコ・森永事件
昭和59年 6月	厚生省が「日本は男女ともに世界一の長寿国」と発表。男性74.20歳、女性79.78歳
昭和59年 7月	新潟の病院が日本初のエイズ患者発表
昭和59年11月	公許女医誕生百年記念式開催。荻野吟子賞創設
昭和60年 3月	つくば科学博開幕
昭和60年 4月	日本電信電話公社を日本電信電話株式会社（NTT）に、日本専売公社を日本たばこ産業株式会社（JT）に民営化
昭和60年 5月	男女雇用機会均等法可決・成立 厚生省が帝京大学症例を含む血友病患者のエイズを初めて認定
昭和61年 1月	スペースシャトル「チャレンジャー」打ち上げ直後に爆発、乗員7人全員死亡
昭和61年 2月	フィリピン アキノ臨時政府樹立
昭和61年 4月	ソ連 チェルノブイリ原発で爆発事故
昭和61年11月	群馬大学医学部・平敷敦子助教授がWHOの専門委員会アドバイザー（任期4年）に任命される。
昭和61年12月	厚生省がインターフェロンα型製造を承認。胃がん初の治療薬となる
昭和61年	米国が「ヒト・ゲノム解析計画」を提唱、世界的規模で研究開始

## ■急増する女性医師

明治18（1885）年、荻野吟子が日本で最初の女性医師となった後も、幾多の苦難を乗り越え、多くの女性医師が誕生しました。昭和35（1960）年、医師の総数103,131人の中で、女性医師は9,649人、およそ9.36%でしたが、その後、昭和40（1965）年には5%増えて、10,128人と、1万人を超えます。その後も女性医師は年々増え続け、昭和50（1975）年から昭和55（1980）年は20.7%増、女性医師の占める割合も10.02%（医

表6 ■男女別全国医師数の推移

各年12月31日現在



(『医師・歯科医師・薬剤師調査』厚生労働省 平成18年)

師総数156,235人のうち女性医師15,659人)となりました。日本で最初の女性医師が誕生してから、およそ100年かかって、やっと1割を占めることとなります。

第1次ベビーブーム世代である団塊世代が学生時代を迎える昭和53～54(1978～79)年にかけては、女子医学生が急増。昭和61(1986)年の女性医師の数は2万人を超え、6年前の昭和55(1980)年より、29.3%増えています。

昭和57(1982)年3月、日本女医会が「全国女子医学生連絡会議」への後援を決定。女子医学生や女性医師を支援する「組織的」な動きが、少しずつはじまりました。

### ■進まない就業環境の整備

人数の増えた女性医師たちがぶつかった大きな壁のひとつは、仕事と家庭生活の両立でした。結婚・妊娠・出産とライフステージの変わる女性にとって、最も必要とされるもののひとつに、「保育所」があります。早い時期から院内保育所を設ける病院もありましたが、ほとんどは「看護婦の子ども」



昭和40年代後半の群大保育園の様子

---

向けで、医師の子どもは預かれないという理不尽な場面もありました。

しかし、たとえば、群馬大学医学部付属病院では、母乳育児に積極的な松村龍雄教授を中心に、女子職員の授乳室が設置され、昭和41年には、医学部キャンパス内に無認可保育所が置かれます。最初は、物置小屋を改装しただけでしたが、次第に設備を整え、女性医療従事者と病院関係者の努力によって、年々、保育所は拡充されていきました。

とはいえ、群馬県内全域における、女性医師の働く環境整備は、今もって十分とはいえません。

## ■苦難を乗り越え広がる、女性の活躍の場

昭和37（1962）年ころは、医学生だけでなく、女性全体の大学進学率も伸びました。しかし「女子学生亡国論」などと揶揄されることもあり、女性が社会進出を果たすには差別や偏見など、多くの課題が山積していました。

昭和49（1974）年、これまで右肩上がりに成長してきた日本の経済は、この年、戦後初めてマイナス成長に転じます。しかし消費者物価指数は上昇したままです。この時期、すでに女子雇用労働者は1,100万人を超え、その半数が既婚者であったということは、仕事を続ける女性、並びに、仕事を続けなければならない女性が増えてきたことを物語っています。

1960年代以降の昭和の時代は、あちらこちらで軋む音をたてながら、徐々に女性の活躍の場が広がっていった時代です。

女性医師が医師数全体の1割を占めるようになった昭和55（1980）年ころは、主要な一般企業の約7割は、相変わらず大卒女性の採用を行っていませんでした。大卒女性の進路は教職や公務員、マスコミ、外資系企業など限られた業種か、弁護士や公認会計士などの国家資格、もしくは親のコネで一般企業に就職するというのが一般的でした。

しかし、「女子学生亡国論」から20年経った昭和56（1981）年、航空会社で日本初のチーフ・パーサーが誕生、空港では初の女性管制官が勤務を開始するなど、女性の活躍の場は確実に広がっていきました。

昭和61（1986）年、男女雇用機会均等法が施行されます。表向きは、性別による雇用機会の差別は無くなりましたが、企業側はあらたに「総合職」「一般職」とコース分けを設けることで、結果的に男女で働き方が分かれるという実態を温存しました。



## ■昭和61年～ 丸茂会長時代

昭和61（1986）年7月、群馬県女医会の総会が桐生市で行われました。「あの時の女医会に高崎から出席したのは、海老原ふみ江先生、角田智恵子先生と私でした。なんとなく予感があったのですが、今度は高崎の番だよと言われ、これはお断りできないような雰囲気、高崎がお受けする事になりました。お受けしてから3人の相談で、丸茂が会長になることになったのでした」会長職の引き継ぎについて、第3代会長の丸茂晶子は、このように回想します。県女医会の会長職というのは、個人が受けるのはもとより、前橋の地域で受ける、桐生の地域で受けるという認識の集まりでありましたし、現在でもそのようになっています。

それまでは、心のつながりの強い県女医会でしたが、丸茂会長時代には、会則作りや名簿作成など、積極的に群馬女医会の組織化がはかられます。

会則の「会の目的」には、これまでの女医会の活動をもとに、「会員の親睦、学術向上のための研修、地域社会への貢献、啓蒙活動」と謳われました。

また、丹念な作業をもとに、名簿作りがすすめられました。「僅かな手がかりをもとに、県内全域の女性医師さん達ひとり1人に電話を掛け、実情をお尋ねしました。このことで私は全会員の先生方と非常に親近感を持つことが出来、私にとってもいい思い出になっています。また、携帯にも便利なように小型のものにしました」昭和62（1987）年発行の小さな冊子。これが群馬県女医会最初の会員名簿です。今回の記念誌作成にあたり、真中すずにはじまる群馬の女性医師たちの足跡をたどる際、まずはこの名簿が足がかりとなりました。

丸茂晶子は、大正11（1922）年1月5日、父・花見<sup>きます</sup>綺鱒、母・妙子の長女として熊本県に生まれました。昭和13（1938）年、高崎高等女学校卒業、昭和17（1942）年9月、東京女子医学専門学校卒業、前橋日本赤十字病院小児科に勤務後、高崎で開業していた父が病気になったため、花見医院を継ぎました。

1980年代後半は、女性医師の数も飛躍的に増えた時期でもあり、丸茂会長時代の県女医会も、懇親会のほかにアトラクションを行ったり、日本女医会の役員や他県の女性医師とも積極的に交流をはかりました。「総会のあり方をみんなで相談し、ただ集まって食事をするだけでなく、なにか勉強になる事、タイムリーな問題をとりあげ、医師にとっても、一般の人にとっても啓蒙に役立つことをしたいと考えました。また、楽しくてみんなの気持ちが一体になることや、近県や日本女医会とも交流できるような、いろいろ計画しました。前橋の太田美つ子先生からフラメンコを習ったり、アトラクションを考えるのもなかなか楽しいことでした」その後、丸茂は、東京女子医専の先

---

輩（岡庭＝南雲先生）から指名を受け、日本女医会の理事に就任（平成3～15年）します。そこで、県の会長職を角田智恵子が引き継ぐこととなりました。

## ■平成3年～ 角田会長時代

平成3（1991）年5月15日、群馬県女医会総会において、丸茂から群馬県女医会会長を引き継いだ角田は、同時に医療講演会の企画も引き継ぎ、年に一度精力的に開催しました。

角田智恵子は、大正12（1923）年9月23日、群馬県高崎市に、父・大滝藤太郎、母・ヨシの長女として生まれました。昭和15年高崎高等女学校卒業、昭和20年東京女子医学専門学校卒業、前橋医専産婦人科学教室勤務後、結婚を機会に退職。昭和24年、夫・角田公男とともに、角田医院を開業します。先述のとおり、高崎最初の女性医師・中澤於君にはずいぶん、面倒をみてもらいました。

平成4（1992）年から開催された医療講演会は「女医会フォーラム」と呼ばれています。今で言う「健康ブーム」の先駆けであり、内容も講師陣もタイムリーなラインアップをそろえ、毎回、多くの参加者でにぎわいました。

- 第1回 窮屈でない靴の話 平成4年2月15日（土）
- 第2回 増えているヨ スポーツ障害!! 平成5年2月13日（土）
- 第3回 健やかな赤ちゃんに育てる為に 平成6年2月19日（土）
- 第4回 正しい知識が貴方への想いです（エイズ）／お母さんの知らない息子たち  
平成7年2月18日（土）
- 第5回 健康のコツ、脳内革命 平成8年2月17日（土）
- 第6回 寄生虫の話 平成9年3月22日（土）
- 第7回 紫外線とスキンケア 平成10年3月14日（土）
- 第8回 藤原道長一族の糖尿病と現代の糖尿病 平成11年3月27日（土）
- 第9回 心を癒す 平成12年3月1日（土）
- 第10回 中高年の心の危機 平成13年3月17日（土）
- 第11回 病気を未然に防ぐ東洋医学のすすめ「未病」 平成14年2月23日（土）

この時期、日本女医会の理事だった丸茂は、エイズに関する啓蒙の一環として中高校生を対象とした小冊子「Dr. I のメッセージ」の発行に携わっています。初版1万部発行の後、好評を得て、1万部を増刷。地元である高崎市では多くの教育関係者にも

影響を与え、エイズに関する啓蒙活動の高まりを見せました。また、日本女医会のメンバーが日本各地で、エイズに関する公開講演会を行いました。

#### (国内と医療関係の動き)

昭和62年4月	日本国有鉄道をJRへ分割・民営化
昭和63年6月	リクルート事件
昭和64年1月	昭和天皇崩御
平成元年4月	消費税3%スタート
平成元年6月	北京・天安門事件
平成元年11月	島根医大附属病院で日本初の生体部分肝移植手術成功
平成2年10月	東西ドイツ統一
平成3年1月	湾岸戦争はじまる
平成3年12月	ソ連邦消滅
平成4年3月	日本医師会第3次生命倫理懇談会が尊厳死を容認
平成4年5月	乳幼児突然死症候群が日本での1歳未満の死亡原因の1位になる
平成4年6月	PKO法案可決・成立
平成4年7月	妊娠判定薬解禁
平成4年9月	日本人宇宙飛行士・毛利衛を乗せた米スペースシャトル「エンデバー」打ち上げられる
平成5年5月	Jリーグ開幕
平成5年8月	細川連立内閣成立。38年ぶりの政権交代 英国で狂牛病発生
平成6年6月	村山社会党委員長が内閣総理大臣に。47年ぶりの社会党首相
平成7年1月	阪神・淡路大震災発生
平成7年3月	地下鉄サリン事件発生
平成7年11月	Windows95日本語版発売 パソコンブームはじまる
平成7年12月	厚生省 20歳代の医師4人に1人が女性と発表
平成8年	薬害エイズ問題化 大腸菌O157による食中毒多発
平成9年5月	神戸市須磨区小6男児殺害事件
平成10年2月	冬季オリンピック長野大会開催
平成10年6月	日本医師会主催による女医懇談会開催 介護保険法成立
平成11年1月	バイアグラ承認
平成11年2月	臓器移植法に基づく初の脳死臓器移植実施
平成11年4月	第25回日本医学会総会開催 日本女医会後援による託児所開設
平成11年9月	低用量ピル認可
平成12年4月	介護保険制度施行 260万人が利用
平成13年9月	アメリカ同時多発テロ事件

## ■平成16年～ 田所会長時代

平成16（2004）年9月総会において、県女医会の幹事支部が前橋に移り、田所浪子が会長に就任しました。戦後の学制改革期に医学生だった田所は、男女共学の第一世代にあたります。

昭和3（1928）年、父・岸喜代松、母・ひろの次女として大阪に生まれた浪子は、昭和19（1944）年都立高校から疎開を機会に、高崎高等女学校に編入、昭和20（1945）年3月福島女子医学専門学校入学。男女共学が許された最初の年となる昭和22（1947）年4月前橋医学専門学校に転入学します。「当時の医専には4回生まで在学していましたが、男子500人の中で女子は私ひとり。まだ女子トイレもなく、婦人科総論で女性性器の拡大図が表示されると、みんなの視線が背中に突き刺さるようでした。翌年には、福島女医専の先輩や、その他数人の転入学があり、クラスの女生徒は5人になりました」と、浪子は回想します。昭和25（1950）年前橋医専第3期生として卒業、昭和28（1953）年国家試験合格後、高崎保健所に結核担当医として勤務、結婚・子育ての時期を経て、昭和36（1961）年田所小児科・内科医院を開業します。

群馬大学の前身、前橋医学専門学校卒業女性医師第1号となる浪子は、戦前戦中時代の女性医師と、戦後世代をむすぶ、かけ橋になればと思い、会長職を引き受けたと言います。

初夏から夏にかけて年に1回総会を開き、同時に県内各地で活躍する医師による講演会を開催しました。また、平成17年度からは、学術講演会もスタート。18年度からはその学術講演会も年2回の開催となりました。田所浪子は、県女医会そのものの活動を充実させ、会員に研修・研鑽の場を広く提供することを心がけています。

田所会長時代には、新たに県女医会名簿を作成、会則改定により県内を4地区に分け、それぞれの地区に地区理事を置くこととなりました。

東毛地区 桐生市、太田市、館林市、新田郡、山田郡、邑楽郡

西毛地区 高崎市、藤岡市、富岡市、安中市、群馬郡、北群馬郡、多野郡、甘楽郡、碓氷郡

南毛地区 前橋市、伊勢崎市、勢多郡、佐波郡

北毛地区 沼田市、渋川市、吾妻郡、利根郡

（郡市名は平成17年当時のまま）

また、平成6（1994）年、女子医学生が医学生全体の30%を超えるようになった後、

女性医師の数は着実に増えました。平成18（2006）年の厚生労働省の発表によれば、29歳以下の医師では、35.8%が女性医師となっています。県女医会では、その動きに合わせて、女性医師の就労環境整備や再就業支援活動にも活発に関与しています。

#### 〔国内と医療関係の動き〕

平成14年4月	学校完全週休5日制スタート
平成14年5月	サッカーワールドカップ日韓共同開催 牛肉偽装事件
平成15年3月	重症急性呼吸器症候群（SARS）集団発生（中国広東省や香港、ベトナム等）
平成15年5月	健康増進法施行
平成16年	鳥インフルエンザ騒動
平成16年1月	陸上自衛隊先遣隊を戦闘地域のイラクに派遣
平成16年8月	アテネオリンピック開幕
平成17年3月	愛知万博、愛・地球博開幕
平成17年4月	JR 福知山線脱線事故
平成17年4月	個人情報保護法施行
平成17年6月	改正介護保険法成立
平成17年12月	厚生労働省が2005年の人口動態統計の年間推計を発表。日本の人口が1899年の統計開始以来初の自然減
平成18年1月	ライブドア捜査
平成18年2月	トリノ冬季オリンピック開幕
平成18年4月	障害者自立支援法施行
平成18年6月	イラクから自衛隊撤収
平成18年12月	新教育基本法成立・施行
平成19年1月	防衛省昇格
平成19年6月	政府が「消えた年金」問題対策発表
平成19年9月	郵政の分社・株式会社化 食品偽装問題
平成20年1月	議員立法の薬害肝炎被害者救済特別措置法が成立
平成20年8月	北京オリンピック開幕
平成20年1月	中国製ギョーザで中毒
平成21年1月	オバマ大統領就任
平成21年5月	裁判員制度施行
平成21年8月	衆院選で民主党大勝、政権交代

### ■群馬県女医会のあらたな使命

長らく、「少子高齢化社会」と叫ばれていましたが、平成21（2009）年12月、厚生労働省の発表によれば、日本在住の日本人人口は、過去最大の7万5千人の自然減となる見通しで、出生数が前年に比べ大幅減となったことに加え、死亡数も昭和22年の統

計開始以来、最多を記録。すでに3年連続で、日本の人口は自然減となっており、「化」のとれた「少子高齢社会」に突入しています。

医療や福祉の充実が期待される反面、医師の絶対数は不足ぎみで、産科医及び小児科医の不足をはじめとする医師の診療科の偏在も指摘されています。一方、医学部における女性医師の職位の低さ、学会等における女性の役員就任率の低さ等も各方面で顕在化しています。

そんな中、群馬県女医会では、平成21年（2009）年3月6日、日本医師会、群馬県医師会と共催で、「女子医学生・研修医等をサポートするための会」を開催しています。

基調講演を担当した群馬県女医会副会長の山田邦子(平成20年～ 日本女医会理事)は、女性医師の現況について述べるとともに、総括として「今後女性医師比率が上昇していく事を踏まえ、女性医師が医療に欠かすことのできない担い手である事を医療機関をはじめとする関係者が十分に認識し、多様な勤務形態の確保や、院内保育所優先的な利用といった、出産・育児など多様なライフステージに応じて切れ目無く働くことが可能となる環境を整備する事により、特に病院における継続的な勤務を促す必要がある」と提案しました。

山田は今後も、県女医会としても積極的に、女性医師の就業環境について考え、女性医師支援を行っていきたいと考えています。

明治18（1885）年荻野吟子が公許女医第1号になってから、125年。明治39（1906）年、群馬県の真中すずが県女性医師第1号となって百有余年、昭和22（1947）年の戦後の復興期、群馬県女医会がゆるやかにつながりはじめて60有余年。さまざまな困難を乗り越えながら、多くの人命を救い、多くの人の心の支えとなった群馬の女性医師たちがいました。高い能力と高い志をもつ医師として、また、女性らしい優しさや、細やかさ、時には思い切りの良さを持って、人々の生活を支えてきました。日本で、群馬で、開業医、勤務医、行政職、研究職、それぞれの立場で女性医師が活躍しています。多くの足跡を残した先人たちに倣い、時にはそれを超えようとする気概をもちながら、群馬県女医会は、これからも、多くの女性医師の「誕生」と「活躍」に寄与していきます。



真中すずの医師免許

最後に昭和32年、ちょうど医院開業50周年に書かれた、県女医1号・真中すずの一文をご紹介します。県民の母と称えられたすずの言葉は、50年後の今も、そしてこれからも、私たちを大きく力づけてくれることでしょう。

## 五十年一日

真中すず

私が前橋の現在地で開業したのは丁度今から50年前で（先日心ばかりの開業50周年の内祝をやりました）他に市内に開業医が26人ありました。即ち27人目の開業医でした。勿論女医としては唯一の開業医でした。然しそれまで私は、産婆や看護婦の見習いを集めて医療に従事する婦人の養成に当たっておりましたし、場所柄婦人の多いところでしたので「女医開業」も特別の関心をもたれたとは思われませんでした。大正頃は前橋に芸者が確か150人ばかり居て希望投票で健康診断医を決めたものですが、100人ぐらいは私のところにやって来たものです。此の人達を通じて私は社会の裏やドン底をみつめる機会を与えられたものです。売春禁止法が施行されるという今日から考えると文字通り今昔の思いです。医療制度も社会化して国民皆保険の時代も近づいている現在は、開業医の性格も知らず知らずの中に変化していると思います。十年一日という言葉がありますが今の私にとっては「五十年一日」でした。平凡に誠実に斯の道を歩んできたつもりです。若い先生方の将来には新時代の開業医としてのご活躍があると信じ、心から御期待申上げる次第です。

（『前橋市医師会史 通史編』より）

## 3 補 遺

### ●女性医師に対する就業支援の動き

女子医学生並びに女性医師が急増する昭和50年代以降の「女性医師に対する就業支援」とその関連の動きです。

昭和50年	第1回「日本女医の実態調査」日本女医会
昭和53～54年	女子医学生急増
昭和55年	初めて女性医師の割合が10.02%で1割を超える (総数156,235人のうちの15,659人)
昭和57年3月	日本女医会が「全国女子医学生連絡会議」への後援を決定
昭和61年	女性医師の数は2万人を超える
昭和61年4月	男女雇用機会均等法施行
昭和61年	第2回「日本女医の実態調査」日本女医会 10年前に比べ、多種にわたる審議会、委員会に参加する女医が増え、民間団体の役員としての活動、福祉活動など、近年の女医の社会進出には目覚ましいものがある
平成2年	「1.57ショック」厚生省(当時)がまとめた89年の人口動態統計で、合計特殊出生率(1人の女性が生涯に産む子供の数)が過去最低の1.57となったことが発表
平成3年	育児休業法成立。男女とも取得できる法律に
平成6年	女子医学生が30%を超える
平成7年12月	厚生省、20歳代の医師4人に1人が女性と発表
平成8年以降	女子医学生の入学数は横ばい
平成10年	日本女医会環境整備小委員会活動開始
平成11年4月	要望書「女性医師の働く環境の改善と支援体制の整備拡充を求めて」(日本女医会)小淵総理大臣以下数名の閣僚等に提出
平成11年10月	要望書に対するアンケート実施
平成12年3月	環境整備小委員会より分科会へ送付した要望書が『朝日新聞』朝刊第一面に載る
平成12年8月	女子医学生のための夏季セミナー「医師としてのあなたの未来を築くために」(日本女医会)が女性と仕事の未来館ホールにて開催
平成18年	厚労省、29歳以下の医師の35.8%が女性医師と発表
平成18年7月	群馬県女性医師再就業支援事業施行
平成18年11月	女性医師再就業支援事業 日本医師会が厚労省と委託契約
平成18年	日本医師会女性医師バンク開始(厚労省「医師再就業支援事業」委託)



平成19年	群馬大学付属病院に病児も扱う院内保育園開所
平成21年 3月	日本医師会・群馬県医師会・群馬県女医会主催「女子医学生・女性医師等をサポートするための会」基調講演／シンポジウム
平成21年 3月	日本医師会男女共同参画委員会「女性医師の勤務環境の現況に関する調査」発表
平成21年 5月	日本医師会女性医師支援センター・シンポジウム開催
平成21年12月末現在	女性医師バンク、求人1,225件（延べ2,761件）、求職286名（延べ498名）、就業および再就職決定194件

### 【群馬県の女性医師就業支援事業】

- ・群馬県ドクターバンク事業
- ・「おかえりなさい お母さん先生（女性医師再就業支援事業）」：メールマガジンによる女性医師の再就業に関する情報提供／県内の基幹病院への再就業を希望する方を対象とした「再教育研修」事業／再就業に関する相談支援

### ●群馬県における平成の女性医師の数

群馬県における平成20年の医師の数は、3,476人（全医師数）で、昭和51年の約2倍となっています。男女別に見ると、男性医師が1.86倍増えているのに比べ、女性医師は3.97倍と、女性医師のほうが勢いよく増えています。

また、昭和57年以降、平成20年までに新しく増える女性医師は、年平均18.84人ですが、平成2年以降に限って見ると、年平均22.8人と、平成に入ってから女性医師の増加率がアップしていることがわかります。特に、平成10年は、平成8年に比べ、19.8%増で、隔年で医師数の統計をとりはじめた昭和57年以降、最も高いポイントとなっています。

一方、全国の女性医師の割合が、全体の1割を超えたのは、昭和55（1980）年ですが、群馬県内の女性医師数が県全体の1割を超えたのは、平成4（1992）年です。このように、全国でも、群馬県においても、女性医師の数は着実に増えていますが、なかなか全体の2割に届きません。平成18年の全国データでも17.25%、群馬県でも、平成20年のデータで、17.0%です。

### ●増える女性医師の割合、急がれる環境整備

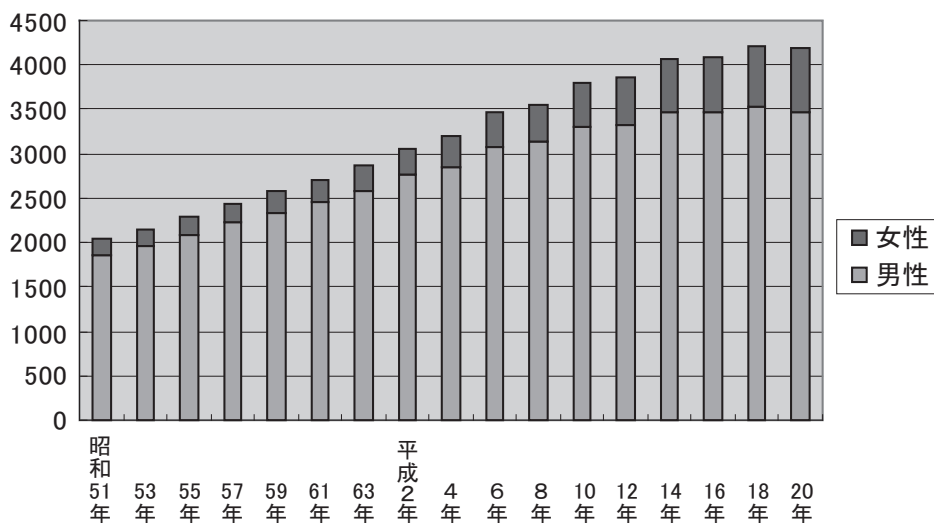
しかし、平成18年全国の統計を細かく見ていくと、すべての年齢階級で男性医師の占める割合が高いのは当然ですが、「女性医師」の割合は、69歳以下では年齢階級が低

表7 ■群馬県の男女別医師数の推移

年代	男性	女性	総数	女性医師傾向	
				構成比	対前々年比
昭和51年	1,864	179	2,043	8.76	
53年	1,955	196	2,151	9.11	1.095
55年	2,075	207	2,282	9.07	1.056
57年	2,224	221	2,445	9.04	1.068
59年	2,336	234	2,570	9.11	1.059
61年	2,455	253	2,708	9.34	1.081
63年	2,586	283	2,869	9.86	1.119
平成2年	2,763	300	3,063	9.79	1.060
4年	2,855	350	3,205	10.92	1.167
6年	3,077	401	3,478	11.53	1.146
8年	3,141	415	3,556	11.67	1.035
10年	3,308	497	3,805	13.06	1.198
12年	3,330	528	3,858	13.69	1.062
14年	3,469	602	4,071	14.79	1.140
16年	3,464	630	4,094	15.39	1.047
18年	3,530	686	4,216	16.27	1.089
20年	3,476	711	4,187	16.98	1.036

\* 昭和50年から平成4年の数値は、医療施設従事者医師数

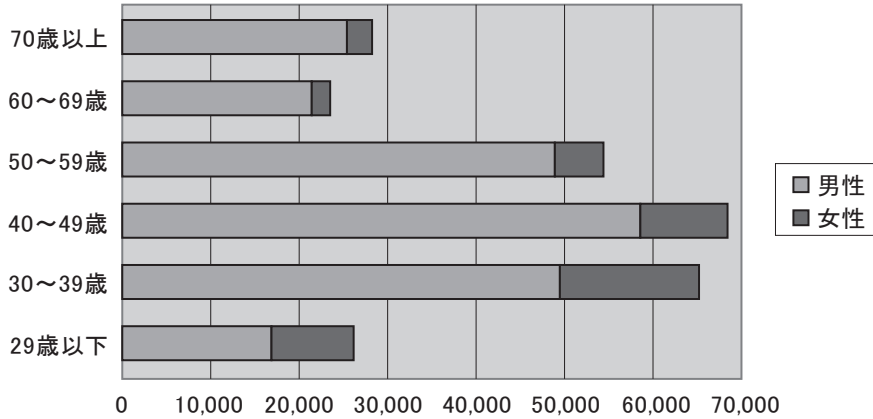
\* 平成6年から平成20年は、医師数



(『医師・歯科医師・薬剤師調査』厚生労働省)

表8 ■性・年齢階級別全国医療施設に従事する医師数

(平成18年12月31日)



(『医師・歯科医師・薬剤師調査』厚生労働省)

くなるほど多くなり、「29歳以下」では35.8%となっています。すでに、平成6（1994）年、女子医学生生の割合が30%を超えているので、女性医師の割合が全体で2割を超え、3割に達する日は、そう遠くないと言えます。

ただ、この時、配慮しなければいけないことは、女性のライフステージに合わせた「就業環境」を医療の世界でも整えていかななくてはならないということです。

「女性医師に対する就業支援一覧」（P46）にもあるように、「女性医師の実態調査」が行われたのは、昭和50（1975）年で、この時の日本女医会による調査が、組織的な調査としては全国初でした。それから30年以上経た平成18（2006）年11月、厚生労働省が「医師再就業支援事業」を日本医師会と委託契約します。この事業の柱は ①女性医師バンクの創設・運営 ②長期離職医師の再研修の支援 ③女性医師の勤務環境の整備についての啓発活動の3つで、事業の運営に当たっては、日医会館内に、日本医師会女性医師バンク中央センター（センター長：宝住与一副会長）を設置し、医師再就業支援事業部長を置き、求人求職情報のデータベース管理や再研修の支援、勤務環境整備についてのさまざまな取り組みを行うことになっています。

平成19（2007）年1月に開始された日本医師会「女性医師バンク」の成果は、平成21（2009）年12月末現在、次のようになっています。求人1,225件（のべ2,761件）、求職286名（のべ498名）、就業および再就職決定194件。

また、平成20年11月～平成21年1月にかけて日本医師会が実施した「女性医師の勤務環境の現況に関する調査」は、女性医師を対象としたはじめての全国的なアンケート調査でした。全国の病院に調査票を送付、それらに勤務する女性医師を対象とした

---

ところ、7,500名の回答が寄せられました。回答数の中では、40歳未満が66.3%を占め、半数以上が医師会未入会の女性医師であるため、女性医師の勤務環境に関し、現状に即した正確な調査結果を得られたと評価されています。

「回答者の約8割が常勤医師で、彼女たちの45.4%は1週間に51時間以上の実勤務を行い、84.9%が宿直翌日に通常勤務についています。そのような中で、彼女たちがどのような勤務環境を望み、何を求めているのかを知り、女性医師が誇りを持って医師としての仕事を続けられるように対応することが、男女を問わず勤務医師全体の勤務環境整備につながるものと確信しております。(抜粋)」と日本医師会男女共同参画委員会の中川やよい委員長が報告書(平成21年3月発行)の中でまとめています。

加えて、平成21(2009)年5月、日本医師会女性医師支援センター・シンポジウムが、「女性医師の更なる活躍のために」をテーマに開催されました。基調講演の中で、外口崇厚生労働省医政局長は、「女性医師のさらなる活躍のためには、男女を問わず、すべての医師が、自分の理想の医療を実行することが可能となるような余裕のある職場環境を整えることが大切である」と述べ、最も大事なことは、「女性であれ、男性であれ、短時間勤務の正職員が気兼ねなしに入って来られるシステムを構築することである」と主張しました。そして、国が現在取り組んでいる、「短時間正規雇用支援事業」「医師交代勤務等導入促進事業」「病院内保育所事業」などを積極的に推し進めたいとの考えを示しています。また、今後の方向性として、「女性医師対策は、医師不足対策において最重要課題である。女性医師の就業率を高め、医療分野が男女共同参画のモデルとなるよう早急に対策を進める」としました。

21世紀に入り、10年を過ぎようとする今、厚生労働省や日本医師会が積極的な動きを見せ、女性医師の就業環境整備は、やっとその緒についたところと言えます。

### ●群馬県内の女性医師の就業環境整備

群馬県内の動きとしては、平成18(2006)年7月1日、「群馬県女性医師再就業支援事業」が施行されました。その後、「群馬県ドクターバンク事業」や群馬県「おかえりなさい お母さん先生(女性医師再就業支援事業)」がはじまり、メールマガジンによる女性医師の再就業に関する情報提供、県内の基幹病院への再就業を希望する方を対象とした「再教育研修」事業、再就業に関する相談支援等が稼働しています。

また、平成19(2007)年には、群馬大学付属病院に、病児も扱う院内保育園が開所され、女性医師をとりまく就業環境は、少しずつですが、理念だけでなく、具体的に整えられつつあります。

## 【参考文献】

- 多川澄子（編集）杉田鶴子（発行）『日本女医会雑誌 第68号』日本女医会雑誌発行所  
昭和10年8月27日
- 多川澄子（編集）杉田鶴子（発行）『日本女医会雑誌 第69号』日本女医会雑誌発行所  
昭和10年10月27日
- 多川澄子（編集）杉田鶴子（発行）『日本女医会雑誌 第70号』日本女医会雑誌発行所  
昭和10年12月27日
- 多川澄子（編集）杉田鶴子（発行）『日本女医会雑誌 第71号』日本女医会雑誌発行所  
昭和11年2月27日
- 多川澄子（編集）杉田鶴子（発行）『日本女医会雑誌 第72号』日本女医会雑誌発行所  
昭和10年4月30日
- 多川澄子（編集）杉田鶴子（発行）『日本女医会雑誌 第73号』日本女医会雑誌発行所  
昭和11年6月30日
- 秋山龍三『日本女医史 追補』日本女医会本部 昭和37年9月15日
- 『日本女医会史百年史』編集委員会『日本女医会史百年史』(株)日本女医会 2002年5月18日
- 丸山清康『群馬の医史 群馬県医師会十周年記念刊行』群馬県医師会 1958年12月10日
- 五十嵐誠祐・柳井久雄『医の先人たち—赤城山南麓・勢多郡地方—』五十嵐医院 平成7年3月31日
- 群馬県医師会史編纂委員会『群馬県医師会史 資料編Ⅰ』群馬県医師会 平成8年7月24日
- 群馬県医師会史編纂委員会『群馬県医師会史 資料編Ⅱ』群馬県医師会 平成8年7月24日
- 前橋市医師会史編さん委員会『前橋市医師会史 資料編』前橋市医師会 昭和57年10月15日
- 前橋市医師会史編さん委員会『前橋市医師会史 通史編』前橋市医師会 平成4年5月25日
- 高崎市医師会30年史編集委員会『高崎市医師会三十年史』高崎市医師会 昭和56年7月25日
- 高崎市医師会40年史編集委員会『高崎市医師会四十年史』高崎市医師会 昭和63年12月21日
- 高崎市医師会50年史編集委員会『高崎市医師会五十年史』高崎市医師会 平成10年6月25日
- 高崎市医師会60年史編集委員会『高崎市医師会六十年史』高崎市医師会 平成20年3月25日
- 桐生市医師会史編纂委員会『桐生市医師会史』桐生市医師会 昭和51年12月17日
- 日航機事故記録編纂特別委員会『遺体の身元を追って—日航ジャンボ機墜落と歯科医師の記録』群馬  
県歯科医師会 昭和61年8月12日
- 「日航123便事故と医師会の活動」編纂委員会『日航123便事故と医師会の活動』群馬県医師会 昭和  
61年10月1日
- 前橋赤十字病院八十年史編纂委員会『前橋赤十字病院八十年史』前橋赤十字病院 平成5年8月5日
- 飯塚 訓『墜落遺体—御巢鷹山の日航機123便』講談社 1998年6月24日
- 藤岡多野歯科医師会八十年史編纂委員会『藤岡多野歯科医師会八十年史』藤岡多野歯科医師会  
平成17年6月16日
- 丑木幸男・宮崎俊弥『群馬県の百年 県民百年史10』(株)山川出版社 1989年1月28日
- 石原征明（監修）『写真集 群馬の昭和』あかぎ出版 2004年12月26日
- 根岸省三（編集）『高崎の明治百年史』高崎市社会教育振興会 出版責任者・中島徳次郎 昭和44年  
1月1日
- 高崎市史編さん委員会『新編 高崎市史 資料編10 近代現代Ⅱ』高崎市 1998年3月31日
- 前橋市史編さん委員会『前橋市史 第四巻』前橋市 昭和53年12月1日
- 『群馬県百年史 下巻』群馬県 1971年8月20日
- 群馬県立歴史博物館『ぐんまの鉄道 上信・上電・わ鐵のあゆみ』群馬県立歴史博物館

---

2004年4月24日  
田島武夫（編著）『ふるさとの思い出写真集 明治大正昭和 高崎』（株国書刊行会 昭和56年1月30日  
群馬県青少年室『郷土史にかがやく人々』群馬県 昭和45年3月31日  
（財）東京女性財団『先駆者たちの肖像—明日を拓いた女性たち』（財）東京女性財団 1994年7月15日  
南雲榮治・柳井久雄（監修）『目で見る 前橋の100年』（株郷土出版社 2006年12月8日  
石原征明（監修）『目で見る 高崎・安中の100年』（株郷土出版社 2006年12月6日  
亀田光三・川村勝保（監修）『目で見る 桐生・伊勢崎・みどりの100年』（株郷土出版社  
2006年11月2日  
『ウェブ桐生タイムス 論説 昭和初期の桐生織物』2009年11月27日  
『Wikipedia 桐生市』  
前橋市『広報まえばし 都市づくり100年前橋アラカルト・真中すず』前橋市  
1991（平成3）年2月15日号  
『広報たかさき たかさき100年 第51回女性の社会進出と最初の女医』高崎市  
西川春江『若き女医 渡良瀬川』西川書店 1963年9月25日  
田所作太郎・田所浪子『美しい花にも毒がある』上毛新聞社 2002年12月1日  
野間清治顕彰会『岸直枝伝 ふるさとの風第六集』 2006年5月1日  
『群馬県立高崎女子高等学校九十年誌』 平成元年11月  
『東京女子医科大学 卒業名簿』 平成19年8月  
藤井隆至（編集）『群馬県 埼玉県の統計 明治前期全国府県別統計集成6』（株東洋書林  
1997年10月30日復刻版 ※復刻原本・総務庁統計図書館  
『群馬県衛生統計概要 昭和23、24、25年』群馬県衛生部 昭和27年6月1日  
『衛生年報 昭和34年』群馬県衛生民生部 昭和36年4月30日  
『衛生年報 昭和45年』群馬県衛生部 昭和47年2月  
『衛生行政概要 昭和46年12月』群馬県衛生部 昭和47年3月31日  
『衛生行政概要 昭和51年12月』群馬県衛生部 昭和51年12月25日  
『衛生環境行政概要 昭和53年12月』群馬県衛生環境部 昭和54年3月25日  
『衛生環境行政の概要 昭和55年度』群馬県衛生環境部部長室 昭和56年3月  
『衛生環境行政の概要 昭和61年度』群馬県衛生環境部部長室 昭和61年11月  
『衛生環境行政の概要 昭和62年度』群馬県衛生環境部部長室 昭和62年10月  
『衛生環境行政概要 平成5年度』群馬県衛生環境部部長室 平成5年10月  
『保健福祉統計年報 平成10年刊』群馬県保健福祉部保健福祉課厚生情報係  
『保健福祉統計年報 平成13年刊』群馬県保健福祉部保健福祉課厚生情報係 平成13年3月  
『健康福祉統計年報 平成21年刊』群馬県健康福祉部保健福祉課総合政策係 平成21年3月  
猪口邦子『猪口邦子サイト 兵庫県女性医師の会フォーラム講演資料 女性医師の数』  
平成19年6月9日  
福沢恵子『日経ウーマンオンライン 働く女の40年史』日経BP社 2009年9月8日～2010年1月15日  
『日医ニュース 第1088号 日本医師会女性医師バンク開設』日本医師会 平成19年1月5日  
『日医ニュース 第1147号 日本医師会女性医師支援センター・シンポジウム』日本医師会  
平成21年6月20日  
『女性医師の勤務環境の現況に関する調査』日本医師会男女共同参画委員会 平成21年3月

私の医学生生活は、第2次世界大戦の末期の昭和20年7月から始まり、1ヶ月で終戦となり、最も過酷な時代の5年間でした。卒業と同時に両肺結核を病み、2年間のサナトリウム生活を経て、昭和28年、高崎保健所の結核担当医として出発しました。

当時高崎には、海老原・勝俣・中沢・その他数人の先生により女医会がありました。年に1～2度親睦の会があり、私はその末席にいました。

私は、昭和36年に前橋で開業し、昭和30年代だと思いますが、前橋で第1回群馬県女医会総会が盛大に開かれました。当時は戦後の復興もままならず、ホテルも大会場もなく、敷島公園内の楽々園が会場でした。

真中すず先生を中心にして県内各地から数10名の女医が参集し、集合写真を撮ったことを記憶しております。会長の真中先生は、かなりの御高齢に見受けられました。名簿によると、明治38年卒「日本医」とあり、済生学舎出身と聞き及んでいたもので、女医会百年史を調べたところ、女性排斥等で廃校になった済世学舎の学生を日本医学校が引き継ぐ形でスタートしたと記されており、何れにせよ相当の苦難の道であったと思われます。

最近、偶然発見したのが図1です。昭和46年6月20日の県女医会の桐生医師会館における書類です。昭和46年度、支部長岸直枝と記され、ここで支部が桐生に移されました。以下県女医会の主旨として書かれた文を転記いたします。

「諸先生方の貴重なご発言があり、女医会も楽しく終了いたしました。女医でなければできない事も多くあり、大いに頑張りましょうと励まし合いました。また真中先生から四季折々においしい物でも頂きながら、雑談し合い、自らの向上にも役立たせたいご意向に全員賛成し、早速当番桐生地区で近く計画したい。」と結ばれております。

次の図2は、昭和48年4月7日、森山荘において県女医会総会が開かれた書類です。森産業椎茸研究所見学を行い、来賓に県医師会長の池上先生、参議院議員丸茂先生、衆議院議員羽生田先生、桐生医師会会長藤江先生をお招きし、会員も34名集まり総会が開かれ、集

# 1947～1969 第一代真中すず会長の時代

田所浪子

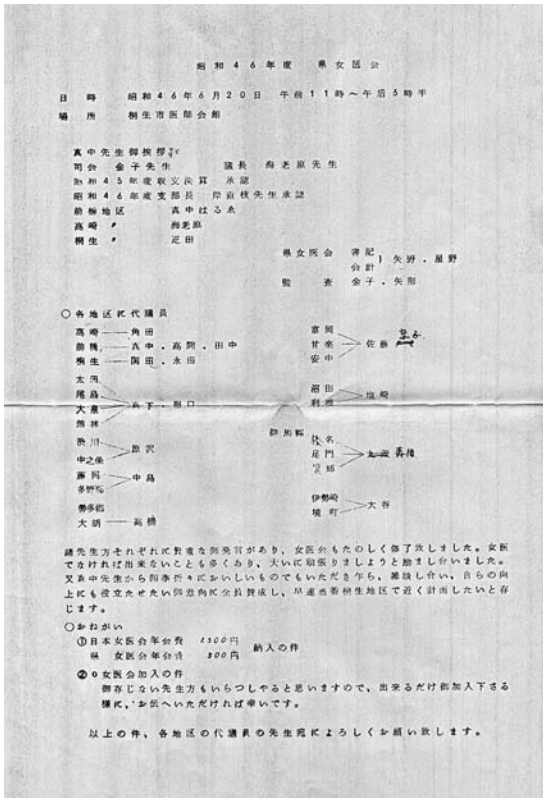


図1

合写真に出席者名も記されており、また決算報告まで克明に書かれております。

次の図3は、これらが私の持っている最も古い資料です。この発見は私にとって宝物を見つけたような喜びでした。記録と言うことの大事は年月を経て、初めて価値が出てくるものだと思います。これらの資料で私の責を果たさせて頂きます。



昭和48年 県女医会総会



昭和48年度群馬県女医会総会		昭和46年～47年度 群馬県女医会決算報告書	
日時 昭和48年4月7日(土) 午後3時 場所 桐生市平井町 森山荘		(収入の部)	
(1) 高野産業研究所見学 7:30～4:00 (2) 開会式 7:40:00 司会 金子先生 (3) 閉会挨拶 定田先生 (4) 支部長挨拶 岸先生 (5) 出席者紹介 (6) 議 事 (i) 議長 減出 (ii) 昭和47年度事業報告 (iii) 昭和47年度決算報告 (iv) 昭和48年度事業計画案審議 (v) 昭和48年度収支予算案審議 (7) 閉 会 水田先生 (8) 会 費 挨拶 岸先生 来賓挨拶 県医師会長 池上先生 参議院議員 九犬堂先生 衆議院議員 羽生田先生 桐生医師会長 藤江先生 (9) 閉 会 水田先生		前年度(昭45)繰越金 4,227 花贖代(昭45)現金返還 2,000 昭和46年度県女医会費(41名分) 2,050 昭和46年度総会費 3,921 日本女医会より助成金 4,200 昭47年度県女医会費(17名分) 8,500 昭和45年度日本女医会より助成金 2,500 昭和48年度県女医会費(18名分) 9,000 利 息 1,793 計 98,593	
		(支出の部)	
		藤原先生御贈前花贖代(昭46・12) 5,000 結年度換入分基金(至誠会)(昭46・12) 3,600 金子先生御主人様御贈前花贖代(昭47・5) 5,000 佐藤先生御贈前花贖代(昭47・8) 5,000 計 18,600	
		残 金 ￥ 79,793 (昭48.4.7現在)	
		会 計 矢野・星野 監 査 金子・矢野	

図2

昭和48年4月 県女医会出席者名簿

松本 光子	多野 昭新町 巨六八	矢野 登良子	桐生市藤原町 品品品
中島 妙子	藤原市 藤岡 二一	森 美枝	桐生市藤原町 品品品
山本 葉子	利根郡 新治町 湯宿	高野 頼子	桐生市 未出 一・二品
海老原 名子	高崎市 昭和町 一〇二	早野 高孝	大田町 三ノ下 一〇一
大山 研一	高崎市 赤川町 三三三・二〇〇	大野 コシ	大田町 三ノ下 一〇二
前田 知恵子	高崎市 若松町 一		
狩野 登志子	前橋市 北代町 八三三		
小林 香子	前橋市 御前町 三三三		
佐藤 芳江	前橋市 御前町 三三三		
高野 美保	前橋市 御前町 三三三		
田所 浪子	前橋市 御前町 三三三		
真中 昌子	前橋市 御前町 三三三		
森田 中子	群馬県 群馬町 足門 四二一		
大谷 節子	伊勢崎市 宮前町 四二一		
真下 静枝	群馬県 群馬町 下倉		
丸茂 昌子	上野町 一〇五二		
阿部 喜代子	桐生市 和生町 一三三八		
新井 栄子	桐生市 水袋町 四二二		
池上 洋子	桐生市 榎町 三三三		
金子 美枝	桐生市 榎町 三三三		
川辺 志津子	桐生市 榎町 三三三		
岸 直枝	桐生市 榎町 三三三		
関田 栄枝	桐生市 榎町 三三三		
楠本 雪子	桐生市 榎町 三三三		
永田 頼子	桐生市 榎町 三三三		
足田 静江	桐生市 榎町 三三三		
水谷 達子	桐生市 榎町 三三三		
三丈 昭子	桐生市 榎町 三三三		
紀 昌子	桐生市 榎町 三三三		

図3

# 1970～1985 第二代岸直枝会長の時代

佐藤  
ち江

群馬県女医会桐生地区では、日常の診療の中で女性の医師として感じる悩みや不安などを大先輩の直枝先生に聞いてもらおうと、時々集まっていました。

直枝先生がお父様の後を継いで桐生で開業されたのは昭和9年、その頃桐生医師会の医師数は僅か25人、そのなかでたった1人の女医直枝先生は「女の医者に何が出来るのか」という、周囲の奇異の目と偏見にさらされながらも「病気を診る医者でなく病人を診る医者になる」とう信条をモットーにして、患者さんと喜びも悲しみも分かちあえる医療を貫いておられました。集まった会員は抱えていた不安や悩みも、先生からのご指導、ご助言ですっきりと心晴れたのです。

その後「女医さんだといろいろ相談しやすい」という、患者さんや地域の女性たちからの声が度々聞かれるようになりました。そこで職業を持ち、その上家庭の主婦として子育てもしてきたという経験を伝えれば、女医会の地域活動の一環にもなるだろうと、会員が交代で講師を務めて「マザーズセミナー」を開催することになりました。昭和53年9月のことです。セミナーを続けたことは「ぐんま思春期研究会」を立ち上げる大きな力となり、同会は昭和57年発足しました。

## 日本女医会総会の開催

群馬県女医会での画期的なイベントは昭和55年5月、日本女医会の総会ならびに研修会の開催会場を引き受けたことでしょう。県内にはまだ都会のように大きなホテルや立派な会場がなかった時代、日本全国から200人を越える女医たちが参加するという、大きな会の開催を引き受けるのは無理ではないだろうか。いろいろ協議を重ね相談した結果、伊香保温泉ではどうかという声が出ました。

万葉集の昔から湯治場として和歌にも詠まれている伊香保、不治の病、結核のため愛する夫と別れたという悲しいロマンス「不如帰」の著者である明治の文豪、徳富蘆花にも愛されたというこの地に、新しい医療技術に取り組む女医会の集まりが開催されるのは意義深

いことではないかという意見があって、お引き受けすることになりました。温泉と情緒のある石段町を楽しんでもらいたい、しかし宿を振り分けた際、宿泊費や接待に違いがあっては参加者に申し訳ない。群馬県女医会の負担する事務量や経費はどうなるのか等々を検討した結果、同一の旅館に頼んで見たらという意見が出て、一館を借り切って参加人員を200人と設定し、宿泊も研修会も懇親会もすべてを一括して経費を旅館に支払うことにしました。第一の関門は解決しましたが、参加人員が少なければ群馬県女医会が大きな赤字を背負い込むことになるのです。幸い予定より多くの参加申し込みがありホッとしました。

研修は格調高く、当時群馬大学中央放射線部副部長の平敷淳子先生に依頼し、「総合画像診断の体系化」を演題として講演をいただきました。先生の歯切れのいい流暢な英語を交えた講演は参加者全員を魅了しました。その夜の懇親会は群馬県女医会員はもちろん、高崎、桐生そして沼田医師会の男性医師会員を交えたコーラスやバンドなどによるポップスやシャンソンが演奏され、最後には八木節を全員で踊るほど盛り上がりました。

翌日は青葉香る榛名湖、榛名神社を回るコースと、桐生のきのこ会館で昼食、機織工場の見学とショッピングのコースに分かれて、上州の初夏を満喫して散会となりました。後日心温まるいい会だったとお便りが届き、苦労した甲斐があったと会員一同喜んだものです。

## 死者から生命を考える

東京都医務観察院院長を平成元年8月、定年で退任された上野正彦先生が、長年にわたる監察医という立場で2万体を超す検死、解剖に携われたというご経験を言葉が発しない筈の死者自らが死亡前後の状況を語り出すというまさに「死体は語る」の体験談を同名の著書として出版された平成3年。病気や怪我で傷ついた人たちの診療に励んでいる群馬県女医会でも、死を通して人を診る視野も学んでみたいと、上野先生を講師に研修会を持ちました。

---

当日の講演は私どもに大きな感銘を与えてくれました。同じ火災現場で死んだ家族でも一酸化炭素を吸ってから死亡したのか、吸う前にすでに焼死していたのかで死亡時刻に差が生じ、その後の遺産相続のトラブルになったなど死亡診断書1枚の重要性がわかりました。そして診断書1枚も心して書くべきと考えさせられました。

近年、事故や事件にまきこまれたとか、いじめ、虐待に耐えかねて自らの命を絶つなどという報道が目につきます。さらにインターネットサイトで見知らぬ人と一緒に自殺したという報道にさえも接します。生命の尊さ、生きることの意義は死を選んだ当事者だけでなく地域社会のなかで真摯に考えなくてはと思うのです。

私は現東京女子医大、当時東京女子医専をこれから戦争が熾烈になって行こうとする昭和17年9月繰り上げ卒業しました。男性医師は戦争に徴集され、戦後の医療は女性医師の力を借りる所が大な時代でした。

私は家の事情で大学に残って勉強する事が出来ず、故郷群馬に帰り前橋赤十字病院小児科に勤める事になりました。

赤十字病院は戦時は軍病院になる決まりでしたので、前橋赤十字病院は霞ヶ浦海軍病院の分院となり、小児科は外来と少数の入院患者を診るだけで、入院の大部分は海軍の兵隊を診なければなりませんでした。私たち医師は全て准軍医待遇で仕事をしました。軍病院のことは省略しまして、当時の医療について少し申し上げてみようかと思えます。

戦争中は現在とは違い細菌感染症が猛威を振るった時代で、多くの方がそのために命を落としました。今アフリカの栄養失調の子供たちと全く同じような子供たちも珍しくありませんでした。牛乳などもったいない。白い色をしているから米の摺って煮立てたものでいいんだと姑に言われ、牛乳もやれず蛋白質の不足で栄養失調になり頬潰瘍が出来て穴が開いてしまった子供を診たことがありました。嫁は姑の言う事の何一つ言葉を返せなかった時代が生んだ悲劇でした。

その子に牛乳と僅かなビタミンを与える事でみるみる潰瘍が治って行くのを見て、その効果に驚いたのを今も忘れません。

本当の栄養失調はどんな栄養物も牛乳ですら受け付けませんでした。何を与えても回復せず、ただ死ぬのを見ているしかありませんでした。夏は赤痢や疫痢が流行り、一夜にして命を失う子供も珍しくありませんでした。幸い命が助かってもしそういう子供は冬になると必ずといっていいほど急性肺炎になって死にました。

前橋の空襲では多くの方が被害に会い、日赤はもちろん市内の学校には多くの患者があふれて、病院はもとより市内の学校などに収容されましたが、治療のための薬も衛生材料もなく、私たちは手をこまねいていた残念さを忘れることができません。

話題が少しそれました。

1986～1990  
第三代会長として

丸茂 畠子

---

終戦後家庭の事情で日赤をやめ、父に代わって内科の開業医として私の生活が始まりました。当時高崎では女性医師の数は少なく、勝俣栄子先生と中沢於君先生くらいでした。やがて角田智恵子先生も加わり、先生方もにぎやかになったと喜んでくださり可愛がってくださり、お雛祭りや食事に呼んで慣れない私たちにいろいろ教えてくださいました。

県女医会のほうでも桐生の岸直枝先生は、県内の女医達を集めて懇親会をして、私たち女医をまとめてくださいました。偉大な岸先生にすっかりたよりきっていました。

昭和61年7月桐生で女医会が開かれた席上で、今度から高崎でやってと頼まれてしまいました。当時高崎は海老原先生が私たちの先輩としてまとめてくださっていました。が、ご高齢でもあり私が角田先生より上級ということで、私が会長になることがまりました。

私はまず県下の女医さんがどれくらいおいでになるかまとめるための名簿作りを始めました。全県下の分る限りの先生方に電話でご連絡を取り、ご様子を伺いました。そしてポケットサイズの名簿を作りました。これは大変でしたが、また楽しい仕事でもありました。

会則を作り年1回総会を開く事とし、講師の方をお呼びして勉強したり、参考にしたり出来るよう心がけました。

今では想像もつかないような男女差別の中、女医の道を開いてきてくださった岸先生のお話を伺ったのもその一環でした。その他堅い事ばかりでなく、アトラクションを楽しんだり、食事を共にして楽しみ、また視野を広げるため日本女医会の役員の方をお呼びしたり、県外の女医さんたちにも声をかけ楽しく過ごすことを心がけました。“又会う日まで”の曲を皆で手をつないで合唱して、日ごろの苦勞を慰めました。

私は平成3年、高女の先輩であり日本女医会の理事である先輩のお声により日本女医会の理事になりました。後任に角田先生に会長をお願いしました。先生は一般の特に女性の啓蒙を図るさまざまな計画を立て活躍してくださいました。

現在高崎は女医という呼称をやめ、女性医師の会として新しく懇

親の場を持っております。男性の医師に勝るとも劣らぬ女性医師の方々のご活躍は多くの患者さん方々から慕われ、細やかな医業に携わっておられる事はまことに喜ばしい限りです。

# 1991～2003 第四代会長として

角田智恵子

第3代会長の丸茂先生が日本女医会の理事になられたので、そのあとを継ぐことになりましたが、私が会長を務めた12年間で最も力を入れたのは、やはり「女医会フォーラム」です。一般市民の方に、健康や病気について啓蒙活動をするのも、県女医会の役目と思い、医学の各分野の専門の先生に高崎に来ていただき、ホテルの大広間が会場でした。

私はそれまで、そういったことを手掛けた経験はありませんでしたが、高崎女医会の先生方を中心に、特に若い先生方からいろんなアイデアを出してもらって、進めることができました。副会長だった吉浜敦先生はワープロが得意だったので、ちらしやプログラムを上手に作って下さいました。

第1回の平成4年は、高崎市の耳鼻科医・古川先生が、真木外科病院の茂木條二先生をご存じということで、「窮屈でない靴の話」という演題で、外反母趾予防の講演をしてもらい、無事済ませました。平成5年の第2回は、中学生などがよく悩んでいた「スポーツ障害（野球肘）」について、富岡市新井病院の新井先生にお願いしました。

平成6年の第3回は、「健やかな赤ちゃんに育てる為に」という演題で、妊娠中にDHA（ドコサヘキサエン酸）を多く含む食物（さんまやサバ等の青背魚）をたくさん摂取することの大切さを高崎市・角田医院の角田隆先生が講演しました。平成7年の第4回は、エイズを大きなテーマにしました。この時は日本女医会と共催で、「正しい知識が貴方への思いです（エイズ）」を日本エイズ医学会会員・吉永陽子先生に、愛知県で電話相談をなさっていた日本女医会長 佐藤千代子先生が「お母さんの知らない息子たち（電話相談）」というテーマで講演をしてくれました。

エイズにしても、DHAにしても、一般の方にはまだよく知られていない時期に、話題を提供することとなり、来場者のみなさんからとても好評を得ました。最初の3回は、だいたい100人ちょっとの聴講者でしたが、4回めには、200人を超え、第5回の春山茂雄先生による「健康のコツ、脳内革命」では、500人近いお客様を迎えることとなりました。

当時の春山先生の講演料は100万円とも言われていましたが、女医



会フォーラムは一般の方への啓蒙活動の一環なので、入場無料で開催したいとご説明して、破格の講演料で、群馬に来ていただきました。会員の女医の方からは、よく来てくれたものと、ほんとうに驚かれました。当初は200人入る部屋を二間予約しましたが、500人近い申し込みがあったので、開催直前に会場の仕切りをとって、広いスペースを確保しました。それでも当日は、立ち見はおろか、廊下にまで聴講者があふれるほどの盛況ぶりでした。

フォーラムをやりはじめの頃は、いろいろ運営のことがわからない状態でしたが、高崎市の広報課で記者クラブを教えてもらったり、「脳内革命」の講演が話題になって「女医会フォーラム」の認知度もあがり、上毛新聞やエフエム群馬、ラジオ高崎など、マスコミも積極的に取り上げてくれるようになりました。

その後も、平成9年の第6回は東京医科歯科大学 藤田紘一郎教授の「寄生虫の話」、平成10年の第7回は群馬大学皮膚科 宮地良樹教授による「紫外線とスキンケア」、平成11年の第8回は元日本糖尿病学会会長 大森安恵先生「藤原道長一族の糖尿病と現代の糖尿病」と、その時々タイムリーで、楽しく学べるお話をしていただきました。聴講者の数も毎回、200人を少し超えるくらいで安定しました。

誰かが「次はこんなテーマでいかが」と提案すると、みんなが「言われてみれば、それがいいわね」となり、具体的に講師の先生に交渉する時は、会員自身の伝手や、家族の人脈を通じて、お願いにありました。

平成12年の第9回は、奈良薬師寺副執事長 村上太胤師による「心を癒す」、平成13年の第10回は日本いのちの電話連盟常務理事 斉藤友紀雄氏による「中高年の心の危機」、平成14年の第11回は未然医学研究センター代表 劉影先生による「病気を未然に防ぐ東洋医学のすすめ『未病』」と、内容もテーマも多岐にわたるようになりました。

私自身、得意なことではなく、最初は、会長を引き受けたのだから、一生懸命やらなければという責任感ではじめましたが、回を追うごとに熱を帯びてくるような感じでした。来場者は会員の患者さんにとどまらず、新聞の告知記事を見てお越しになった方が、また次の案内もほしいということで連絡先を教えてください、新しい

---

友人を連れてお見えになるということで広がっていきました。

女医会フォーラムは、みんなで一致協力して、11回も開催できました。高崎医師会にご後援いただいたり、製薬会社から協賛金を集める等、当時の県女医会の役員の人達が奔走してくれたおかげで、入場無料で開催することができました。来場者のみなさんには、楽しみながら、新しい知識を得てもらい、ほんとうによかったと思います。

当時、ご協力いただいた関係者のみなさまには、感謝の気持ちでいっぱいです。

平成16年秋、「群馬県女医会緊急総会御案内」として、以下の文面が高崎から送られてきました。「桐生女医会より委託されて20年余になろうとしております。会員も高齢となり、昨年の総会フォーラムが不可能となり、また本年に入り、会長が3か月入院してしまい、まともならず、取り急ぎ下記の通り総会を開催し、検討していただければと存じます。」との通知を受けました。

かねてより今度は前橋への申し入れがありましたが、私も大病で術後1年の身、体調に自信はありませんでしたが、何とか前橋で立ち上げねばと再三の会議の結果、名だけで私が会長をお受けすれば、若い会員が動いて下さると言う事になり、副会長を山田・山下両先生がお受け下さり、強力な助力を得て、前橋がお受けする事になりました。

今までの女医会はほとんど旧制の女子医専卒の方達が支えて来て下さいました。私は、前半2年は女子医専、後半3年は新制度の男子校となると、両制度のつなぎには最適な人物かと考え直しました。

私はただ鍋の蓋のつまみ上に乗っているだけ、でもつまみのない蓋は使い物になりません。案ずる事なく、その他の理事も皆様快く受けて下さり、会は発足いたしました。早速次年度総会までに形を整えなければならず、数回の理事会を経て、会員の募集と名簿作りに取り組みました。県下各医師会に登録されている女医に発送し、200余名の会員が集まりました。

この1年間の役員の方々の活動は目覚ましいものがあり、平成17年7月9日、ロイヤルホテルにて総会を開催する事が出来ました。講師は国際女医会長として名を馳せる平敷先生にお願いし、「国連総会から考える女医会の展望」を講演していただきました。

このようにして毎年春に総会と講演会、秋・冬に会員の勉強会を1、2回行なうのを原則とし、また現在は医師不足のところ、女性医師支援活動の主体となり、国と県の要望に答えるべく努力しております。そして今、県女医会60年史発行という大任に挑んでおります。この60年を生きてきたものの責任として頑張っていますが、完成を期に会長の任を終えさせていただきたいと思っております。

# 2004 第五代会長として

田所浪子



地域医療の現場から



## ■女性医師たちの戦後

# 戦後の医学教育との格闘から

この表題をいただいて、私の身边に起こった第2次世界大戦中にあった時代の変貌を、後の世の方々への歴史として書き残したいと思います。

当時東京在住の私が都立第十高女に入学した1年生の12月8日、大東亜戦争が勃発しました。それから日々、日常の生活は変貌し、英語の時間は敵性語であると使用を禁止され、その時間は農耕時間となり、学校農園でさつま芋作りにあてられました。3年生の後半から学外の工場へ派遣され、乏しい配給の食事で常に空腹でした。昭和19年頃から、本土への空襲が始まり、父の出征を機に、父の実家に祖父が1人で住んでいる家があったので、一家で疎開をしました。

私は高崎高女の4年生に転入学し、その日から学校工場で岩鼻の火薬工場の仕事につきました。午後3時から5時までの2時間に看護学の授業があり、3月卒業時には看護婦の資格が与えられ、ひめゆり部隊のように、内戦にかりだされるのです。日曜日だけ鞆を背負って授業がありました。当時の流行り言葉の月月火水木金金だったのです。

12月から2月の厳寒期に、あの有名になった風船爆弾の原紙作りが始まり、和紙と蒟蒻糊こんやくを塗っては乾かし、18回の行程を経て、強靱な紙を作りました。戦局は益々悪化、姉と同じ東京女子医専入学の手続きも、3月10日の東京大空襲で、母の切望により中止、進学を諦めた処、担任の先生に、疎開のつもりでと福島女子医専をすすめられ合格しました。これが私の医師への道の出発となりました。昭和20年7月9日、17歳の誕生日が入学式でした。

それから食糧難の寮生活と、毎夜の空襲警報で起こされ、靴を履いたまま非常袋と防空頭巾を振り分け、背負ったまま寝ました。授業は早速解剖学、黒板一杯に書かれるラテン語を、A・B・Cしか知らない学力の私たちは、必死で書き写すのがやっと、夕食も鶉卵大うずらの青いじゃが芋が数個しか。夜毎の空襲に「特殊爆弾が落とされたので、布団を被るように」と言われ、かい巻きを持って庭の防空壕へ行きましたが、水が一杯にたまっており、仕方なく壕によりかかり、かい巻きを被って寝込んでしまいました。目が覚めたら満天の星、慌てて部屋に戻り、点呼に間に合いました。1ヶ月足らずで終戦、翌日から低空飛行の米軍機が修道院めがけて石鹼、ガム、チョコレート、菓子等を落としました。福島市に直接の空襲がなかったのは、修道院に捕虜収容

## ■女性医師たちの戦後

所があったからでした。

進駐軍が福島市にも進駐してきて、100人以上の女子学生を抱えた寮の舎監の先生は責任が持てず、ちょうど、夏休みの時期でもあり、一時帰郷することになりました。終戦後の米軍との混乱もなく、9月からは再び授業が始まりました。東京女子医専、帝国女子医専は空襲で学校が焼失し、疎開先での授業等と大変でした。私ども福島女子医専は、ほとんどロスもなく、順調に授業が進められていきましたが、戦後の食料難と交通事情の悪化はすさまじいものでした。

余りの空腹に、実家の群馬までの切符を買うのには、駅で1晩徹夜して並び、2等の切符を手に入れました。やっと乗れた汽車は通路に座るのが精一杯、リュックを股に挟んで何か食べようとごそごそすると、真っ黒な戦災孤児の目が回りから光りました。ある時は牛豚専門の暗闇な貨車に乗せられ、外が白んできて初めて他にも2、3人の人がいたのでホッとしました。やっとのことで帰宅すると、ちょうど脱穀の日、足踏みの脱穀機で十数俵の米の収穫を手伝いました。帰路は立ち上がれないほどリュックに雑穀をつめ、小山までの両毛線はよいのですが、小山からの東北線は、引揚者や東京からの客で満杯、夕方まで乗れず最後の手段で、駅員を頼み、女子医専の房のついた角帽をかぶり、窓から「学校へ帰れないのです。助けてください」と懇願し、駅員にお尻を持ち上げてもらい窓から乗り込みました。この時ばかりは角帽が威力を発揮してくれたのです。

この頃から米軍の統治が色濃くなり、急造の医師のための医学教育にメスが入り、4年制の医専が5年制になり、1年間全科を回るインターン制度が決まりました。現在とは違いもちろん無給です。その上、基礎から臨床までの全科目にわたる国家試験に合格して初めて医師になれたのです。戦前の女子医学教育は東京女子医学専門学校・帝国女子医学専門学校・大阪女子高等医学校の3校のみでしたが、戦況急を告げ、多くの軍医が必要になり、昭和18年に各医学部に専門部を増設、あらたに前橋医専のように新設校ができ、それでも間に合わず、内地の医療を担うべく昭和19年に福島女子医専、20年に秋田女子医専が開校するも、すぐ終戦（全国的にはもっと多数の新設校があったと思います）となると、これほど多数の医学校を維持することも出来ず、昭和22年Aクラス・Bクラスとし、Bクラスは廃校することになり、各校が必死で学内を揃え、存続を願いました。私どもの福島は主として東北大の教授が講義を担当されており、その協力と県が軍需工場であった立派な建物を提供し、Aクラスとして存続出来ました。

この時、存続校・廃校に関わらず、前記のような食糧難と交通事情を勘案して各校



## ■女性医師たちの戦後

間の転入学が許され、さらにマッカーサーの指令ですべての大学・専門学校の男女共学が許可されました。私は迷わず、自転車通学のできる前橋医専へ転入学しました。昭和23年各官立医学専門学校が医科大学に昇格しました。現在はさらに私立の医大が各地に出来、女子医学生の数は一クラス定員数の40%を越す勢いです。今後の女性医師の責任は重大であると思います。

(田所浪子)

# 発足の志

### 1) はじめに

母親の先輩だけでなく医師であるという専門性を活かし、地域で子育て中でとくに思春期の子供を抱えて思い悩んでいる母親のために、群馬県女医会がマザーズセミナーを開催したのが昭和53年9月でした。その後学校内暴力、家庭内暴力、青少年の非行、とくに性非行がマスコミを大きく賑わせ、その上少女たちが性を商品化したり20歳未満の人工妊娠中絶が増加する等、様々な問題が出てきました。

また一方、昭和57年夏、横浜市で開催された性教育研究全国大会に参加した養護教諭たちが、大会で得た知識や情報を基に自主的な研究活動を始めていました。そんな中、思春期の重要性を考える人たちから一緒に学び合い協力したら、より強力な活動も効果も期待できるのではないかという声が出てきました。そこで医師、養護教諭、看護職員などのほか教職員、カウンセラーなどと職種を問わず、多彩なメンバーが集まり思春期研究会として発足したのが昭和57年10月。待望の設立総会が翌58年1月28日、松本清一先生をはじめ全国で活躍しておられる指導者の先生方のご後援のもとに開催されました。

### 2) なぜ、ぐんま思春期研究会なのか

思春期は大人への旅立ちのとき。心身の急激な発育、発達に伴い不安や悩みを持ちやすく、家族関係、進学競争、社会の変貌の中で大きく揺れ動いています。思春期の子供たちにとって至極当たり前のことが大人からは問題行動と思われる。健康な思春期を理解しなければ不安や悩みを持った親や子供へ適切な相談や指導はできない。また相談をしやすくするにはなど、どうしたらよいか考えた上、優しさを強調するように群馬を平仮名で「ぐんま思春期研究会」としました。全国に数多くある性教育、思春期研究会のうち、この時点で平仮名を用いたのは本会が初めてでした。

### 3) 研究会のあゆみ

第1年次 設立総会において、思春期の医学的側面を群馬大学産婦人科五十嵐正雄教授、教育的側面は全国性教育団体連絡協議会、田能村祐麒理事長に講演をお願いして性教育、思春期について会員相互の共通理解を図ることとしま

■ぐんま思春期研究会

した。初代会長には岸直枝先生が就任されました。

- 第2年次 女子思春期、とくに月経、男子思春期の発育発達と性行動
- 第3年次 思春期妊娠の実態とその指導、若年妊娠と人工妊娠中絶
- 第4年次 カウンセリングを学ぶ 思春期の子供の求めているもの
- 第5年次 発育段階による性教育、思春期保険の問題点
- 第6年次 思春期妊娠を男子の立場から考える性交指導の実際
- 第7年次 「幸せな性を築く」第19回全国性教育研究大会が前橋市で開催され、出生から老年期に至る人間の性を研修した
- 第8年次 障害を持つ子の性教育、教材研究と作成
- 第9年次 中・高校生の性交、妊娠、中絶などについて教育的、医学的、社会的側面からの指導を考える
- 第10年次 性にかかわる相談をめぐって学校、地域での指導を学ぶ
- 第11年次 エイズについて学ぶ
- 第12年次 性の健康と性の意義、性交を子供にどう伝えるか
- 第13年次 青少年の薬物乱用ピアカウンセリング、いじめ、虐待
- 第14年次 青少年をめぐる性情報、月経困難症、マンスリービクス
- 第15年次 「幸せな性を築くパート2～学校、家庭、地域の連携」  
第7回関東甲信越性教育研究大会を前橋市にて開催

#### 4) 特別企画事業

※女性のためのセミナー（昭和62年3月） 高校、短大を卒業し初めて社会へ出る人が、男女平等社会で職業人としての自覚を持てるようにと企画。医師、弁護士、栄養士などが健康、食事、法的な助言をした。

※お母さんのための勉強室（昭和63年4月～11月まで8回連続） 思春期の子供を持つ母親を対象に、心身の発育発達に伴う性の成熟や心の揺れなどを理解できるようにと企画、最後には母親自身の健康、いわゆる思秋期についても学んだ。

#### 5) 調査研究事業

※高校生の性意識について高校における性教育が生徒のニーズに合って効果的に実施が出来るよう、生徒とその親、教師を対象にアンケート調査を行った。子供と大人の意識のずれや本音と建前の違いなどがわかり、これからの指導に役立った。

※月経血量と随伴症状などについて（1報・2報） 月経指導、女性の健康指導に参

---

## ■ぐんま思春期研究会

考となる調査結果となった。

※月経中の水泳 少女たちが水泳授業で、指導者や男子同級生の月経にたいする理解の誤りも加わり、女性自身が女性という性を拒否することのないよう、小・中・高校・大学生との他教師・両親・水泳のインストラクターなどの協力により実態を調査した。その結果は月経中の水泳参加、学校での指導のあり方などの指針となった。

※子供たちに素敵なマンスリーダーを 子供たちが月経の手当てをどんな思いでしているのか、学校のトイレの環境は適切なのかなどの調査を行う。女性の機能を豊かな心で受け入れて、月経中を爽やかに過ごすだけでなく生活環境にまで考慮し、よりよき社会人として生きるための指導指針とした。

### 6) おわりに

平成9年1月2日、初代会長岸直枝先生が逝去され、その後私佐藤が会長に就任しました。「性教育とは人間尊重と個人の幸福を基盤として行われる人間教育であり、人間として自らの性をどう生きていくかという生き方の教育である」という直枝先生の信条を忘れずに、16年にわたって「ぐんま思春期研究会」にかかわってきましたが、研究会も社会経済の変貌や最新医学の進歩など、多岐にわたる環境のなかで活動する時代になりました。

私は平成10年2月、子供も大人もすべての人たちが心身ともに健やかに暮らせる日を願い、ご指導ご協力いただいた諸先生や会員の皆様に感謝して会長を辞しました。

注：ご指導いただきました先生方の役職は当時のまま記載しました。

(佐藤ち江)

## 現在とこれから

思春期は、日本産婦人科学会により「7、8歳から18歳まで」と定義されています。もちろん、身体的状況からみた定義ですので、昨今の社会的環境が思春期に与える心理的变化などは盛りこまれていません。

しかし現在、思春期の子どもたちの健康は、この社会的因子により、大きな脅威を与えられているのです。

若者の性行動に低年齢化、加速化の傾向が認められたのは、90年代半ばのことでした。性交経験率は94年から96年にかけて、まず女子が、続いて96から99年にかけて男子が急上昇をみせました。

全国で行われる高校生世代に対する性行動調査において、高校3年生の性交経験率はほぼ3～4割であり、初回性交経験時期は15～16歳であることが明らかとなっています。群馬県でも同様か、やや高い傾向が見られていました。

このような性行動の低年齢化の背景には、若年女性を性の対象と捉えたポルノ産業の隆盛やポケベルから出発したパーソナルな通信機器、つまり携帯電話の発達、普及などがあることは事実でしょう。今や、携帯電話は会話の道具ではなく、星の数ほどあるサイトを通じた男女の出会いの場であるとさえ言われています。そして、ここには犯罪の陰までもが潜んでいます。被害者も徐々に低年齢化し、今、最も危ないのは中学生世代で、産婦人科の診療を通してみると、彼らは社会の被害者であると強く感じます。

一方、2001年ころには10代の人工妊娠中絶と性感染症の激増が社会問題となり、若者世代に対して、問題対策としての性教育が盛んに行われました。

これがそれなりの効果を上げたためか、最近の3～4年ではクラミジア感染症や淋菌感染症など、性感染症の一部には減少傾向も見られてきています。

しかし、ウィルス性疾患である性器ヘルペス、尖圭コンジローマ、中でもHIV感染、エイズは現在も急増しており、今後の行方は予断を許さない状況です。

さて、このような状態にある若い女性に対して、新たな医学的対応が話題になっています。

---

## ■ぐんま思春期研究会

ひとつは子宮頸がんに対するワクチンであり、もうひとつは緊急避妊薬です。

最近ではかなり知られて来ましたが、子宮頸がんはヒト・パピローマウイルス（HPV：ヒト乳頭腫ウイルス）の持続感染を原因とする疾患であることが、20数年前に判明しました。以来、これを予防するワクチンの開発が研究され、現在、世界では既に100カ国以上で実用化され、接種されています。対象年齢は一般に、9歳以上26歳までとされていますし、性交渉で感染するのですから初回性交の前に接種されることが望ましく、オーストラリアやイギリスなどでは小学校で政府の援助の下に接種し始めています。日本はやや立ち遅れていましたが、それでも2009年12月22日に発売されました。

現在のワクチンでは、日本人の頸がんの6割前後しか予防出来ませんが、さらに改良が加わると9割以上が予防出来るようになるという夢のような話が現実化されつつあるのです。子どもたちが大人になる頃には、子宮頸がんの脅威からは解放されるかもしれません。そのためにも今、保護者たちにワクチンの啓発活動を行う必要に迫られています。

一方、緊急避妊ピルもやっと世界のレベルに追いつきつつあります。現在日本で行われているヤッペ法（72時間以内にプラノバルを2錠服用、さらに12時間後に同量服用）は吐き気・嘔吐などの副作用も強く、世界的には40年も前に廃れた方法です。そのうえ日本ではまだ厚生労働省からの認可すらなく、医師の裁量で処方されているものです。

これが服用1回で、副作用もほとんどないというタイプのピルが2010年中には登場する予定です。

日本の行政および医学界は、避妊を代表とする女性の性に関わる健康という分野に対して冷たい傾向にありました。中絶という暴力的な解決法によって家族計画がなされてきた歴史もあります。

後輩の女性たちが、将来にわたって健やかな生活を享受出来るよう、私も彼らの親の世代を中心に、社会に対しても医学の進歩を分かりやすく知らせていく努力を続けたいと考えています。

(家坂清子)

## ■日航機墜落事故

# 終わりの見えない検視現場での経験

—心底家に帰りたい—

この原稿を書いている部屋の窓からヘリコプターの騒音と機体が目に映ります。当院でのドクターヘリ運航開始に向けて最終シミュレーションが行われているからです。あの日(昭和60年8月13日)、日航機墜落事故生存者救出に使用されたヘリコプターは、今では救急処置も可能な装備を乗せたドクターヘリとして活躍する日を待っています。しみじみと時の経過を感じます。

私が日航機墜落事故を知ったのは、8月12日夜、テニスで一緒に汗を流した仲間とともにピアノバーで1曲歌い、帰宅するタクシーの中でした。群馬か？長野か？墜落現場が確定していないとのニュースを聞いて、「群馬だったら明日は救護班出動で私に待機命令が来るかもね」といった言葉が本当になり、翌日さっそく待機命令をもらいました。そして前橋赤十字病院救護第4班の班長として、その翌日(14日)早朝に当時群馬県庁内にあった日本赤十字社群馬県支部に集合となりました。そして牧野看護師(前橋赤十字病院前看護師長)、助産婦、事務員からなる救護班の班長として藤岡市民体育館に出動となりました。塩崎先生(前橋赤十字病院前病院長)の第3班は、生存者発見に対応するべく御巢鷹山に向かいました。藤岡市民体育館には深谷赤十字、武蔵野赤十字の救護班が既に到着しており、遺体検視を担当することを知らされました。

互いに検視の経験はなく、不安な気持ちで検視医として名前を3番目に登録したのを覚えています。そして長くて終わりの見えない検視作業が始まったのです。

赤十字病院医師5人でこれから搬送される無数の遺体検視を行うのかと気を引き締めていると、医師会の警察医・看護師たちが多数到着し、私の検視は10番目に搬送された子供の遺体から始まりました。手足は無いものとても穏やかな表情であったのが救いでした。しかし満足な遺体は最初の内だけで、その後は遺体とも呼ばれない状態での検視でした。騒音と異様な臭いの中で、看護師とともに、それこそ何も考えず作業に没頭しました。暑さも汗も、重い救護服も感覚が麻痺した身には苦にはならず、感情が凍りついた状態でした。その時に、群馬大学法医学教授古川先生が検視現場に見えられ、詳細はいずれとしてもできるだけ死因が判るように検案書を作成するようにと検視に対するアドバイスをいただきました。

学生時代に教授の研究室で勉強させていただいた経緯があり、久々の再会でした。

## ■日航機墜落事故



墜落現場



救出現場



ヘリコプターでの遺体搬送



検視場所となった藤岡市民体育館

県警の方から「先生、心臓から血液採れましたらお願いします」と注射器を渡され格闘していると、背後から「飛行機が突っ込んだ状況下では心臓はどこにあるのでしょうか?」という恩師の声が聞こえました。15年ぶりの面接試験の解答は「横隔膜を突き破り腹部にある可能性が高い」でした。学生時代と変わらぬ会話を交わしたおかげで、周囲の状況を観察する余裕が生まれ、警察医のベテランから検視のコツや検案書の書き方まで教えていただき、この時の交友は今も続いております。因みに最初の検案書に押印した時には手が震え、印字は滲んでいましたが、些細なことに拘っている時間はなく、すでに次の遺体がシートに横たえられ私を待っている状況でした。

検視は医師・看護師・鑑識からなる6～8名1チームが基本単位で行われました。青いビニールシートに横たえられた遺体を囲み、看護師はできるだけ遺体が人間らしくみえるようにと頭部の復元など工夫を凝らし（この作業は身元確認に障害になるため、後に中止されました）、医師は身元確認に有効な血液採取や死因に迫る遺体損傷所見をとり、時に縫合し、鑑識は身元確認のためにポケット内の遺留品の確認や写真撮



■日航機墜落事故



検視現場



検案書を作成



遺体確認現場



影など、互いに協力し必死に作業を繰り返しました。後半には強烈な匂いとともに、身元確認や死因を推測できるものもなくなり、遺体の一部が何処の部分であるのかすぐには判断出来ないこともありました。

緊張すると口渇があるのか無いのか判らなくなり（締め切った体育館内はかなりの高温多湿であったと思われます）、トイレに行くためにだけ水分補給をし、事務員が調達してくれた弁当を味わうこともなく口に運んでいました。事務員は「先生、肉は食べられないだろうから鮭弁当にしたよ」と隣町まで調達に行ってくれたようでした。朝8時から開始された検視作業は延々と続き、とりあえず終了した時にはとうとう翌日になっていました。医師会の先生・看護師・歯科医師たちは翌日の診療のために夕方には現場を去り、塩崎先生の第3班が夕方に山から降りてきてくれました。最後まで残ったのは赤十字関係者で最後の検視体が搬出され、翌日に向けてビニールシートを清掃している頃には、医師も看護師も警察官も疲労し、言葉もなくシートを清めていました。

---

## ■日航機墜落事故

全ての仕事を終えて、手袋を脱ぎながら周囲を見回してみると、黒の遮光幕に囲まれた体育館、煌々と照らされたその床にいくつもの青いビニールシート、線香の煙で白くみえる空気そして臭い、異様な光景でしたが、これでやっと家に帰れると思いました。永遠に帰宅が適わなくなった遺体を前に、不謹慎とは思いましたが、心底家に帰りたと思いました。

この後、検視作業は延々と9月28日まで続き計55班、319名が赤十字社から派遣されました。2度目の派遣を要請される直前に作業が終了しましたが、この救護作業以降、赤十字のRED CROSSの重みを意識するようになりました。そしてどのような災害現場においても、冷静に確実に自分の仕事をこなす強靱な精神力が必要であると思いました。山に入った警察官は野営し何日も作業を続けたと聞きました。人道などという言葉を口にせず、その任務に徹した彼らのプロ意識には本当に頭が下がる思いがします。帰院後、朝までかかって翌日の検視に必要なものを調達した看護師や事務員、そして朝には外来で診察を始めた自分を含め、さわやかな朝を迎えられる幸せをかみ締めていました。 合掌。

(前橋赤十字病院糖尿病・内分泌内科部長 中村保子)

## 日本航空機墜落事故のこと

1985年（昭和60年）8月12日、まだ厳しい暑さが残る午後7時頃から「日航機123便がレーダーから消えた」「事故発生の模様」「墜落地点は群馬か長野か」等という緊迫したニュースが流れ始め、私はテレビの前に釘付けになっていました。そして翌13日明け方、乗客乗員500名以上の人達が一瞬にして生命を奪われたという、大きな墜落事故は本県南西部、上野村の御巢鷹山と報じられたのです。

事故発生のニュースに続いて、御巢鷹山の山林に散乱した飛行機の機体、燃えくすぶる黒煙、目を覆うような映像が映し出されるテレビの画面は凄まじく、私はその場から離れられなくなっていました。

そんな時、「現場で生存者4人発見」というアナウンサーの高ぶった声が聞こえてきて、自衛隊員に抱えられ、上空のヘリに吊り上げられていく少女の華奢な姿がテレビに映し出されてきました。私は祈るようにこぶしを握っていました。

でも残る520人はすべて死亡、遺体の確認は群馬県警察、日本赤十字社を始め群馬県医師会、歯科医師会などの関係者によって行われると報道されました。最初の墜落遺体が藤岡市民体育館へ運び込まれたのは14日の午前、以後47日間にわたる身元確認のための検視が始まったのです。中村保子先生（群馬県女医会の会員）は、勤務しておられる日本赤十字社のメンバーとしていち早く駆けつけられ、運び込まれた遺体の検視を行い身元確認をされました。先生が検視し身元確認をしたのは10番目だったとか「頭部と胴体が離れていない完全遺体だったので早く確認できた」と、先生は当時を思い出すような遠い目をされました。

墜落地点から次々に運び込まれる遺体は、時間の経過につれ泥や杉の葉がからみついている上に、熱のために焼け焦げて体はバラバラに離断されており、損傷が激しくて確認作業は困難を極めました。遺体を安置する体育館内は作業の円滑を図るためか、窓はすべて黒幕で覆われ照明灯に照らされており、外気温が35度を越すという暑さのなかでクーラーもなく、まるで蒸し風呂のような過酷な状況でした。

その中で慌しく働いておられた医師、歯科医師、看護婦、警察官などの皆さんの苦労は如何ばかりだったでしょう。でもみんなで励まし合って不眠不休で必死に頑張ったと聞いています。

群馬県医師会では当時の副会長大田武史先生を中心に警察医会、地元医師会などが

## ■日航機墜落事故

身元確認作業に従事されました。その困難な状況を聞いた県内の開業医の先生方が、交替で協力しようという声をあげられました。女医会もお手伝いしなければと、岸直枝先生が会員に声をかけたのです。

私はどんなことをするのか、私に何が出来るのかと不安をいっぱい抱えながら藤岡へ出かけました。墜落事故から大分経った8月末か9月になってからだったでしょうか。指定された藤岡工業高校の体育館に着くと、岸千鶴子先生がおいでになりホッとしました。会場にはクーラーも設置され、働く人たちへの配慮はされていましたが、案内された作業場は縦長の約1坪ほどに区切られた狭い空間で、特別の雰囲気はみなぎり、緊張で体が震える思いでした。

調べてほしいというのは、男性らしい離断遺体で足首だけ、炭化して煤けていました。足の裏にたこがあるはずだと必死になって探しておられる遺族を思い、見落としは許されないと2人で丁寧によく確かめましたが何もありませんでした。がっくりと肩を落として帰る遺族の後ろ姿に、私たち2人、涙が溢れてきました。亡くなった人の指1本、歯のひとかけら、爪だけでもいい見つけてほしいという遺族の願いもむなしく、残された離断の部分遺体は後ほど丁寧に茶毘に付されたそうです。今は上野村にある鎮魂の森「慰霊の園」で520人の被災者のみなさんの魂はご一緒に、静かに眠っておられるでしょう。

私は最後まで遺体確認をあきらめなかった親子、夫婦、家族の愛、そして絆の強さは、何ものにも代えがたい大切なことだと深く考えさせられました。生命の尊厳さが失われ、家族、肉親の絆が薄れてきている近頃、あの悲惨な墜落事故のことは、忘れてはいけないことと痛感しています。

次の書籍を参照にさせていただきました

『墜落遺体 御巢鷹山の日航機123便』(飯塚訓著 2001年 講談社)

『クライマーズ・ハイ』(横山秀夫著 2006年 文藝春秋)

(佐藤ち江)

## ■女性医師の就業環境

### これまで

母校である群馬大学医学部入学から卒業後約10年間のわずかな経験をもとに思い出したひとり語りです。

1960年頃から女子医学生の割合は数%から10%へと徐々に増加しつつありました。入学間もない頃、先輩女子医学生主催の新入生歓迎会が毎年行われてました。1年から6年生のほとんどが集まり、さらに社会で働いていた先輩女医の方々が参加され、貴重なお話をして下さいました。女医さん達は研究者、開業医、勤務医、行政職等で活潑と活躍されていました。女医の生き方、働き方の話題の中で、小児科勤務医は「2人で一人前よ（ジョブシェアリング）」と笑って話されました。出産育児にはお手伝いさんを雇ったり、仕事を変更しながら、ライフステージの時間管理を上手にされてました。先輩の知恵と逞しさには圧倒されたと同時に、不安ながらも展望が持てたように感じました。この集いは今風のネットワークであり、メンターシステムの原点であったと考えています。

1965年頃からインターン問題が全国的に議論され、1969年にはインターンは廃止され、国試ボイコットをした2学年が同時に受験しました。この頃から大学内情勢は変わり、この新入生歓迎会は消滅したようです。

自主研修後、結婚、妊娠、出産と私のライフステージは変わりました。働きながらの育児には個人雇いのお手伝いさんの他に保育所も考えてました。幸いな事に大学内保育所に子供を託す事が出来ました。母乳育児の推進者松村龍雄教授のお陰で、初めは女子職員の授乳室が設けられました。その後、教職員組合や同愛会や理解のある方々の協力で医学部キャンパス内の物置小屋の改装、次に天井なしのプレハブ建ても増築され、0～3才までの無許可保育所が出来ました。当時、保育所は厚生省の管轄下にあり、文部省では認められず、女子職員の厚生施設として存在しました。当保育所の運営は利用者以外の協力を得ながらも利用者である保護者の未熟な運営でしたので、想像以上に難問が多く、経営的にも厳しく不安定でした。そこで認可保育所建設に向けて、十数名の母親が頑張りました。群大敷地内で公道に面した土地に保育所建設の要請に前橋市へ何回か行きました。市長さん曰く「私に相談なく子供をつくった」と誠意ある回答は得られませんでした。文部省や大蔵省にも請願のため上京しましたが、とても私達の声は届かないようでした。並行して数百万円の資金集めにバザーや物資

---

## ■女性医師の就業環境

販売を10年近く行い、やっと認可保育所建設に漕ぎつけました。

その期間に女性医療従事者の働く環境、特に大学内保育所に対する多くの職員の意見を聴くことができました。医学部教授にも協力を仰ぐため、保護者が分担して伺いました。カンパやバザー用品を下さった教授も数人いらっしゃいましたが、門前払い、「保育所は必要悪だ」「女医の入局は困る」等々の意見をききました。妊娠を上司に告げると「困ったなあ」と言われ、職場に迷惑をかけて肩身の狭い思いをした話に共感しました。

日本の医学教育、研究環境の貧困な状況では産休が保障されてはいたものの現実には厳しく、現場の人達の本音が聞かれました。女性の就労環境に関する意識調査には及ばずとも小さい風を吹かせたと自負しております。女性医療従事者と協働しながら就労環境づくりの一步になろうとしました。また、チームワークも学んだ時期でした。女医はじめコメディカルの専門技術を研ぎ続けるために保育所の必要性の意識を浸透させてきたと思ってます。

この拙文を書くことになり、日本女医会百年史の追補を読みました。女医3号である先駆者高橋瑞子が前橋で活躍されていたことに驚き、その熱意と実力が女医の歴史を動かしたのかと思い巡らしました。助産婦（当時の産婆）から産科医として子供の出生と母性の保護に尽力された女傑だったそうです。先輩女医達は明治時代の男尊女卑を乗り越え、戦乱の大正時代にも力量を発揮し、昭和に男女平等が謳われながらも女子学生亡国論が耳に入っても、女性の特性を生かし、女性の視点から病気や健康に携わってきました。そんな女医達の命脈を再認識し、自分のモチベーションを補強しました。今日の医療崩壊時代にあっても女性医師の使命を果たすべく働きやすい環境づくりに微力ながらも貢献したいと思っています。

(伊藤 洋子)

## 現 在

以前は話題にすら上がらなかった女性医師の就業環境改善について、近年はその重要性が少しずつ認識されてきているように思います。しかし、医師として勤務継続の希望を持ちながら、結婚・妊娠・出産などのさまざまな事情でそれをあきらめざるを得ない女性医師は未だに多く、女性医師の離職率も問題視されるようになりました。

私事です、平成12年に大学を卒業し、出身大学の外科医局に入局の後、日々勤務を行っておりました。医師になった時点ですでに結婚はしておりましたが子供もおらず、お互い独身時代と変わらずに仕事に打ち込んでいる状態でした。夫婦とはいいがたいすれ違いの毎日でしたが、仕事のやりがいの大きさと毎日充実した生活が送れていたと思います。しかし、出産を考え始めた時点で暗雲が漂い始めました。年齢的にもそろそろ出産を考えたい私達でしたが、夫婦共々実家が遠方にあり、育児中の緊急時のサポートなどは十分に得られない状態でした。また、女性医師の出産に関して理解の乏しい環境ということもあり、このままの勤務を続けながらの出産は不可能と判断し、私が仕事を休職することとなったのです。実際に休職してみると、自分が医師になるために、公的な補助を始めとしてたくさんの方々の恩恵を受けたのに、社会的に恩返しもできずに申し訳ないという気持ちに苛まれることとなりました。結局丸5年間休職しておりましたが、その間ずっと、もし可能であれば再度医師として働きたいという気持ちを持ち続けて過ごして来ました。思いがけず私の実家のある群馬県に戻ることができ、県の女性医師復職支援制度（このような制度が制定されることを考えただけでも、本当に女性医師の就業環境が改善されてきているのだと感じられます）を利用させていただくことができ、復職にこぎつけることができました。

現在は職場の保育園や学童保育などを利用させていただき、週5日内科医として8時30分～17時30分まで病棟勤務をしております。当直は免除していただいておりますが、受け持ちの患者さんが急変されたり、終業時間ぎりぎりに来院された患者さんがそのまま入院となる時などは、勤務が20時近くになることや、深夜・早朝に病棟に駆けつけることも時折あり、現実的に緊急時に子供を見ていてくれる実家の両親が居なければ、家事や育児をこなしつつ、継続させることは困難な状態です。周りの先生方や職場の環境に恵まれ、家族の協力が得られているために、何とか仕事も家庭も大事に至らずに日々を送れている状態です。

## ■女性医師の就業環境

女性医師の就業環境の整備に関しては、理解の乏しい厳しい環境の中で頑張ってきた諸先輩方のおかげで、以前と比べてだいぶ環境が改善されているように思います。また、ここ数年医師不足が話題となり、その関連で女性医師の離職問題が、対策を講じるべき問題として取り上げられたことも環境改善の追い風になっているようです。

多くの病院に院内託児所もしくは保育園が整備され、以前は病院内に保育園があっても看護師が対象であり医師の子供は預からないなどといったところもあったようですが、さすがに最近はそういったことも少なくなっているようです。また、産休・育休などの制度も、以前は制度があっても周りの理解の低さから、きちんと利用させてもらえないことが多かったように思いますが、利用者が徐々に増加し取りやすくなっているようです。職場の男性医師の中にも仕事以外に家事や育児の負担をもつ医師に対して、理解を示してくださる方が以前より多くなったように思います。

しかし、未だに理解の乏しい職場もあり、「女性は出産すると当直をしたがらないので駄目だ。」などとまだまだ厳しいご指摘をされる方もいらっしゃるようで、そのために仕事をあきらめ、離職を余儀なくされている女性医師がいることも事実でしょう。

今の職場に来て、病院に勤務している女性医師の多さに驚き、その皆さんが自分たちの生活状況に合わせて様々な働き方をされており、そのような多様な働き方を男性医師も理解され、男女かかわらず良好なサポート関係を築かれていることに少なからず感動したものです。

女性に優しく働きやすい職場というのは、男性にとっても働きやすい職場であることは間違いなく、現在では男性も介護の負担や、事情によっては育児の負担もしなければならぬこともあり、仕事との両立が困難となりうる状態になる場合もありうるわけです。病医院において、勤務医師確保に苦労しているということを耳にしますが、お互いにカバーし合い助け合える職場環境が整備されている病院でなければ、今後はさらに医師が集まらなくなるのではないかと思います。

現在、医師国家試験の合格者の約3割を女性が占め、若い世代では女性医師の占める割合が年々増加しています。女性医師の離職を減らすため、女性医師の就業環境改善の重要性はやっと認識されたばかりの状態であり、今後さらなる改善を実現するためにも、女性医師同士の情報交換および連帯がますます重要になってくるでしょう。そのために女医会の果たす役割はさらに重要となると思われます。

諸先輩方が築かれた礎をもとに、またさらに若い世代へと、無理なく仕事を続けられる環境を少しずつ整備していけるよう、微力ながらお役に立てれば幸いです。

(日高病院 内科 渡辺彩子)



## ■女性医師の就業環境

## これから

病院勤務医の減少傾向にいち早く気付いた群馬県行政は、平成18年7月1日女性医師再就業支援事業を施行した。目的を、女性医師のライフステージに応じた就労を支援し、かつ医師確保に資するため、女性医師バンクを設立し、離職女性医師の再就業を支援するための講習を実施の上、必要とする病院への就業を斡旋する。事業費は、1,442万円であった。橋本和博医務課長が中心になり、群馬県女性医師再就業支援事業推進協議会を立ち上げた。

## 第1回群馬県女性医師再就業支援事業推進協議会

日 時：平成18年7月28日（金）15：05～16：25  
場 所：161会議室（群馬県庁舎16階）

## 群馬県女性医師再就業支援事業推進協議会名簿

役 職	氏 名
群馬大学大学院医学系研究科生殖再生分化学教授	峰 岸 敬
群馬大学大学院医学系研究科小児生体防御学教授	森 川 昭 廣
群馬県病院協会会長	柴 山 勝太郎
群馬県医師会理事	田 中 義
群馬県医師会（前橋市医師会副会長）	山 田 邦 子
食品安全会議事務局長	小 澤 邦 寿
医務課長	橋 本 和 博

決定事項：群馬県女性医師等再教育研修実施要項  
研修委託費補助と保育園費補助

今後の検討課題：女性医師、病院勤務医師の実態調査  
ドクターバンクの立ち上げ

病児も扱う院内保育施設や託児機能の整備・充実

勤務体系（フレックスタイム制、交替主治医制など）の整備

---

## ■女性医師の就業環境

### 第2回群馬県女性医師再就業支援事業推進協議会

日 時：平成19年5月16日（木）19：00～20：25

場 所：151会議室（群馬県庁舎15階）

出席者：前回に同じ

決定事項：再教育研修の時間・費用の上限については、フルタイムなら、2ヶ月160時間、160万円を一つの目安とする。

実施に向け具体的な対応：現在研修中の医師は、6月中に就業先について相談をする。

現在の希望者は、研修候補としては、太田も範疇とする。

今後の検討課題：日本医師会の女性医師再就業支援制度の実態調査。

病児も扱う院内保育施設の整備・充実の制度化。

### 第3回群馬県女性医師再就業支援事業推進協議会

日 時：平成19年8月9日（木）13：00

場 所：141会議室（群馬県庁舎）

出席者：医務課長が茂原賢充に交替、他は前回に同じ  
再研修希望者の面談と面談後の協議

以降、数回の面接が行われ、数名の女性医師が再研修を受け、再就業者が実現している。

医務課では、メールマガジン登録者約50名に情報発信を定期的に発行している。

全国的には、日本医師会の女性医師バンク設立（平成19年1月30日開始）、日本女医会のキャリアアップセミナー等、各大学病院独自の支援事業、保育施設が、稼働し始めた。中でも大阪厚生年金病院（清野佳紀院長）の取り組みは斬新で画期的である。すなわち、3年間の育児休業と1年間の有給休暇、子供が小学校卒業するまでの週30時間の短縮勤務とフレックスタイム制、子供の送り迎えに優先的な駐車場等々、勤務しやすい体制を実施した事である。それでも病院側は費用対効果・医師確保において有効であるとの説明であった。

前橋市内の院内保育園は、平成11年頃は、市内6箇所あったが、いずれも看護婦の子のためであって、女性医師の子の入所は断られていた。これは、助成金が、看護婦

## ■女性医師の就業環境

確保対策から出ているためであった。平成15年には、制約が撤廃され、医療従事者全員の子が申し込み可能となったが、施設スペースの問題、保育士の数等から、定員が増えず、結局転勤の多い女性医師の子は予約申し込みが遅れてしまい、入所困難者が多かった。

平成19年から、群馬大学附属病院に、森下病院長、森川群馬大学医師会会長の尽力で、病児も扱う院内保育園が開所した。鉄筋コンクリート2階建て遊び場付きの独立施設である。朝7時半から夜7時半まで、12時間保育が出来る。女性医師にとっては、保育所のハシゴをしなくてすむと、評判である。が、病児保育は機能的ではない。なぜなら、病児保育予約を前日の午後5時までにしなくてはならないのである。看護師を病院から回してもらうための。常勤看護師はいないのである。採算が合わないためだという。その上、病児は当日小児科を受診してから預かるという、非常に時間のかかる事になる。これでは、女性医師はすっかり遅刻してしまい、気力も消失しがちになってしまう。なんとかうまく実用的な軌道に乗って欲しい。

日本医師会では、平成19年度から女性医師サポート事業として、全国で講演会を計画した。各都道府県医師会で主催する。群馬県では、「平成20年度女子医学生・女性医師等をサポートするための会」が、平成21年3月6日に、日本医師会・群馬県医師会・群馬県女医会主催で開催された。群馬大学医学部女子医学生、研修医、前橋女子高校生、病院長、病院事務長等が参加し、30～40代の女性医師がパネラーになった。実体験にもとづく様々なアドバイスに、会場は先輩女性医師からの熱いエールに包まれていた。同時に県医師会では初めての試みである託児室も設けられ、にぎやかに稼働した。

今後も、このような会で女性医師の声を反映させた環境整備が進められる事を望んで止まない。

(山田 邦子)

# 母乳育児推進の取り組み

## 1) 「母乳育児を広める会」の発足

1965年頃は人工栄養が盛んだった時代でしたが、この頃から、群馬大学小児科の松村龍雄教授は、母乳の重要性を唱え、強く母乳育児を推進していました。これを受けて、群馬県では当時から非常に熱心に母乳が推進されて来ました。1974年には、WHOが、母乳推進について世界各国に勧告し、1975年には、厚生省児童家庭局が「母乳運動の推進について」を発表しました。

松村教授は、その後、群馬大学小児科在籍の女医たちに、まず自分自身の子どもを母乳で育てよう熱心に指導し、1985年3月に、群馬大学小児科学教室出身の女医21名を会員とし、「母乳育児を広める会」を結成しました。さらに同年4月に「母乳育児電話相談」を開設しました。

## 2) 「母乳育児を広める会」の仕事

会の目的は、母乳育児の大切さを多くの人に知っていただくことと、今、母乳育児を実践しているお母さん方を支援することです。そのために、学会での発表、講演、新聞や本を通しての推進活動と、「電話相談」による母乳育児実践のお手伝いを主な仕事としてきました。

発足後、母乳育児をひろめる会は、母乳で育てたいお母さんを支援する“母親によるボランティア団体ラ・レーチェ・リーグ”の国際会議にも参加しました。ラ・レーチェ・リーグは、1956年にアメリカで誕生して以来、世界各地で多くの親や専門家と信頼関係を持ち、ユニセフやWHO（世界保健機関）とも協力関係にあり、現在では約70の国々で3,000以上の“集い”を開くまでになったNGOです。



■母乳育児推進

3) 母乳育児電話相談

電話相談は、毎週土曜日の午後3時から5時まで受付、電話番号は、21世紀に向かって「おっぱいゴクゴク」：027 (221) 5959という愛称で親しまれています。

1985年4月から1995年3月までの10年間電話相談の結果をまとめると、非常に顕著な特徴がみられ、それがとりもなおさず、母乳育児の問題点を浮き彫りにしているのが印象的でした。

10年間の電話相談の総数は、4113件で、ほとんどが母親からの相談でした。相談は全国からあり、1988年からは、海外在住の日本人からの相談もみられるようになりました(図1)。

相談者の最多は、月齢1カ月以上2カ月未満の赤ちゃんを持つ母親の相談が20%で、結局、3か月未満の赤ちゃんについての相談が過半数を占めていました(図2)。電話相談内容の第1位は「母乳が足りているかどうか心配」でしたが、実際は、足りているのに心配しているというケースが大部分でした。第2位は「授乳に要する時間や授乳間隔など授乳方法について」でした。これに次いで、乳房のトラブル、断乳、薬・酒・タバコの母乳への影響、便について、離乳食、アトピー性皮膚炎、その他となっています(図3)。

「電話相談」からわかる母乳育児の問題点は、非常に鮮明で特徴のあるものでした。

母乳育児電話相談のこの10年

1985年4月から1995年3月までの10年間に寄せられた電話相談4101件について、統計をとってみました。以下の表・グラフがその結果です。

図1 相談者の居住地

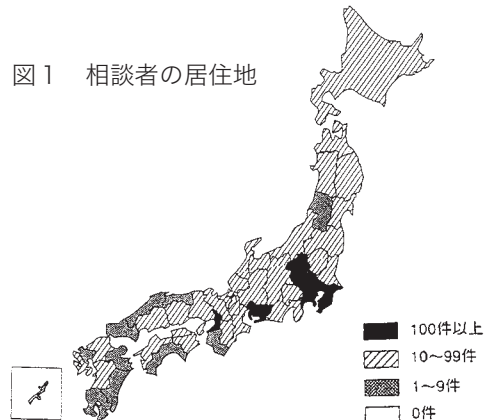


図2 赤ちゃんの月齢

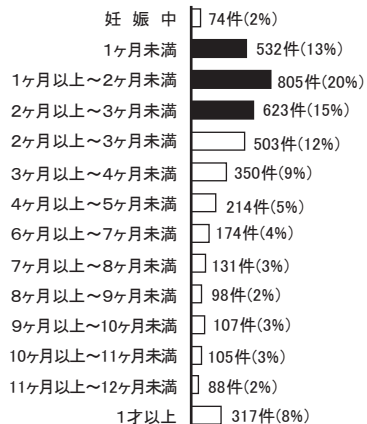
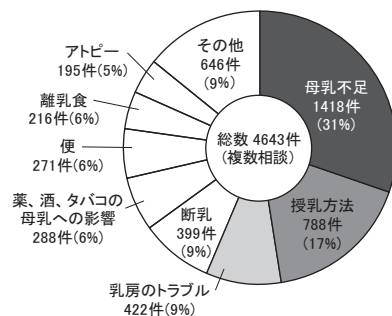


図3 主な相談内容



---

## ■母乳育児推進

新生児の哺乳は不規則で、頻回にお乳を飲むのが普通の状態ですが、これを母乳不足ではないかと不安を感じる母親が非常に多いのです。この他にも色々な不安が生じ、それがすべて「母乳が足りないせいではないか」と心配する母親が非常に多かったのです。

### 4) 実践的な解説書『母乳で育ててみませんか?』の刊行

母乳育児をひろめる会では、実際に母乳育児を行ったお母さんたち100人の相談例をもとに『母乳で育ててみませんか?』を出版しました。この本はロングセラーを続け、現在も母親たちばかりか母乳育児の指導者にも役立っております。

### 5) 電話相談は2009年3月にて終了

母乳育児電話相談は2009年3月で開設24年目を迎えますが、近年、相談件数が減って来たこともあり、2009年3月をもって終了することに致しました。長い間ご支援を賜り誠に有り難うございました。なお、母乳育児をひろめる会自体は、今後も存続して母乳育児支援の活動を続けて参りますので、どうかよろしく願います。

### 6) 母乳育児をひろめる会受賞歴

#### あさを賞受賞

1988年8月9日 (財団法人旦尾健康づくり助成基金)

#### ぐんま小児保健賞受賞

1990年8月29日「社会に貢献された部門」

#### 吉岡弥生賞受賞

社団法人日本女医会 会長：佐藤千代子

1997年5月24日 授賞式 (京王プラザホテル)

#### 2001年度内藤寿七郎国際育児賞希望大賞

#### 育児の原理賞受賞

2001年11月6日

(母乳育児をひろめる会会長 柳川 洋子)

## ■女性医学研究者輩出に向けて

# 女性医学研究者支援

この度、歴史ある群馬県女医会誌に寄稿させていただく機会をいただきまして有難うございます。私は現在、群馬大学医学部・保健学科・検査技術科学専攻・基礎検査学講座の准教授として、学部および大学院博士前期課程（修士）の教育と研究に従事しています。2006年7月1日、卒業後25年目に自分の研究室を持ち、昨年3月に初めて3名の卒業研究生を、また今月は初めて1名の院生を送り出したところです。院生時代に私を捉えた「ヒトの胎児-胎盤系におけるインヒビン、アクチビンの作用と産生調節機序」を研究室の主たる研究テーマとしています。研究に魅せられて研究を続け、研究を継続出来るポジションに応募し続け、現在のポジションに就きました。そして、このポジションに就いて初めて、自分の研究テーマを通して学生を指導し、発見を共に喜び、彼らの成長を見る事が、大変楽しく幸せなものである事を知りました。直接指導し、実験結果を一緒に見て楽しめる規模として、卒業研究生と院生の数名から成る研究室は自分に合っていると感じています。独立に伴う困難はありますが、研究の決定権があるのは本当に良いものです。これらの経験が少しでも若い研究者の役に立てば幸いです。

また、これまでに多くの方から御支援をいただき現在に至っておりますが、平成12年度に日本女医会から「妊婦血中インヒビン動態と胎児-胎盤系におけるインヒビン/アクチビン産生に関する研究」に対し研究助成をいただいたことは、研究継続に励みになっただけでなく、公募職に応募する際にも大変役立ちました。現在は、女医会だけではなく、いろいろな学会で女性研究者支援に対する追い風が吹いている時代と言えると思います。科学研究費の使用については、産休・育休期間の弾力的な運用が可能になりました。男女共同参画推進委員会（日本生化学会、日本生理学会等）、女性医師の継続的就労支援のための委員会（日本産科婦人科学会）など、女性研究者や女性医師を支援する委員会のある学会も増えています。学会会期中、託児所を設けるようになった学会もあります。群馬県内の状況としては、群馬大学昭和キャンパスに2007年4月、病児もあずかる附属病院内保育所が開設されました。臨床医や教職員のみならず大学院生も子供をあずけることのできる施設です。この保育所の設立に当たっては、学内からの要望だけではなく、群馬県女医会副会長の山田邦子先生が群大附属病院長に要望して下さったことが、設立を大いに促進したと伺っております。こ

---

## ■女性医学研究者輩出に向けて

れらは最近数年間の変化ですから、女性医師、女性医学研究者を巡る状況は急速に改善していると言えると思います。

一方、現場の第一線で奮闘している女性医学研究者が直面している問題の中には、これまでに女性医師／女性研究者支援として行われてきた支援だけでは解決の困難な問題もあると思います。女医会の特長は、様々な専攻分野、就業形態、出身大学の女性医師が会員で、若い女性医師の声を聞き支援する姿勢を明確にしていることだと思います。所属の教室や学会から得られる情報だけでは解決不能の問題も、情報を共有し、経験を生かし、知恵を出し合うことにより解決に向かって前進出来ると思います。多様な会員を有する女医会の特長が、今後もこれまで以上に発揮されるものと思っております。

(群馬大学医学部保健学科 検査技術学専攻 基礎検査学講座 安部由美子)



## 女性医師研究者の立場から

2008年に群馬県女医会に入会させていただきました佐藤浩子です。このたびは、群馬県女医会発足60周年、大変おめでとうございます。その長い歴史と、礎を築いてこられた女性医師の諸先生方に敬意を表すると共に、今後の益々のご盛会を心よりお祈りいたします。今回「女性医師研究者の立場から」というお題をいただきました。私は現在、研究というより臨床に近い立場で勤務しており、この題での寄稿にふさわしいかどうか若干不安ではありますが、研究の第一線で活躍しておられる女性の先生方もたくさんおられるかとも思いますが、ご指名いただきましたので大変僣越ながら寄稿させていただきます。

私は群馬大学卒業後、第二内科（現臓器病態学講座）に入局し、4年間の臨床実践の後、大学院に進学しました。大学院では、倉林正彦教授の下、循環器疾患の分子学的研究をご指導いただきました。大学院時代、自分たちの仮説のもと実験を行い、その結果に一喜一憂したり、国内外の学会に成果を発表したりと一生の思い出に残るような、有意義な時間を過ごさせていただきました。その後、2004年から2009年2月現在に至るまで、群馬大学総合診療部・統合和漢診療学講座に所属し、総合診療外来、和漢診療外来、女性専用外来を担当させていただいております。現在、内科疾患はもとより、内科疾患以外のさまざまな疾患にも遭遇する日々を送っております。この中で、専門診療とは明らかにベクトルの異なる診療形態へのニーズを、日々実感しております。

私どもが当院女性専用外来への受診例を対象に行った調査（奥裕子ほか、『群馬大学医学部附属病院における女性専用外来の現状と課題』北関東医学会雑誌58、297-301、2008）によると、女性専用外来への受診例の主訴は非常に多彩であり、複数疾患を併せ持つ方が多数受診されました。また、担当医は女性内科医師であることを明示しているにもかかわらず、性周期に関連すると考えられる婦人科疾患（更年期障害、月経前緊張症など）や精神科疾患の受診者が多いことも明らかとなりました。また、当院に受診する前に1つ以上の医療機関を受診した方が8割おられました。以上のことから、単一専門診療科では解決できない多彩な症状、疾患に対する余裕を持った診療形態が、女性専用外来に望まれていると考えられました。また、調査中、女性専用外来の受診例の実に半数に、和漢薬が処方されました。和漢薬は西洋薬と異なり、複数の

## ■女性医学研究者輩出に向けて

症状を横断的に改善する作用が期待できる薬剤です。このため女性専用外来においては西洋診療と併用することで有効な治療手段となり得ることを実感しました。

このような経験の中で、幅広く、全人的に患者さんを診療するという医療に対する世の中のニーズを実感するとともに、そのスタイルが元来自分の目指していた医師像であることを再認識するようになりました。専門診療とはベクトルの異なる診療を、分子や専門性の側からではなく、別の角度から研究したいという気持ちが強くなり、日本ではまだなじみの薄い統合医療 (Integrative medicine) を勉強するため、Dr Andrew Weil が統括するアリゾナ大学の統合医療プログラムのフェローシップ課程を受講しました。このプログラムでは2年間のインターネットベースの通信教育をこなすこと、3回のアリゾナ大学のスクーリングに参加することが義務づけられており、修了者にはアリゾナ大学のフェローシップ課程の卒業証書が授与されます。ありがたいことに、通信教育ベースであったため、こちらでの勤務を続けながら受講することが出来ました。その受講の中では、①病気だけでなく健康と癒しに目を向けること、② Whole person medicine、③ライフスタイルの改善、④医師患者関係の見直し、という4つの軸を基礎に、代替医療の特徴、信頼性や各種疾患に対する統合医療の実際まで、幅広く教えていただきました。日本ではなじみが薄いうえに、単なる代替医療と西洋医学の組み合わせといったやや間違った認識をされがちな統合医療ですが、その内容は実に深く、医師としてのあり方のみでなく、人間としての生き方まで深く考えさせられました。日々総合診療部を受診される症例の中には、心の病が身体症状の原因となっており、その対策が最優先と思われる方がたくさん見受けられます。そういった背景から見ると、統合医療プログラムで学んだ心身医療への対策は、日本の医学教育では通常教えられていない心理学の分野が多分に含まれ、whole person medicine の観点から本当に素晴らしい内容でした。心身医療に少しでも役立ちたいとの思いから、その後日本でトランスパーソナル心理学の本を読みあさり、カウンセリングの講座を受講しました。カウンセリングの実践にはかなりしっかりしたトレーニングが必要であり、まだ日常診療の中で実践する技量は今の私にはありませんが、内科診療の研鑽と共に、心身医療の研鑽も積んでいくこと、その上で統合医療という形を目指していくことがこれからの私の目標です。

(群馬大学医学部 総合診療部 佐藤 浩子)

## ■国際活動

# 国際女医会

(Medical Women's International Association, MWIA)

国際女医会は1919年3名の女性医師により、New York で創立されました。当時は少数の女性医師の親睦で発足したと聞いています。

自国に女医会があれば、その女医会をとおして国際女医会に加入し、会員となれます。女医会のない国からは、個人の資格でも国際女医会の会員となれます。「自国に女医会がない」という状況は、国の思想や社会情勢で結社が禁じられている状態や、「医師会」に女医会が吸収された状態で、旧東欧諸国を含め個人会員もかなり存在しています。

それらを総合すると86カ国、約10万人の会員を擁していることになります。

1924年ロンドンで、はじめての国際会議が開催されたおりにも日本からの参加者が記録されています。第2次世界大戦のときの一時的な国際会議の中止はあったものの、3年に1度の総会は世界各国で開催され、女性医師の共通の問題を、同じ目線で討論しています。

国際女医会は NGO の団体として、国連や WHO と連動しても活動をしています。すなわち、WHO の地域会議には、近傍の女医会から代表を送り、毎年国連で開催されている「女性の地位と向上に関する委員会」には必ず、代表が出席し、他の NGO 団体との連絡やセミナーの開催をおこなっています。

国際女医会では地球を8つの地域に分けています。かならずしも地図にはそぐわず、日本は西太平洋地域 (Western Pacific Region) に、オーストラリア、韓国、台湾、フィリピンとともに属しています。現在ニュージーランドには個人会員がおり、香港は入会の意思表示をしています。各地域もまた3年に1度の総会を行っています。

私が群馬大学医学部の、当時中央放射線部助教授として勤務しはじめてまもなく、日本女医会が群馬県で開催され、若手助教授として基調講演の荣誉にあずかりました。そのときに経験した女性医師の毅然とした生き方や柔軟性に感動し、日本女医会の活動に積極的に関わろうと決意しました。日本女医会の理事となり、1992年に中南米の

## ■国際活動

国、グアテマラで開催された国際女医会にはじめて参加しました。当時の日本女医会会長は山崎倫子先生、現名誉会長で国際的に名だたる方、NGOの国連代表として活発な活躍もなさった先生。先生直伝で、グアテマラの会議をこなし、各国の代表とたくさん握手をかわし、会議の進行、表決の仕方などいろいろ学びました。

時がたち、2004年には日本女医会が国際会議を開催するチャンスに恵まれました。当時の会長、橋本葉子先生から私は事務局長を命ぜられ、皇后陛下の行幸を仰ぎ、完全デジタル方式での会議、CDでの記録など新しいことに挑戦できたことはとても貴重な経験でした。2004年の会議開催準備は2000年からはじめ、2001年のシドニーでの国際女医会議で開催の意思表明とアピールの演説をし、その場で投票、開催決定となるという、いわばオリンピック開催地を決定するルールと同じでした。

個人的なことですが、2004年国際女医会議の折に国際女医会会長に選出され、今日にいらっています。

群馬県高崎駅の群馬大学の広告には「acting locally and thinking globally」が掲げられています。私は現在、国内外を大体2対1の割合で行き来し、医師としての professionalism はどこにいてもかわりなく、社会人としての常識を持ち、謙虚に誠実に対処していく姿勢を崩さず、輝いて生きています。

(国際女医会会長 埼玉医科大学名誉教授 平敷 淳子)



## ■市民相談

# 『群馬いのちの電話』と私

### はじめに

「いのちの電話」は、少女の自殺をきっかけにイギリスで始まり、世界各地に広まったボランティア運動です。“誰にも相談できずに孤独で苦しんでいる方”に、電話を通して悩みを聴き、話し相手となり、心の支えになっていくことを目的にしています。

『群馬いのちの電話』は、1992年10月に全国37番目として開局。

いのちの尊さを感じながら、共に生きる輪をひろげていく運動を続けています。

また、2001年からは、厚生省の自殺防止事業の補助金をうけて、フリーダイヤル『自殺予防いのちの電話』を行っています。

設立準備段階より今日まで、私はこの活動にかかわらせていただくことになりました。

### 1. 設立前

1980年代後半、私どもの病院に精神科が併設され、小児科・内科の外来にも精神的課題を抱えた患者さんが増えてきました。10代後半～青年期の患者さんの課題は重く、我が子達も同世代でしたから、他人事ではありませんでした。その頃、友人のお子さんたち（10代後半）の自死、未遂があり、「未来ある若者のいのちに真剣に向き合いたい。」と、“そばにいて聴く”時を大切にしてきました。

また、1985年からは小児科医がお答えする「母乳育児電話相談」活動に参加し、電話を通じて向き合うことの意味を感じていました。

そんな最中の1989年夏、私どもの病院に通う青年が自殺しました。お母さんのお話では、『前日に受診したが、休診日で担当医は不在。誰かに話を聴いて貰いたくて、いのちの電話に夜通し電話を掛け続けたが繋がらず、翌未明に、街をさ迷った拳句の自死だった。』と。

私は、来院されたときチラッと彼を見かけましたが、彼の悩みがどんなに大きかったか気付かなかったことを後悔しました。

“いのちの電話”（全国に40近いセンターがあり、24時間・365日悩んでいる方達からのコールを待っていること）を初めて知りました。

---

## ■市民相談

### 2. 設立

“群馬にもつくりたい！”と願っていた矢先に、私の通うキリスト教会に、それまで『旭川いのちの電話』で活躍されていた牧師が着任されました。

周りに声を掛けてみると、他県のセンターで活躍している人、“群馬にもつくりたい！”と願う人がいました。数人の集まりから、共感の輪はあつという間にひろがり、1990年4月には約30人が集まり、第1回設立準備会開催に至りました。独立した場所を確保するまでということで、設立準備事務所を私ども上大類病院の研修センターに置き、資金集め・相談員養成等を経て、1992年10月には事務所を構え、相談電話を開局しました。

### 3. 今日

自己資金を積み立て、1997年には社会福祉法人となりました。

自ら研修費用を払い、2年間の養成訓練を受けたボランティア相談員は伸べ340人（実働170人）になりました。

2008年度の相談件数は、17,800件（1日当たり49件）、厚生労働省の補助金を受けて実施しているフリーダイヤル自殺予防いのちの電話では1日あたり56件でした。

相談員は、受講費用を払い2年間の研修を受けてから認定され、その後も毎月1回の継続研修に参加し、相談電話を受けます。守秘義務があり、参加していることを公言しませんから、実際に誰が相談活動に参加しているかを周りの人は知りません。

私は設立から今日迄、評議員・運営委員他として参加してきました。

この間、家庭では4人の子育て、通常診療週5日半、学校医他、高崎市の救急対応（小児科医師1人で、準夜診療所の二次・輪番病院）も担っておりましたので、この活動をボランティア意識だけで続ける事は困難でした。

5～6年経過した頃、自分自身が「いのち」を問うほどに大きい悩みを抱えて行き詰まり、悩みぬいた末に『いのちの電話』をコールし、悩みを聴き、涙の時を共有していただいた時、煙で充満した煙突のてっぺんを塞いでいる蓋が取り除かれたように、悩みで充満した頭の中から霧が一掃されたような経験をしました。

その後、高崎市の救急二次・輪番病院は辞退、『いのちの電話』を継続して今日に至っています。

毎月開催される運営委員会での最大の課題は、人材の育成・確保と活動資金の確保です。年間費用は約1,000万円。個人・団体・企業の寄付、共同募金他の配分金、県他の助成金、バザー等によります。最近是不況のあおりを受け、企業の寄付が激減して

■市民相談

います。

資金も人材も確たる安定はありませんが、約20年間この地にあり続けてきました。

県女医会の先生方には、群馬県女医会主催の講演会に、講師として『いのちの電話連盟理事長』の斉藤友紀雄さんをお呼びいただきました（1997年）。また、維持会員として、相談員養成・講演会講師として他、この電話の応援を下さっていることをこの場をお借りしてお礼申し上げます。

私は、1999年に日本小児科医会の「子どもの心相談医」の認定を受け、「こどものためのいのちの電話『チャイルドライン』を群馬に！」と願ってきましたが、まだその一歩も踏み出せていません。どうぞこれからもお力を貸してください。見守ってください。

『群馬いのちの電話』の概要

①電話番号

027-221-0783

②相談日

1月1日～12月31日（年中無休）

③相談時間

- ・毎月第1・第3金曜日は9時～翌朝9時まで。第2・第4金曜日は9時～翌朝10時半まで
- ・毎月10日はフリーダイヤル：0120-738-556。8時～翌朝8時まで
- ・その他の日：9時～21時半まで

④相談員数

延べ340名・実働170名。相談員は原則月2回の相談担当。無報酬。交通費・研修費等は自己負担。

⑤運営資金

個人・団体・企業他の寄付金が約60%、そのほかは、共同募金他の配分金、県他の助成金等。維持会員を募集しています。

⑥相談員の募集

毎年。20歳以上～65歳までの方。問合せ先：027-221-1880

（小児科医師 矢島晶子）

## 精神科市民相談開設のころ

平成14年2月に前橋医師会の一室に市内の精神科開業医と精神科病院院長が集まり会議がもたれた。前橋市の障害福祉課が平成14年度から精神科医療サービスの一環として「前橋市こころの相談」をスタートさせたいと市医師会に精神科医師の派遣を要請してきたことが、その時の議題であった。それまでも県の保健所や群馬県心の健康センターでは相談業務は行っていたが、市民のニーズに応えるべく新たに前橋市でその事業を行いたいとの市の考えであった。市の意向をくみ、最終的には医師会として行政に協力することが決まり、初回から私が担当することとなった。

早速、前橋市の広報に「こころの相談」の設置があげられ、私は障害福祉課の保健師2名（この保健師も相談業務ははじめてであった）と、平成14年から市役所地下1階の職員用保健室の机を借りてこの仕事を開始した。

当人が相談にみえることもあるが、数としては家族が相談にみえることが多く、その中でも問題を抱える人の母親、妻や娘という立場で来所される例が多かった。家族の中での女性の存在というものが、いかに全体的なものであり、決して軽くはない役割を担わざるを得ないものだということを改めて考えさせられる機会でもあった。女性の就業の有無にかかわらず、常に家族構成員とのかかわりのなかで女性は生きているがゆえに、相談時間を捻出して来所されたと思う。

相談の対象となった疾患は、日常診療でみられるものであったが、相談の内容は、病院の医師とのつきあい方から当人服用中の薬の副作用や効能、病気そのものについて、セカンドオピニオンを求めてなど幅広いものであった。家族のことで相談にみえたが、来所した人のカウンセリングになった例もある。客観的にみて、問題を抱えている人が日常的には話し相手にしている人あるいは精神的に依存している人は、その家族の中の女性であることが多いということも浮かび上がってきた。

この事業は、平成21年4月に新たに設立された前橋保健所の業務の1つとしてひきつがれている。多くの同僚や後輩にも引きうけていただきたい仕事の1つであると考ええる。なぜなら医学というだけでは割り切れない人間の社会的存在というものを考えさせられるからである。なお「前橋こころの相談 初期4年間の相談内容」は、群馬医学第86号に発表した。

（木村神経科医院 木村 寛子）



## ■群馬県女医会フォーラム

# 群馬県女医会フォーラム

### 第1回フォーラム

【日時】平成4年2月15日（土）

【場所】高崎ワシントンホテル

【演題／講師】

「窮屈でない靴の話」／高崎医師会 茂木條二先生



第1回フォーラムチケット

### 第2回フォーラム

【日時】平成5年2月13日（土）

【場所】高崎ワシントンホテル

【演題／講師】

「増えているヨ スポーツ障害!!」／富岡医師会 新井圭三先生

### 第3回フォーラム

【日時】平成6年2月19日（土）

【場所】高崎ワシントンホテル

【演題／講師】

「健やかな赤ちゃんに育てる為に」／高崎医師会 角田 隆先生



第1回フォーラム



第2回フォーラム



第3回フォーラム

■群馬県女医会フォーラム

第4回フォーラム

【日時】平成7年2月18日（土）

【場所】高崎医療センター

【演題／講師】

「正しい知識が貴方への想いです（エイズ）」／

日本女医会 吉永陽子先生

「お母さんの知らない息子たち」／

日本女医会長 佐藤千代子先生



第4回フォーラム

第5回フォーラム

【日時】平成8年2月17日（土）

【場所】ホテルメトロポリタン高崎

【演題／講師】

「健康のコツ、脳内革命」／春山茂雄氏



第5回新聞記事

第6回フォーラム

【日時】平成9年3月22日（土）

【場所】高崎ワシントンホテル

【演題／講師】

「寄生虫の話」／東京医科歯科大学 藤田紘一郎教授

第7回フォーラム

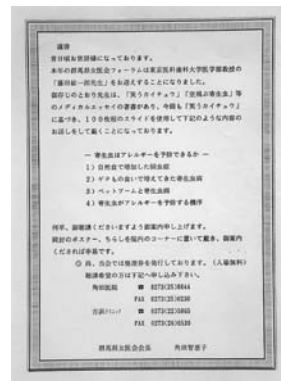
【日時】平成10年3月14日（土）

【場所】ホテルメトロポリタン高崎

【演題／講師】

「紫外線とスキンケア」／

群馬大学皮膚科 宮地良樹教授



第6回フォーラム



第6回フォーラムチケット

■群馬県女医会フォーラム

第8回フォーラム

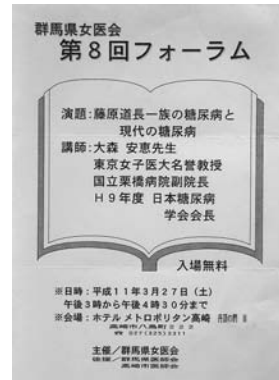
【日時】平成11年3月27日（土）

【場所】ホテルメトロポリタン高崎

【演題／講師】

「藤原道長一族の糖尿病と現代の糖尿病」／

元日本糖尿病学会会長 大森安恵先生



第8回フォーラム

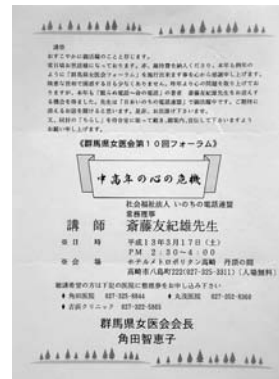
第9回フォーラム

【日時】平成12年3月1日（土）

【場所】ホテルメトロポリタン高崎

【演題／講師】

「心を癒す」／奈良薬師寺副執事長 村上太胤師



第10回フォーラム

第10回フォーラム

【日時】平成13年3月17日（土）

【場所】ホテルメトロポリタン高崎

【演題／講師】

「中高年の心の危機」／

日本いのちの電話連盟常務理事 斎藤友紀雄氏

第11回フォーラム

【日時】平成14年2月23日（土）

【場所】高崎ワシントン

ホテル

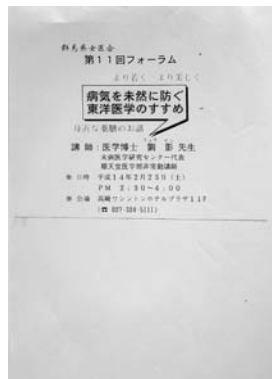
【演題／講師】

「病気を未然に防ぐ東洋

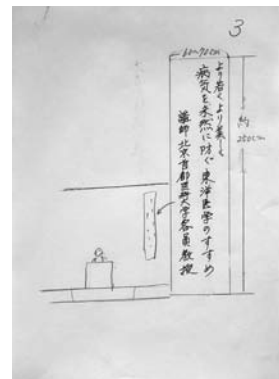
医学のすすめ『未病』／

未然医学研究センター代表

劉影先生



第11回フォーラム



第11回フォーラム資料

---

## ■秋季講演会及び学術講演会等

# 群馬県女医会秋季講演会及び学術講演会等

### 平成17年度秋季講演会

【日時】平成17年11月19日（土） 午後3時

【場所】マーキュリーホテル

【演題／講師】

「勤労者の腹部疾患」／埼玉医科大学放射線科教授 平敷敦子先生

### 平成18年度秋季講演会

【日時】平成18年10月28日（土） 午後2時

【場所】群馬ロイヤルホテル 2F 鳳凰の間

【演題／講師】

教育講演「ホルモン補充療法と循環器疾患について」／

北関東循環器病院長 市川秀一先生

特別招待講演 「私のスキー人生」／参議院議員 荻原健司氏

### 平成19年度学術講演会

【日時】平成19年3月14日（木） 午後7時15分

【場所】群馬ロイヤルホテル 9F ガーデニア

【演題／講師】

「女性の排尿障害診療」 講演と超音波診断機による残尿測定の実演／

さるきクリニック院長 猿木和久先生

【日時】平成19年7月15日（火） 午後7時15分

【場所】群馬ロイヤルホテル 9F ガーデニア

【演題／講師】「プライマリーでよくみる精神疾患について」／

木村神経科医院 木村寛子先生

■秋季講演会及び学術講演会等

【日時】平成20年1月19日（土） 午後4時

【場所】群馬ロイヤルホテル 鳳凰の間

【演題／講師】

「腰痛・下肢痛—腰部脊柱管狭窄症との関連について」／

埼玉医科大学 整形外科・脊椎外科 教授 高橋啓介先生

平成20年度学術講演会等

【日時】平成20年12月9日（火） 午後7時

【場所】マーキュリーホテル

【演題／講師】

「市中呼吸器感染症におけるニューキノロン薬の役割」／

群馬大学大学院病態制御内科学呼吸器アレルギー内科学 久田剛志先生

【日時】平成21年1月10日（火） 午後3時

【場所】群馬ロイヤルホテル ふじなみの間

【演題／講師】

「2型糖尿病の治療戦略」／順天堂大学大学院 教授 河盛隆造先生

\*はじめて会場に託児室を設ける

平成20年度女子医学生、研修医などをサポートするための会

【日時】平成21年3月6日（金） 午後7時

【場所】マーキュリーホテル

【基調講演／講師】

「女性医師の現状は」／群馬県女医会 副会長 山田邦子先生

【シンポジウム】

現役女性医師5名＋県医務課主任

\*日本医師会・群馬県医師会と共催。シンポジウム形式

---

## ■秋季講演会及び学術講演会等

### 平成21年度学術講演会

【日時】平成21年7月16日（木） 午後7時

【場所】ウエルシティ前橋

【演題／講師】

「ヘリコバクターピロリの新ガイドラインに関して臨床での応用」／

山下医院長 山下由起子先生

【日時】平成21年11月7日（土） 午後2時

【場所】「サンビューぐんま」社会保険群馬中央病院介護老人保健施設

【演題／講師】

「在宅高齢者の栄養管理」講習会—胃ろう栄養管理の実際—

（日本女医会 長寿社会福祉委員会主催 前橋胃ろうネットワーク共催）

／群馬中央総合病院 外科部長 内藤 浩先生

／利根中央病院 外科部長 郡 隆之先生

時代を駆け抜けた女性医師たち





## 日本の女医第3号

高橋 瑞子 ..... (たかはし・みずこ)



嘉永5(1852)年	三河国に生まれる
明治12(1879)年	前橋にて産婆弟子入り
明治15(1882)年	産婆免許取得
明治20(1887)年	日本で3番目の女医となる
明治21(1888)年	日本橋に開業
明治23(1890)年	ドイツ留学
昭和2(1927)年	76歳で逝去

高橋瑞子は嘉永5(1852)年三河国西尾藩の武士の子として生まれました。9歳で父に、間もなく母に死別し、長兄夫婦に養われましたが、強い性格から養家を24、5歳頃飛び出しました。苦勞の末、某知事の妾宅の小間使いの頃、前橋の教員の嫁に世話されましたが離婚。女中奉公説や車夫との同棲生活と2説ありますが、浮世の荒波を潜っていたようです。28歳の時、下仁田の福田産婦人科医に紹介を頼み、前橋の産科医の妻津久井磯子産婆の弟子として住み込みました。磯子は群馬県産婆会会長を40年勤めた県下の名流婦人でした。そんな磯子と男勝りの瑞子では並び立たぬと磯子の嗣子の意見もあり、磯子の学資援助を受けて浅草の産婆学校で学びました。明治15年内務省免許の資格を得ましたが、瑞子には女医になるための手段でした。同16年医術開業試験を請願しましたが女性は拒まれました。伝手を求め大阪の病院で勉強しましたが学費不足で前橋に戻ります。同17年6月女性の開業試験の許可が出ましたが女子の医学校はありませんでした。

そこで本郷の済生学舎の門前に長谷川泰校長(後の東大医学部教授)を待ち、三日三晩立ちつくし「教授と相談する」と言わせることに成功しました。同17年12月、女子の入学が認められました。瑞子以後の女医志願者の多くはここで学ぶこととなり、瑞子の捨て身の努力は後進の前途に明るい灯りを点じました。済生学舎は開業試験の予備校で月謝を毎月収める制度であり苦学者には好都合でした。教室は粗末で良い席の陣取りに瑞子は朝4時半に出発し90分歩いて通学しました。一人女学生の悪口や黒板の椰楡落書きよりも貧しさが敵でした。質物も尽き、内職で夜も寝ずに働き、金を貯めて再び登校しながら、ついに同18年春前期試験に合格しました。後期の臨床実地に佐藤院長の順天堂病院を選び断られましたが、院長の甥山口順一の労で研究生とし

---

て月謝を免除されました。しかし束脩（入学金）5円は払わねばならず「どうせ夜分は寝たことがないから」と夜具を売って充てました。それを聞くと佐藤院長は5円を瑞子に戻しましたが、それは聴診器となりました。明治20年3月36歳で後期試験に及第しました。日本で3番目の女医となりました。社交家瑞子は明治21年日本橋に開業しました。多くの医者がお祝いに見えた時、瑞子は師家の恩に初めて泣きました。商才に長けた男装の女医の診察は懇切丁寧を極め、貧富の差なく熱意と自信と誠実が意識下に働いていました。

生活の安定に停まらず医者の本筋を究める瑞子は、ドイツ留学の借金をしました。自国の女性も許可されていないベルリン大学入学を試み、当地にいた北里柴三郎もその勇気に一驚しました。下宿家の労で婦人科教授の客として勉学に励みますが、1年余で咯血し帰国することになります。

再び高橋医院は代診に女性の不都合もあり、数人の男子学生も寄食にとり学資援助をしました。60歳の頃、引退し、恩人津久井磯子の碑を前橋に建てました。昭和2年76歳で死亡。遺言どおり東京女子医学専門学校で遺体解剖され研究の資料となりました。同時に偉大な先覚者の精神を伝えることとなり彰功之碑が建てられました。

(伊藤洋子)



高橋瑞子彰功之碑  
(東京都世田谷区豪徳寺)

## 救らい事業にささげた生涯

服部けさ子 …………… (はっとり・けさこ)



明治17(1884)年7月19日 福島県須賀川に生まれる  
 明治38(1905)年 東京女医学校に入学  
 大正3(1914)年 医師免許を得、三井慈善病院に勤務  
 大正6(1917)年 草津聖バルナバ医院へ行く  
 大正13(1924)年 草津に鈴蘭園を開院  
 同年11月22日 心臓発作で逝去

らい（ハンセン病）は、遺伝ではなく伝染病であることは、ノルウェーのハンセンが1873年にらい菌を発見したことによって、証明されています。しかし、昔から、誤解や偏見・差別のため、らい患者は、親兄弟にも見放されるなど、辛い生活を強いられ、その歴史は悲惨でした。服部けさ子は、日本で唯一のハンセン病患者の自由療養地であった群馬県草津湯之沢にて救らい事業に命をささげた女性医師です。

服部けさ子は、福島県須賀川で、裁縫専修学校を卒業した後、父親に「吉岡彌生先生の開いた女医学校に入り、医者を目指したい」と懇願したところ、進歩的な考えの父親はけさ子の医学校進学を反対するどころか、せっかく医学を目指すなら「人の為さぬ医者になれ」と励ましました。

明治38(1905)年けさ子は東京女医学校に入学。同じころ、キリスト教にも入信します。在学中に、赤痢に罹り、重篤な合併症を併発し、死の淵をさまよいましたが、周囲の手厚い治療と看護、そして、教会の牧師や信仰の友の熱意によって、死から生還できたのでした。しかし、後遺症として、心臓弁膜症になってしまいました。けさ子にとって、この体験と、父親の言葉が救らいに生涯を賭ける動機となりました。さまざまな困難を乗り越え、大正3(1914)年念願の医師免許を手に入れますが、この時の合格率は6%であったといえます。医師免許はとったものの、当時、女医に門戸は開かれていなかったため、看護婦の身分で、三井慈善病院に勤務します。ここで、キリスト教の伝道師であり、看護婦の三上千代と運命的な出会いをし、3年後、先に三上千代が行っていた、白根山麓高原の谷間にある草津湯之沢集落に赴いていくこととなります。

けさ子が信越線沓掛駅（現中軽井沢駅）から駄馬の背に揺られながら、唐松や白樺

---

の林が果てしなく続く六里ヶ原を通過して、草津湯之沢集落に降り立った時、標高1,200メートルの高原は、冷気が肌を突き刺すような寒さだったといいます。けさ子と三上千代は、宣教師のイギリス人リー女史が開設した聖バルナバ医院での診療を始めます。近郊は無医村地区だったこともあり、来院する患者も多く、他に、学校医から警察医も兼ね、昼夜を問わない往診で、席の暖まる間もない多忙さだったといいます。近郊への往診には駕籠に乗せられ5、6キロの山道を出向き、日夜奔走しました。毎夜、枕元に提灯と聴診器を置いてどんな真夜中でも往診に応じました。しかし冬は寒く、学生時代に生死をさまよう大病を患った、虚弱体質のけさ子の体力は次第に消耗し、激務に耐えられないようになりました。

聖バルナバ初代医院長として就任してから7年がたったころ、けさ子は喘息の発作にも悩まされ、歩行をも困難をきたすような状態でした。そんなけさ子の体調を考え、また、増大する施設を抱えたりリー女史が新しい医師を迎える目途を決めたころ、大正13（1924）年にけさ子と三上は自分たちの新しい診療所「鈴蘭園」を開設することにします。

この診療所では、けさ子の体力を考え、らい病患者だけの治療に専念することになりました。しかし、鈴蘭園開院23日目、ついに、突然の心臓麻痺により、けさ子は40歳という若さで、急逝しました。鈴蘭園の周囲にはけさ子の死を悼む湯之沢の人々が集まり、その悲しみの声があたり一帯に満ちたといいます。服部けさ子の墓は、草津栗生滝尻原の墓地に三上千代の墓と並んで建っています。また、須賀川では、その功績をたたえて、「服部けさ賞」を創設し、顕彰碑も建てられています。その題額は、東京女子医学専門学校（現東京女子医大）初代校長の吉岡彌生女史のものでした。

この記事を書くにあたり、服部けさ子の生涯にふれ、重い心臓病をもつ身でありながら、らい患者のためにまさに身をけずって医療を成し遂げたその姿に、同じ医師として敬服いたしました。

（山下由起子）

## 名古屋帝大初女性医学博士

湯本アサ ..... (ゆもと・あさ)



明治35(1902)年	神奈川県箱根に生まれる
昭和14(1939)年	名古屋帝国大学初の女性博士
昭和31(1956)年	成美学園学園長
昭和54(1979)年	逝去

旧姓 中尾アサ  
 東京女子医学専門学校卒業  
 昭和27年を含む8年間 群馬県教育委員  
 昭和42・45・48年 日本女医会理事

女医の列伝を書くにあたって、私の古い記憶をたどっていると、卒然と思い出されたのは湯本先生のお姿でした。日時も定かではありませんが戦後未だ進駐軍と言って恐れ米軍とのコンタクトのない頃、女医会として太田の米軍病院の見学を企画され、十数人の女医を引き連れ、米軍人と会話する小柄な引きつめ髪の小母さんが、女医で医学博士、県教育委員という肩書きの先生でした。

もう少し先生の全容が知りたく、コンピューターで調べたら、以下の様な記述を発見、改めて先生の偉大さに驚かされております。以下名大史より。

昭和14年名帝大初の女性博士で、父親を早く亡くし貧しいなか、母と兄に支えられながらその抜群の成績により、奨学金などを受け、横浜英和女学校から東京女子医学専門学校に進学。中澤於君とは同期で学んでいます。同校を主席で卒業したアサは、卒業生で初めて海外に留学し、アメリカのミシガン大学から公衆衛生学の学位を授与されています。再度の留学先であるドイツでエリート官僚の湯本昇と結婚したアサは、1935年夫の赴任先である名古屋に同行し、そこで金城女子専門学校の講師をしながら、名古屋医科大学専攻科で研究を続け、同大学が名帝大となるのとほぼ同時に37歳で博士の学位を得たのです。その後、戦争による混乱や夫の病気などで、研究を断念せざるを得ませんでした。

戦後は教育家としても活躍することになり、群馬県の教育委員を8年務めました。戦後最初の県教育委員に立候補した際には、角田先生、丸茂先生も応援演説をなさっています。この後1956年に母校成美学園の学園長に就任し、以後16年にわたり、同学園の発展に大きな足跡を残しました。

---

以上ですが、これでやっと先生の全容を知る事が出来ました。この間、昭和42年から昭和50年まで日本女医会の理事も務められ、主に外交関係に属しておられたようです。先生の語学力をうかがい知る事が出来ます。前橋在住の10年足らずの間に、女医会としてご指導頂いたのは幸であったと思います。

(田所浪子)

## 女医会の草創期を担う

中澤於君 ..... (なかざわ・おきみ)



明治37(1904)年	高崎市砂賀町に生まれる
大正11(1922)年	高崎女子高校から東京女子医学専門学校に進学
大正15(1926)年	東京女子医学専門学校卒業
昭和3(1928)年	東大附属病院で研修後、高崎に石田眼科医院を開業
昭和4(1929)年	中澤賛と結婚
昭和57(1982)年	旅行先で急逝 享年78歳

群馬県女医会の草創期である、戦後の混乱からやっと立ち直った昭和22年頃、高崎市内に在住の数名の女医たちが親睦団体としての高崎女医会を結成しました。年長の中澤先生を中心として後進の指導にあられたのが群馬県の女医のあつまりの始まりのようです。長身で歯切れのよい中澤先生が音頭取りで、常連には柳川町で産婦人科開業の勝俣栄子先生、保健所勤務の海老原ふみ江先生、秋田キミ先生、産婦人科の松岡寛女先生、角田智恵子先生等。私のおぼろげな記憶ですが、後輩の女医の卵には力強い先輩たちでした。

(田所浪子)

# 結核と戦った生涯

高間 美さ保 …………… (たかま・みさほ)



明治42(1909)年2月6日 前橋市立川町に生まれる  
昭和6(1931)年3月 東京女子医学専門学校卒業  
昭和22(1947)年10月 群馬県立教員保養所所長勤務  
昭和36(1961)年 前橋保健所長  
昭和49(1974)年 群馬結核検診センター所長  
平成3(1991)年1月7日 逝去

昭和32(1957)年5月3日 群馬県知事表彰(保健衛生功労)  
昭和55(1980)年4月29日 勲五等瑞宝章(自治功労)

## 伯母高間美さ保と私

高間美さ保は、高間長太郎、よしの長女として明治42年、前橋市立川町で生まれました。私の母と2人姉妹で、父長太郎は建具商を生業としていました。

美さ保が何故女医を志したのか今となってはわかりません。小学校卒業後桐生の親戚の小暮医院から学校に通っていたようです。多分その影響から医師を志したのではないか、というのが私の想像です。

## 昭和20年代前期

群馬県教員保養所長に任命されたのが昭和22年。その頃より私の記憶も始まります。所長宅は大きく広く、伯母は両親との3人暮らしでした。

兄姉たちとよく伯母の家に遊びにいきました。庭にはトマト、キュウリ、なす、スイカ等野菜や果物が、外に出ると広瀬川の近くでセリ摘みと、当時保養所があった江木の環境は子供の遊び場にはことかきませんでした。

若い医師や看護婦さんが伯母に対し所長、所長と敬愛の念をもって話されているのを聞いて子供心に自慢でした。

## 昭和20年代中期

昭和24年、桃井小学校に入学した私を伯母はよくスキーに連れていってくれました。いつも職員の人達と一緒にバスで行先は大穴スキー場でした。

すべっているよりストーブの前でどっしりと腰をすえて、おにぎりを食べ、お酒を



飲みながら職員の人達と話し込んでいる姿の方が印象に残っています。

一度だけ大雪で大穴スキー場に着けず、途中から歩く事になりました。スキーをかついで吹雪の中を、伯母は皆をはげまし、自らもスキーをかついで歩く姿は、まぶしく大きく見えました。

## 昭和20年代後期

昭和27年、ある秋の日、私は自転車で公園の坂を猛スピードでおりていきました。あっという間に転倒し、ひざを強打し、すり傷ができてしまいました。

しばらくして、物が二重に見え始め、何か変だと羽生田先生に診てもらいました。その後、伯母と羽生田先生が深刻な顔で話をしています。ひざからばい菌が入って体にまわり、目までできているという話のようでした。それから毎日おしりにペニシリン注射をされました。あんな真剣な伯母の顔を見たのは初めてでした。

「ペニシリンがなかったら大変だったのよ」と毎日様子を見にきてくれるその笑顔はまるで神様のようでした。

## 昭和20年代後半から30年代

昭和26年、伯母は前橋市神明町に家をかまえ、その後はよく我が家に遊びにきました。

手術のあと、夜遅くなる事が多く「今日の手術はすごかった。あばら骨をはずして、何時間かかったかな……」。疲れた様子もなく、心身ともに充実し、当時不治の病と言われた結核と真正面から取り組み、すべてをかけて戦う姿に子供心にも尊敬の念を持ち、わくわくしながら時のたつのも忘れ、聞き入っていました。

## おわりに

昭和55年、勲五等瑞宝章の祝賀会が夏の暑い日に開催されました。

紺紫の縞の訪問着で挨拶されました。その後母と2人で三味線を弾きながら小唄を唄い、まさに拍手喝采でした。

伯母は生涯独身で医療一筋、男まさりと言われる反面、子供の頃より邦楽に親しみ、三味線、長唄、小唄の師範でもありました。

幅広い教養と女性らしい繊細な神経を兼ね備えた、まさに信念の人でした。晩年は好きな推理小説を読み、気楽な一人暮らしを楽しんでいました。

伯母の一生は、充実した幸せな生涯であったと今あらためて感じています。

(美さ保の甥 小川屋社長 荒木 俊)

# 病人を診る医者でありたい

岸 直枝 …………… (きし・なおえ)



明治42(1909)年11月14日 山田郡大間々町(現みどり市大間々町)に生まれる  
昭和 8 (1933)年 3 月 帝国女子医学薬学専門学校医学部卒業  
昭和 9 (1934)年 父・茂急逝により高木医院後継者となる  
昭和30(1955)年 岸病院副院長に就任  
昭和36(1961)年 岸会岸病院理事長兼院長に就任  
昭和41(1966)年11月 社会福祉法人桐の実会わたらせ養護園理事長兼園長に就任  
昭和45(1970)年 6 月 群馬県女医会会長兼日本女医会群馬県支部長就任  
昭和54(1979)年 5 月 ガールスカウト日本連盟会長に就任  
平成 3 (1991)年 桐生ユネスコ協会会長に就任  
平成 9 (1997)年 1 月 2 日 逝去

昭和28(1953)年12月 県教育委員会より学校医永年勤続表彰  
昭和44(1969)年11月 群馬県功労表彰(児童福祉・社会教育)  
昭和46(1971)年 日本女医会より吉岡弥生賞受賞  
昭和49(1974)年 5 月 全国市町村教育委員会連合会より教育委員会永年勤続表彰  
昭和54(1979)年11月 厚生大臣より社会福祉功労表彰  
昭和56(1981)年 4 月 勲四等宝冠章

## 桐生での開業女医 1 号 《病気を診るのではなく病人を診る医者でありたい》

先生が桐生で開業されたのは昭和 9 年、ご父君の高木茂先生が逝去された後の医院を継ぐためでした。その前年女子医専を卒業して東京の大久保病院に勤務して僅か 1 年後、25歳の時のことでした。

当時桐生ではみたこともない開業の女性の医師に戸惑い「あんな若い女の医者に診てもらうなんてとんでもない」という気風が強く、往診のとき洋服を着ればダンサー、和服を着て袴をはいて行けば宝塚が来たなど奇異の目で見られ、診療以外のことでの苦労が多かったようでした。

当時まだ梅田町、菱村など呼ばれた隣接する地区への往診は人力車でした。患者までの山道には鹿や山鳥が出てきたりしたとか、重症の患者さんでどうしても病院での

治療が必要ということになると、現在のように自動車が普及しておらず、救急車の整備もされていなかった時代でしたから、病人は戸板に乗せて先生が付き添い山道を下って入院させるしかなかったのです。

高熱が続く患者さんがいれば、夜を徹して付き添って励まし続けたことも度々あったそうです。このような先生の暖かい心遣いのある診療に触れているうちに、人々の物珍しさや偏見がいつの間にか「優しくていい先生」という評価に変わって来ました。

しかし、卒業して1年で開業した先生は、もっと勉強しなければ患者さんに満足してもらえる診療にはならないと思い、毎週金曜日の夜、診療を終えると夜行列車で上京、大久保病院にて研修し月曜日の朝帰宅して休む暇もなく診療する、こんな日々が続きました。新幹線や高速バスなど便利な交通機関が整備、発達した現今では考えられない大変な努力だったのです。

先生は学生時代に、よく似ているので双子とまで言われ無二の親友となった相馬翠先生のご実家、神奈川県二宮町の知足寺に下宿することになりました。お寺には大勢の学生たちが生活しており、先生もそのうちの1人でした。朝、お念仏の修行が終わると朝食をとり東海道線で大森の学校へ通う、こんな生活が卒業まで続いたそうです。辛いことも多く心に迷いが生じたこともありました。

そんな時、住職の千里上人から「病気を診る医者になるのか、病人を治す医者になりたいのかよく考えてみよ」と諭されたそうです。さんざん考えてお上人の言われた意味がよくわかったのは、ご父君亡き後の医院を継がれてから5年経ってからだったそうです。そうしたら徐々に医療現場に溶け込め、患者さんの信頼を得ることができるようになったとか。

私が直枝先生にご指導を受けるようになってから40年余り、先生の左手首から一時も離れたことのない水晶のお数珠には、深い意味のあることを伺いました。昭和3年に知足寺のお上人から「左手は人間の手だから患者さんを診るとき如来さまに助けてもらう、右手は如来さまのお手だからそのまま胸にあてればいい」こんなお言葉をそえて頂いたものなのだそうです。

医の心と信仰、患者さんの側にたつての思いやりのある診療が桐生の人たちを魅了したのでしょう。

## わたらせ養護園 《わたらせの子供たちは私の命》

昭和10年の秋、先生は近郊のある家へ往診しました。診察を終えて帰りしなに、ふと通りすがった部屋に女の子がいるのに気づかれました。戸外の明るい暖かさに比べ

---

寒々とした薄暗い部屋に閉じ込められていた少女は、家の人に食事を養ってもらいながら先生の姿をじっと追いかけていたのです。その姿にハッと胸をつかれた先生は、障害をもった子供だから人目を避けて育てられているあのような子供たちを、燦燦と輝く太陽の下でのびのびと遊ばせてあげたいという思いに強く胸をつかれました。

直枝先生のみそかな「夢」わたらせ養護園設立の動機が芽生えたのです。

先生は、昭和39年10月東京オリンピック開催の日、日本精神病院長会議欧州視察団の一員として羽田空港を出発しました。まだ南周りの便しかない時代、飛行機は夜を追いかけながらのフライトでした。ようやくオランダに到着して、真っ先に訪れたのは精神障害者の施設でした。

先生が訪問した日はある老人夫妻が自分の家を開放し、私財を投じて障害のある村の子供たちを集めたことが礎となって作られたというこの施設が開かれて100年目を迎えた記念すべき日だったのです。青空の下、笑顔で元気に遊ぶ子供たち、広い敷地に建てられている立派な施設を見学し、加えてここまでの苦労や、地域あるいは心ある人たちの理解や協力が得られるまでになった経緯など、いろいろと話を聞いているうちに、直枝先生は7年前、逝かれたご夫君と語り合った障害を持つ子供たちの施設は、どんな困難も乗り越えて作らなければと心に誓ったのです。

ヨーロッパから帰国して早速、施設の用地を探し始めました。まず、子供が急病になったとき、岸病院からいち早く往診に駆けつけられるところ、そして広々として太陽が一日中燦燦と輝くところなどと、子供たちの居住に適した環境を優先して探しあぐねた末決まったのが新里村奥沢（現在桐生市）でした。

昭和41年7月、ようやく着工の運びになりましたが、土地の整備、園舎の建設、職員の採用、福祉施設としての認可の取得等々、困難な問題が多々ありました。でも施設長になられた清水俊衣先生（直枝先生のガールスカウト活動時代からの盟友）はじめ周囲の人たちの理解と協力、そして励ましに支えられ、昭和41年11月、先生が幼い頃から親しんできた渡良瀬川に因んで命名された「わたらせ養護園」がスタートしたのです。

入所を必要とする子供、障害を持つ幼児に対して、「わたらせ養護園」では母子分離（セパレーション）という教育の方法を採りいれました。依存性の高い障害児に、幼児期から基本的な自主性や自己認識をさせるという治療効果を挙げることのできる教育方法です。

初めは母親も子供もともに泣き別れでしたが、子供たちは園の集団生活になれるに従い元気になり、週末に自宅に帰る日を待ちわびるようになりました。口もきけず笑

顔も見せない幼児が、母親の姿をみるととてもいい顔になる、そんな様子を見るたびに直枝先生は胸がつまって涙が溢れてしまうのです。

「わたらせの子供たちは私の命、天使なの」目を細め嬉しそうに子供たちのエピソードを聞かせていただく度に、私も心の和む思いがしたものでした。

注：わたらせ養護園で実施した母子分離（セパレーション）とは、アメリカ・オハイオ州クリーブランドのケース・ウエスタン・リザーブ大学、メンタル・デベロップメントセンターにおける母子分離の理論に基づいた実践。

## 花ひらく 《性教育とは人間教育である》

「生まれる前から育児が始まる、と言われてるように健康な赤ちゃんの誕生を望むならば、妊産婦は心身ともに安定した環境の中で暮らすことが大事です。家族を始め周囲の人たちとの豊かな人間関係の中でこそ、母親となる女性はやがて生まれくる子供（胎児）にも愛情を注ぐことができ、母子の固い絆が結ばれるようになるのです」直枝先生はいつも、こう言っておられました。

先生は開業当時から桐生市ならびに近隣地域の小学校、中学校は勿論、県立桐生女子高校の校医も引き受けられ、お忙しい診療の合間をぬって子供たちの健康管理に心をくわしておられました。

校庭で男の子も女の子も入り混じって楽しそうに遊んでいる。あの子たちは将来、父親、母親となる命の働きがある故に発育・発達の段階の中で性差が現れ、生理面だけでなく性にかかわる意識や行動に、明らかな違いができたとき戸惑わないだろうか。このことを理解できるだろうか。とくに思春期へ到達した時、初潮（初経）を迎えた女子、精通を経験した男子が悩みや不安になって、自分の性を否定するようなことがないだろうかと心配になってきたそうです。まだ「性」についてはタブーの時代でした。

先生は「性とは心を生きる人間にとって一番大切な生命の営みであり、男女間の体や心の動きの違いを学ばなければ、お互いに相手を思いやるいい人間関係はつくれない。とくに精子と卵の合体は生命創造にとってとても大事なことである」という信念のもとに子供たちへの性教育を始められたのです。

直枝先生の爽やかなお話し振り、そして人間味溢れるお話の内容は子供たちばかりでなく大人の心にも感動を与え、性を興味本位に考えることが少なくなりました。

このことが後に「ぐんま思春期研究会」を設立する原動力になったのです。

「人々は小さな蕾から花を咲かせるために、毎日怠りなく手入れをする。母親の暖

---

かい手に抱かれて微笑む赤ちゃん、あどけなく穢れを知らない瞳を輝かせて遊ぶ幼児、何でも知りたいという旺盛な探究心のおこる小学生、そろそろ性に目覚めて悩みが多くなってくる中学生、それぞれの年代は蕾から美しい花を咲かせようと栄養分を吸収する人生にとって最も大切な時期なのである。心を込めて手入れして、正しい知識を与えてこそ将来人間として美しい花を咲かせることができる」直枝先生はいつもこう言うておられました。

現今のように誤った興味本位の性情報が氾濫し、性を遊び感覚でとらえ生命を軽々しく考えているような風潮をみて先生は、人間にとって一番大切な「生と性」について大人自身が、もっとしっかり考えなくては行けないと、嘆いておられるかも知れないと思うことが少なくありません。

子供をめぐる医師をはじめとする医療関係者、学校教育従事者だけでなく家庭・地域すべての人たちが力をあわせて、子供たちになにもものにも代えがたい生命の大切さを伝えることが、美しい「花ひらく日」になることを念じています。

## あとがき

直枝先生に伺ったさまざまなご指導を思い出しながら筆をとりました。私たち女性医師の大先輩、直枝先生は社会福祉面でも大きな業績を残され昭和54年11月厚生大臣表彰、56年4月勲四等に叙せられ、宝冠章を授与されました。

(佐藤 ち江)



天使たちと遊ぶ直枝先生

## 戦後の混乱期、公衆衛生に尽くす

石澤雪江 ..... (いしざわ・ゆきえ)



大正 2 (1913)年 1月 1日	沼田町(現沼田市)に生まれる
昭和 4 (1929)年 3月16日	群馬県立沼田高等女学校卒業
昭和 5 (1930)年 4月10日	帝国女子医学専門学校入学
昭和10(1935)年 3月10日	帝国女子医学専門学校卒業
	3月 医師免許登録第79096号受
	3月 東京都渋谷区宮代町日本赤十字産院勤務
昭和11(1936)年 3月31日	日本赤十字産院退職
	4月 5日 東京都日本橋区蛸殻町産科婦人科大石病院勤務
昭和14(1939)年 3月25日	大石病院退職
昭和18(1943)年 4月10日	群馬県利根郡沼田町産婦人科角田医院勤務
昭和22(1947)年 9月25日	角田医院退職
	9月25日 群馬県立沼田保健所勤務
昭和25(1950)年 5月 1日	群馬県立沼田保健所保健予防係長
昭和28(1953)年 3月31日	群馬県立沼田保健所保健予防課長
	4月 1日 群馬県庁公衆保健課保健係長
昭和29(1954)年 9月 1日	高崎保健所予防課長
昭和53(1978)年 3月31日	高崎保健所退職
平成16(2004)年10月28日	逝去 享年91歳

石澤雪江は沼田市の開業医の子として大正2年に生まれました。第1次世界大戦が大正7年に終り、戦勝国だった日本の大正デモクラシー時代に小学校教育をうけました。小学校卒業後沼田高等女学校(現沼田女子高校)に入学とエリートコースを歩みました。父親の希望で医者道に進むことになり、真面目で勉強一本で過ごしたようです。当時、女性が医師になるには日本には2つの女子医専しかありませんでした。雪江さんは帝国女子医専に入学しました。予科1年本科4年の5年間寮生活をしました。1部屋5～6人で全国から集まった学生の言葉や食べ物等沼田とは異なり、興味津津のようでした。1部屋5～6人の寮ではプライバシーが守られるとは思えませんが「日本中質素であり、健全な時代であった」と回想されています。昭和10年卒業すると医師となり(国試もインターンもなかった)産婦人科研修に東京の日赤に入り、昭和12年25歳で東京の開業医と結婚し、3人の子供を出産しました。

しかし、昭和11年2.26事件は戦争一歩手前の情勢、急激な時局の進展のなかで、若い

---

医師夫婦の静かな生活は続きませんでした。医師達も軍医として戦場に駆り出されました。昭和16年太平洋戦争が始まり、男達は根こそぎ動員され、ついに夫に召集令がきました。夫のいた宇都宮連隊の面会に3歳の手をひき、2歳をおんぶして4ヶ月の子は無理と連れてきませんでした。夫は最後の別れになるかもと残念がったそうです。その後、実家の沼田で夫の戦病死の知らせを受けました。静かな山間の城下町も「軍都沼田」と化し、沼田も危ないと父の生家赤城村南郷に疎開しました。当地で産婦人科以外に内科外科小児科医として活躍しました。昭和20年2月25日には沼田が爆撃を受けました。昭和22年9月から沼田保健所勤務となり、公衆衛生分野の仕事と変わりました。当時、食糧事情は劣悪で餓死者も多く、衛生状態はどん底にあり、赤痢結核等伝染病が蔓延し、孤児の栄養失調問題等山積した状態でした。家族の事情で高崎保健所予防課長として65歳まで勤務しました。「最初は本当に大変でしたが、定年近くになり気持ちも生活もゆとりが出て楽しかったですね」と話されたそうです。

高崎市民新聞「石澤雪江さんが語る」より

(伊藤 洋子)



## 常に変わらぬ平常心

野村真世子 ..... (のむら・まよこ)



大正6(1917)年5月13日 福岡県浮羽郡田主丸町に生れる  
昭和14(1939)年3月 帝国女子医専卒業  
昭和16(1941)年12月6日 野村産婦人科院長寛氏と結婚 前橋在住  
平成15(2003)年1月21日 逝去

私と先生との出逢いは、昭和31年長男の出産に遡ります。当時夫君の寛氏が主人の薬理学教室に博士論文のために通われていたので、先生の医院にお世話になる事に決めました。肋膜炎と気胸で肺活量の少ない私は、再発の恐れもあり、子供を産むのは禁止されていましたが、先生のお陰で2人の子供を産む事が出来ました。更年期前後の不調な折も、女医先生であるという安心感もあり受診しておりました。当時は14年間も脳出血を繰り返される体の不自由な夫の介護をしながら外来、入院、出産迄一人でやっておられました。常に変わらぬ平常心と生来の美貌とおだやかな目差しで端然としたお姿が目につかびます。一周忌にお招き頂き、ご子息の克明な記録によりこの一文を書かせて頂きました。

(田所浪子)



# 旦尾健康づくり助成基金創設

旦尾雅子 ..... (あさを・まさこ)



大正10(1921)年7月31日 前橋市に生まれる  
昭和23(1948)年3月 東邦女子医学専門学校卒業  
昭和33(1958)年8月 医学博士号取得  
昭和36(1961)年12月 小児科医院開設  
昭和62(1987)年1月 「財団法人旦尾健康づくり助成基金」創設  
平成21(2009)年8月8日 逝去

8月7日は60年史の編集会議の日、その夜から旦尾基金の事が気になり、8日、9日の土日に群馬県医師会史や前橋市医師会史を調べましたが、唯一行「財団法人旦尾健康づくり助成基金設立、旦尾賞を毎年募集」と書かれているのみでした。翌朝の上毛新聞のおくやみ欄に、旦尾雅子8日死亡10日1時告別式との記事に、私は何か不思議な思いにかられて葬儀に出席致しました。実子のなかった先生の養子一家が葬儀を執り行い4人もの弔辞があり、先生のお人柄が偲ばれました。山歩き仲間との交友俳句では毎月東京まで通われ句集を発刊なされたり、勿論基金より生花もとどけられておりました。私は彼女につき動かされるように早速旦尾基金について県医師会に問合せたところ、それは県の方にあると資料を取り寄せてファックスして下さいました。あと写真をと探しておりましたら、夫の書棚になんと「ぐんまの顔 二十一世紀に伝える先人たちのメッセージ」なる本を見つけその巻頭に先生の笑顔と「女医として健康づくりの八十年」と題した一文があるのです。それは先生が生で語りかけるような文面なのです。ここに抜粋いたします。

「財団への基金の1億円は生涯独身だった私の社会への感謝を込めた還元に過ぎません。出来るだけ地域の医療に携わる心やさしい方々の一助となればと考えております。女医として乳児期の健康管理の重要性を感じて居たからです。と同時に乳児期から病弱だった自分を育ててくれた父母への感謝の気持ちが募ってきます。2人の娘を医専に入れ姉が在学中に病没したので親への恩返しが私の役目でした。それなのに折々の俳句で偲ぶ以外何も出来なかった事が悔やまれます。」と結ばれておりました。下記に財団の概要全文を入れます。旦尾先生の業績は女医会として特筆すべき事だと思えます。

(田所浪子)

## 財団法人 旦尾健康づくり助成基金の概要

### 1 設立の経緯

昭和36年に前橋市朝日町に小児科医院を開院後、40年以上にわたり小児医療に従事し、併せて永明小学校の校医を約30年間務めるなど、地域の母子保健医療の向上に寄与してきた旦尾雅子（あさをまさこ）氏が、昭和62年、県民の健康づくりのために何か貢献できないかと考え、自ら浄財を拠出して、財団法人「旦尾健康づくり助成基金」を設立し、県民に密着した健康づくりに関する幅広い調査・研究等に対して、その活動費を助成することとした。

### 2 財団設立年月日 昭和62年1月6日

### 3 事業内容

#### ・あさを賞

県民の健康増進・疾病予防等健康づくりに役立つ調査研究及び、地域における保健活動に対する助成事業。

個人又はグループを対象に広く募集し、応募のあった調査研究等について審査の上、該当者に対して研究費等の助成を行う。

設立以来、平成20年度までの22年間で、147件（共同研究者を含めると、1,700人を超える研究者等）に対して「あさを賞」を授与してきた。



私の忘れられない一枚



## 昭和44年桐生女医会

【昭和44年2月17日】

桐生女医会の歴史をひもときます。

本会は故岸直枝先生や疋田静江先生等の御発案により、女性医師17名の親睦を深める目的で結成されました。

昭和43年2月28日桐生市内の割烹に於いて、第1回桐生女医会新年会として13名の御出席のもとに開催されました。

初代会長岸直枝先生、2代目会長金子栄美也先生の御指導のもと、それ以来、毎年、お正月行事の終了する2月に行われて参りました。毎年2～3名の会員の組み合わせによる幹事を定め、1年間を受け持ちます。平成21年2月には会員数31名に増加し、2月17日に第42回の新年会を挙行政致しました。

北川医師会長、大澤・飯山副会長の御出席のもとに、フランス料理を食し乍ら、楽しい2時間を過ごしました。

以上、簡単に経緯を記しました。

これからも会員相互の融和を図る為に続けてゆきたいと思っております。

(志村佳子)



桐生女医会 吉野家

---

## キャンパス内にあった無認可保育所

【昭和49年】

群大医学部キャンパス内にあった、無認可保育所の写真です。昭和49年頃のクリスマス会の集まりだったと思います。

大学の物置小屋をお借りした0～3歳までの教職員の子弟の保育所でした。大学内で仕事をしながら認可保育所づくりに母親たちが中心に頑張りました。子供たちは同月年齢の集団の中で家庭では体験できない遊び、運動、食事等をとおして社会性を身につけたことと思います。片言で話すようになった我が子が「じゅんばん」と言ったのを印象深く記憶しています。

(伊藤 洋子)





## ハワイ大学夏季セミナー

【昭和54年7月】

昭和54年7月、日本性教育協会主催のハワイ大学夏季セミナーが実施された折、直枝先生と女子医専からの無二の親友相馬翠先生が参加されました。20歳代から50歳代前半までくらいの研修生のなかに、お2人のように70歳を超えた方の参加は主催者も初めての経験でしたので、とくに仲間との人間関係が危惧されました。

毎朝専用バスで大学へ、午前中は講義、お昼は学生食堂、午後は講師、研修生を交えての討論会や実習。これらが終わると25セントで何回でも乗り換えられるワンマンバスでホテルに帰るという厳しいスケジュールでした。でも時折スーパーマーケットで買い物をしたりするなかで、先生は若い人たちと仲良しになって母親のようにしたわれるようになり、危惧された問題はなくなりました。

この写真はハワイに着いた夜の歓迎会で、ダイヤモンド教授ご夫妻とご一緒したときのものです。直枝先生と私（佐藤ち江）との間が相馬翠先生です。

（佐藤ち江）



---

## 社交ダンス部発足

【昭和54年】

昭和54年、前橋医師会に社交ダンス部を作りました。部員は女性3名、男性数名でした。発足1年足らずで第1回の発表会を行いました。当時は現在の様なブームにさきがけて20年程前でしたので、先端的な催しでした。楽団は高崎の医師会で編成するグループが応援して下さいました。

時は流れ20年、柳川先生はまだ続けられ年1回位、東京のホテルで発表会をなさいます。太田先生は私と一緒にパートナーのいないフラメンコに変更され何度か女医会でも踊ってくださったり、個人発表会も開かれました。その後スキーで膝を痛められ中止されております。発起人の私は年齢的にいち早くドクターストップがかかりました。

(田所浪子)



## メーデーの日に

【昭和60年4月30日】

昭和60年（1985年）4月30日、ヘルシンキの空港に到着しました。空は暗い雲に覆われ港は氷に閉ざされていましたが、まだ薄明かりの残る午後8時の町並みは大勢の人たちでごった返していました。明けて5月1日は、フィンランドの人たちが待ちに待ったメーデーなのです。官庁も銀行もすべての商店、事務所もお休み、腰に色とりどりの風船をくくりつけ、カラフルなテープを首に巻きつけ、笛やラップを鳴らしながら、通りすがりの老人も若者も抱き合ったりキスしたりして歩いているだけなのです。外国人にも分け隔てがないのでしょうか。すてきなおじ様にいきなりハグされてびっくりした私でした。

日本のように山車も踊りもカラオケもないのですが、待ち望んだ春の訪れを人々が全身で喜び合う様子を目の当たりにして、冬でも暖かい陽射しに恵まれている上州に住む私は、春が来たことをこんな風に喜んだらうかと考え込んでしまいました。そしてメーデーとは労働者のお祭りという認識を新たにしました。

それから20年、社会経済情勢、環境も大きく変貌した現今、春を待つお祭り「メーデー」の風景を思い出しながら、ヘルシンキのことを懐かしんでいます。

（佐藤 ち江）



---

## 前橋医専最初の女医たち

【昭和60年】

前橋医専は男子校でした。昭和22年学制の改革で男女共学が許されました。私は家庭の事情でいち早く4月に転入学しましたが、その後の1年間に福島女子医専の先輩後輩が8名、帝国女子医専より1名、秋田女子医専より2名と計12名の女子学生になりました。写真は、福島よりの3名の先輩と私です（前列左より矢野・小川、後列左より田所・後藤）。

小川先生は助産婦から医専に再入学し産婦人科医として地元足利で開業し、性教育にも力をいれ地元の名士として活躍されましたが、癌で他界されました。矢野先生は長女の障害を機に障害者の「希望の家療育病院」を開設され県の表彰を受けられ、またご主人が日医役員として活躍されるのを助めました。

後藤先生と私は何れも基礎医学に残った夫を経済的に助けるべく、後藤先生は県庁保健課に勤務、その間米国留学等もあり3人のお子様も育てました。私は内科開業医として50年、長男長女も夫と同じく大学に残り帰って来てはくれません。それが元気の素だと思っ

て居ります。  
私たちの時代は縁の下の力持ちで家や夫、子供を支えながらまた決して医業を途中で放棄いたしませんでした。 （田所浪子）



## カナダ思春期・家族計画事情視察研修の旅

【平成2年9月】

平成2年9月、カナダ思春期・家族計画事情視察研修の旅に参加しました。トロントで訪れた家族計画クリニックは、小さな花で飾られた案内板がなければ、普通の住宅のようで相談に訪れる人が入りやすそうな、やさしい心遣いが感じられました。

小児病院見学後、オタワの高校を訪問した時、婦人科の診察台があることや高校生の服装のカラフルさに驚かされました。次に訪れたモンリオールはフランス語人口が85%を超え、パリの町並みを思い出させるようでした。ここで最後の研修を終え、当地の家族計画協会の会長コウエン夫人のご自宅へお招きされたときの写真です。きれいな花が飾られたテーブルにおせんべいや日本茶を用意して下さった優しいお心遣いの夫人と、日本風のたたずまいの石亭で丸茂先生も一緒に写した1枚です。

(佐藤ち江)



---

## 世界性科学会参加の折に

【平成3年6月】

アムステルダム郊外のマドロウダムは、オランダのために戦って死んだ息子の思い出のために、その両親が基金を出して作らせた記念の公園で、歴史的にも特徴のあるオランダの建物や町並みが、実際の25分の1に縮尺して作られたものです。広場の人たちは王宮の衛兵交代も小さな人形が動き、風車が回り運河に船が、そして驚いたことに空港では飛行機の離陸さえ見られるのです。ついつい時間を忘れて楽しんできました。平成3（1991）年6月。世界性科学会参加の折のことです。

（佐藤ち江）



## 学校教育相談カウンセリング研修の旅の折に

【平成10年3月】

平成10（1998）年3月、学校教育相談カウンセリング研修の旅に参加した折、アメリカコネチカット州グリニッジの町はずれの林に囲まれた小さな高校を訪問しました。肌の色が違うという外見上のことでのいじめ、情緒障害、学習上の問題や家庭環境の不適切などが理由で普通の高校に通学できなくなった生徒のための高校です。生徒数41人に対して一般教師の他ソーシャルワーカー、カウンセラー、養護教諭、美術や技工などの専門指導者が配置されて特別プログラムが組まれています。

教室の生徒はピアス、長髪、ジーンズ、タンクトップなど日本の高校で校則違反になるような服装のうえ、男女で肩を組んだり窓枠に腰掛けたり、訪問者にさえも自分の意見を発言するなど、活発な授業が展開されていました。ここで一定の単位をとればもとの高校に戻れるし、日本でいう大検の資格もとれるとか、彼らなりに自分の将来の人生設計を描いている様子が伺えました。ヒスパニックやアフロアメリカンの生徒が多く、多民族国家といわれるアメリカの一面を見たような気がしました。

あれから10年余り、黒人系のオバマ大統領が就任、アメリカの国情も変わったと思いますが、この写真に写った子供たちはどんな大人になったか、学校はどうなったかと思いをはせています。

（佐藤ち江）



---

## 日本歯科大学微生物講座教授時代

【平成13年】

私は、昭和34年群馬大学医学部卒業後、同大学院を経てその後40年、感染および免疫機構の研究に従事してきました。この写真は平成13年、日本歯科大学微生物学講座の教授時代、第44回春季歯周病学会学術大会を新潟で開催した時のものです。現在、私は日本歯科大学名誉教授、歯科基礎医学会名誉会員、歯周病学会名誉会員です。

(齋藤和子)





## バーミングハム市医療視察訪問

【平成17年8月22日～27日】

平成17年8月、前橋市活性化のため『生命都市いきいき前橋』を打ち出した高木政夫市長の要請を受け、前橋市医師会員から応募された6名と群馬大学から1名、県医務課から1名の医療視察団を編成し、市長・商工会議所・国際交流協会とともに友好都市バーミングハム市を訪問した。

バーミングハム市はアメリカ南東部アラバマ州にある中心部人口25万人、広域圏人口110万人で、前橋市とは姉妹都市の間柄で交流されている緑豊かな落ち着いた街である。綿花畑から鉄鋼業、最先端医療へと発展したアメリカンドリームのアラバマ州最大都市である。

目的は、アラバマ州立大学バーミングハム校（UAB）の大学病院視察と都市部の医療状態視察であった。UABは、医学教育、研究施設、癌、エイズ、臓器移植、スポーツ医療等世界トップクラスの設備を有し、街全体が大学キャンパスといった活気にあふれた雰囲気であった。

帰国と同時に、ハリケーンカトリーナがアメリカ南部に上陸し、多くの被災者を出し、二次被害も悲惨な状況が報じられた。『住民の健康を守る』医師会の使命を思い起こした、アラバマ訪問であった。

（山田 邦子）



---

## 荻野吟子女史生家長屋門

【平成15年11月】

日本女医第1号、荻野吟子女史生家長屋門（有形文化財）の写真です。この長屋門は明治の頃、荻野家から関東屈指の真言宗の古刹光恩寺（群馬県邑楽郡千代田町赤岩）に移築されたものです。光恩寺から南500メートルの利根川辺に赤岩の渡しがあります。その対岸が女史生誕の地妻沼町であり、生家跡に荻野吟子生誕之地史跡公園があるそうです。

平成13年には生誕150年を記念し、長屋門の補修の呼びかけがあり、群馬県女医会の方々も賛同し、寄付されました。現在、長屋門では句会や茶会等が催されています。

山門をくぐると正面に本堂、左奥にはホーソー神堂（熱病の神）が静かに佇んでいます。県衛生年報によると明治12～19年、新田邑楽両郡にコレラの大流行の記録があります。往時の惨状を想像しながらも、黄色く輝くイチョウと冬桜が咲くのどけき境内の今にとりもどされました。

（伊藤洋子）



群馬県女医会総会





昭和48年度女医会総会



昭和61年度女医会総会



昭和62年度女医会総会



昭和63年度女医会総会



平成元年度女医会総会



平成2年度女医会総会



平成3年度女医会総会



平成5年度女医会総会





平成6年度女医会総会



平成7年度女医会総会



平成8年度女医会総会



平成9年度女医会総会



平成10年度女医会総会



平成11年度女医会総会 学術講演会



平成17年度女医会総会



平成18年度女医会総会

# 群馬県女医会総会議事録

## 昭和46年度総会（報告）

【日時】昭和46年6月20日（日） 午前11時～午後3時半

【場所】桐生市医師会館

〔次第〕

- ・真中先生ご挨拶
- ・司会 金子先生 議長 海老原先生
- ・昭和45年度収支決算 承認
- ・昭和46年度支部長 岸直枝先生承認
  - 前橋地区 真中はるゑ
  - 高崎地区 海老原
  - 桐生地区 疋田
- ・県女医会書記・会計 矢野、星野
  - 監査 金子、矢部
- ・各地区に代議員
  - 高崎：角田
  - 前橋：真中、高間、田中
  - 桐生：関田、永田
  - 太田・尾島・大泉・館林：真下、堀口
  - 渋川・中之条：原沢
  - 藤岡・多野郡：中島
  - 大胡：高橋
  - 富岡・甘楽・安中：佐藤京子
  - 沼田・利根：塩崎
  - 榛名・足門・箕郷：森田
  - 伊勢崎・堺町：大谷

諸先生方それぞれに貴重なご発言があり、女医会もたのしく修了致しました。女医でなければ出来ないことも多くあり、大いに頑張りましょうと励まし合いました。又

---

真中先生から四季折々においしいものでもいただき乍ら、雑談し合い、自らの向上にも役立たせたい御意向に全員賛成し、早速当番桐生地区で近く計画したいと存じます。

〔おねがい〕

①日本女医会年会費 1,500円  
県女医会年会費 500円 納入の件

②女医会加入の件

御存知ない先生方もいらっしゃると思いますので、出来るだけ御加入下さる様に、お伝えいただければ幸いです。

## 昭和48年度総会

【日時】 昭和48年4月7日（土） 午後3時半

【場所】 桐生市平井町 森山荘

〔森産業椎茸研究所見学〕

〔総会〕

- ・開会挨拶 疋田先生
- ・支部長挨拶 岸先生
- ・出席者紹介
- ・議事 (1) 議長選出  
(2) 昭和47年度事業報告  
(3) 昭和47年度決算報告  
(4) 昭和48年度事業計画審議  
(5) 昭和48年度収支予算案審議
- ・閉会 永田先生

〔会食〕

来賓挨拶

県医師会長 池上先生  
参議院議員 丸茂先生  
衆議院議員 羽生田先生  
桐生医師会長 藤江先生

## 平成3年度 総会

【日時】平成3年6月29日（土） 午後4時20分

【場所】高崎ビューホテル

〔映画上映〕

杏林製薬提供

〔総会〕

・開会

・会長挨拶

日本女医会理事選、評議員交代について

・行事報告

日本女医会理事選

岸先生講演

佐藤京子先生医療功労賞受賞

高間先生逝去

桐生女医会新年会出席

・新役員紹介

・会計報告

・監査報告

・記念品贈呈

医療功労賞受賞 佐藤京子先生

〔講演〕

「医療功労賞をうけて（僻地医療の40年）」

下仁田町佐藤医院 佐藤京子先生

「思春期保健 家族計画カナダ研修報告」

前橋市ぐんま思春期研究会 佐藤ち江先生、丸茂晶子先生

## 平成4年度 総会

【日時】平成4年6月20日（土） 午後3時30分

【場所】ワシントンホテル

〔映画上映〕

三共製薬提供

---

〔総会〕

- ・開会のことば
- ・会長挨拶・新役員紹介
- ・平成3年度行事報告
- ・会計報告
- ・監査報告
- ・その他
- ・閉会のことば

〔講演会〕

「糖尿病について—今日の治療の実際—」

群馬大学臨床検査医学 非常勤講師 小浜智子先生

平成5年度 総会

【日時】平成5年6月19日（土） 午後3時30分

【場所】伊香保温泉 福一旅館

〔映画上映〕

「鬱病」 日本チバガイギー提供

〔総会〕

- ・開会のことば
- ・会長挨拶
- ・平成4年度行事報告
- ・会計報告
- ・監査報告
- ・新役員紹介
- ・その他
- ・閉会のことば

〔講演会〕

「心身症、神経症、鬱病 『心の病のポイント』」

東邦大学医学部心療内科 牧野真理子先生

〔懇親会〕



## 平成7年度 総会

【日時】平成7年7月8日（土） 午後3時30分

【場所】群馬厚生年金会館

〔学術ビデオ上映〕

ca 拮抗剤「ムノバール」 ヘキストジャパン KK 提供

〔総会〕

- ・会長挨拶
- ・平成6年度行事報告
- ・会計報告
- ・会計監査報告
- ・日本女医会より
- ・役員紹介

〔学術講演〕

「登校拒否について」

野本クリニック院長 野本文幸先生

〔写真撮影〕

〔懇親会〕

「ヴァイオリン独奏」 樋口ゆみ先生

## 平成8年度 総会

【日時】平成8年6月29日（土） 午後3時30分

【場所】ホテルメトロポリタン

〔総会〕

- ・会長挨拶
- ・平成7年度行事報告
- ・平成7年度会計報告
- ・会計監査報告
- ・日本女医会より
- ・役員紹介

〔学術講演〕

「虚血性心疾患と高脂血症（女性の高脂血症を含めて）」

---

伴野祥一先生  
「血友病と分子医学」  
原 美智子先生

〔写真撮影〕

〔懇親会〕

Attraction 「Shanson & Giute」 石坂頼伽氏

### 平成11年度 総会

【日時】平成12年7月22日（土） 午後3時

【場所】高崎ビューホテル

〔総会〕

- ・会長挨拶
- ・平成11年度行事報告
- ・平成11年度会計報告
- ・会計監査報告
- ・日本女医会より
- ・役員紹介

〔学術講演〕

「漢方診療の実際」

漢方大野クリニック院長 大野修嗣先生

### 平成16年度臨時総会

【日時】平成16年9月11日（土） 午後4時

【場所】ホテルメトロポリタン高崎

〔総会〕

\*田所浪子、会長に選出される

### 平成17年度総会

【日時】平成17年7月9日（土） 午後3時

【場所】群馬ロイヤルホテル

〔総会〕

〔特別講演〕

「国連総会から考える国際女医会の展望」

国際女医会会長 平敷敦子先生

### 平成18年度総会

【日時】平成18年7月1日（土） 午後3時

【場所】群馬ロイヤルホテル

〔総会〕

〔特別講演〕

「現代若者の性」

家坂清子先生

「女性医師支援活動について」

群馬県衛生環境研究所兼食品安全会議事務局長 小澤邦壽先生

### 平成19年度総会

【日時】平成19年8月25日（土） 午後3時

【場所】群馬ロイヤルホテル 3Fふじなみの間

〔総会〕

〔特別講演〕

「アレルギー性疾患—最近の動向」

群馬大学大学院医学系研究小児生態防御学 教授 森川昭博先生

---

## 平成20年度総会

【日時】平成20年6月2日（土） 午後3時

【場所】群馬ロイヤルホテル 3Fふじなみの間

〔総会〕

〔特別講演〕

「漢方治療について」

群馬大学 佐藤浩子先生

## 平成21年度総会

【日時】平成21年6月13日（土） 午後3時

【場所】群馬ロイヤルホテル 3Fふじなみの間

〔総会〕

〔特別講演〕

「骨粗しょう症と生活習慣病」

前橋赤十字病院 産婦人科副部長 大澤 稔先生

# 資料編



## 群馬県女医会年表

和暦	西暦	群馬県女医会／日本女医会の動き	国内／県内のできごと
昭和18	1943	前橋市に国立前橋医学専門学校設立	新令による日本医師会設立
19	1944	4月／福島県立女子医学専門学校設立	軍医として戦地に医師が赴任
20	1945	1月4日／北海道庁女子医専、高知県立女子医専の設立が認可 2月／秋田県立女子医専の設立が認可	8月6日／広島に原爆投下 8月9日／長崎に原爆投下 8月15日／第2次大戦終了
21	1946	4月10日／改正公布された衆議院議員選挙法のもと日本女子医会より3名が当選	8月31日／国民医療法施行令改正。インターン制度と全国的な国家試験制度が決定、施行 11月3日／日本国憲法を公布
22	1947	群馬県女医会発足、初代会長真中すず。中澤於君ら高崎にて女性医師の集まり活発化。 1月／帝国女子医専、薬専、理専ともに「東邦」と改称する 7月／東京女子医専が東京女子医科大学予科に認可される	1月／医療制度審議会設置 11月1日／医師会及び日本医療団の解散等に関する法律によって、従来の医師会は解散。新生日本医師会は社団法人日本医師会として厚生大臣から設立認可 都道府県、郡市医師会も知事の認可を受けることに
23	1948	2月10日／各官立医学専門学校が医科大学に昇格 4月／大阪女子高等医専が大阪女子医科大学となる	5月12日／厚生省が母子手帳の配布を開始 6月30日／予防接種法公布 7月13日／優性保護法公布 7月15日／性病予防法公布 7月30日／医師法、医療法公布 9月1日／社会保険診療報酬支払基金設置
24	1949	名古屋、岐阜、福島、京都、札幌の女子医専が学制改革により、医科大学となる 国立大学設置法により群馬大学誕生	7月5日／保健体育審議会令公布 8月1日／人口問題審議会令公布 9月13日／GHQより医薬分業の勧告
25	1950		3月31日／中央社会保険医療協議会設置 5月1日／精神衛生法公布 5月4日／現行の生活保護法成立 7月10日／医療法人登記令公布
26	1951	東京女子医専、帝国女子医専が廃校となる	3月29日／社会福祉事業法公布 3月31日／結核予防法公布 4月14日／准看護婦制度設立 6月6日／検疫法公布 9月8日／対日平和条約が締結
27	1952	2月／新制東京女子医科大学、新制東邦大学医学部が発足	3月14日／日本初の血液銀行開設 7月31日／栄養改善法公布 8月14日／日本赤十字社法公布
28	1953		8月15日／癩予防法公布 12月1日／完全看護、完全給食、完全寝具設備制度制定

和暦	西暦	群馬県女医会／日本女医会の動き	国内／県内のできごと
			12月8日／医師法、歯科医師法、保健婦、助産婦、看護婦法施行公布
29	1954	12月1日／大阪女子医大が関西医科大学と改称	1月／未熟児保育開始 7月12日／日本初の人間ドッグ開始 群馬県医師会館落成
30	1955	5月8日／日本女医会総会(戦後初の全国的あつまり)開催。吉岡彌生が会長に決定	4月1日／群馬大学医学部に大学院(博士課程)設置 7月1日／国立らい研究所開設 8月／医薬分業法が公布
31	1956	12月／日本女子医会の国際的名称が「Medical Association of Japanese Woman」と決定	4月1日／医薬分業日／へき地医療対策が実施 5月1日／熊本県で水俣病が発生
32	1957	日本女医会群馬県支部設立 *国連 NGO 国内婦人委員会が結成	3月31日／原子爆弾被爆者の医療等に関する法律が公布
33	1958	5月31日／『日本女医会雑誌』が『日本女医会誌』と改称、復刻第1号刊行 7月16日／国際女医会総会の評議会において日本女医会の加盟が満場一致で承認 8月20日／汎太平洋東南アジア婦人協会国際会議が東京の国際基督教大学で開かれる	2月12日／学校保健法制定 12月27日／国民健康保険法公布
34	1959	5月22日／吉岡彌生が死去	1月1日／国民健康保険法実施(国民皆保険制度) 11月12日／水俣病の原因を有機水銀化合物と結論
35	1960	9月8日／国際女医会議が西ドイツで開催、正式加盟国として日本女医会より19名出席	2月20日／日本初の小児麻痺治療センターが落成 10月18日／群馬県対ガン協会発足
36	1961		4月1日／国民皆保険発足 6月21日／小児マヒが大流行 8月1日／看護婦の週44時間制度が確立 10月11日／医療費の自己負担、世帯主3割、家族5割となる。
37	1962	9月15日／『日本女医史』刊行 11月／大阪に大正区ふたば会が発会	9月15日／医療法一部改正。公的病院の開設、病床数規制
38	1963		8月1日／老人福祉法施行 9月1日／医療費の地域差撤廃 群馬県医師会、全日曜日の休診実施。僻地巡回診療始める。



和暦	西暦	群馬県女医会／日本女医会の動き	国内／県内のできごと
39	1964	6月29日／国際女医会議がノルウェーで開催、山崎倫子がオスロ新聞に掲載される。	4月26日／東京小児療育病院が開院 4月／小児マヒ予防のため国産生ワクチンの服用が義務化 10月10日／東京オリンピック開催
40	1965		5月／四日市において公害病認定患者第1号が発生 8月18日／母子健康法公布
41	1966		7月26日／性病予防改正法公布
42	1967	9月23日／社団法人とすることが決定	3月／川崎病発見 5月12日／消防法改正により人口10万人以上の市に救急業務を義務化
43	1968		4月1日／老人乳幼児医療費全額給付 5月8日／イタイイタイ病が初の公害病として認定 5月10日／インターン制度が廃止され、研修医制度が発足 9月26日／水俣病を公害病と認定
44	1969	10月11日／厚生省収医345号として社団法人日本女医会が認定	4月17日／消防法の改正により人口3万人以上の市に救急業務を義務化 9月2日／スモン病調査研究協議会発足 11月26日／全国スモンの会結成
45	1970	<b>第2代会長に岸直枝就任</b> 3月15日／大阪万国博医療サービスを開始 ルーペンゲンが実用新案登録される	3月14日／日本万国博覧会、大阪で開催
46	1971	<b>5月／岸直枝支部長、日本女医会から吉岡弥生賞受賞</b> 11月28日／定款施行規則が一部改正	5月31日／保険医総辞退を県知事に提出 7月1日／保険医総辞退 10月19日／消防法施行令改正により自治大臣が指定する市町村に救急業務を義務化
47	1972	1月22日／日本女医会優功賞の創設が決議	8月／労働安全衛生法制定 10月／県立東毛病院ガンセンター始動 日米厚生行政交流計画が発足
48	1973	国際女医会東京会議組織委員会が設立される	1月1日／老人福祉法が施行70歳以上が無料に 日本救急医学会設立 (JICA) 3月10日／医師賠償責任保険制度設立を決定 11月21日／日本救急学会設立
49	1974		7月1日／消防法施行令の改正に消防本部及び消防署を置く市町村全部に救急業務を義務化 8月／海外協力事業団設立

和暦	西暦	群馬県女医会／日本女医会の動き	国内／県内のできごと
50	1975	国際婦人年記念バッジを発行	群馬県医師会伝染病プロジェクトチーム委員会を発足
51	1976	8月21日／第15回国際女医会議が初めて日本で開催	2月／風疹が流行
52	1977	12月／『日本女医の実態調査報告書』を刊行	1月／第1号の救命救急センターを日本医科大学に設置 7月6日／厚生省医務局より救急医療対策事業実施大綱が出され、3段階の新救急医療システムの整備開始
53	1978	8月／国際女医会より『WOMEN PHYSICIANS OF THE WORLD』（女医の先駆者）刊行 国際女医会議記念事業基金運営委員会設立	4月24日／厚生省が市町村保健センター整備要綱を通知 5月1日／厚生省が財団法人健康づくり振興財団の設立を認可 11月10日／群馬県救急医療協力機関の指定に関する規則制定
54	1979	1月3日／友好訪中を実施 11月23日／「インドシナ難民を助ける会」が発足、日本女医会も入会 「国連婦人の十年」中間年婦人大会実行委員会に加盟	10月1日／医療品副作用被害救済基金法公布、施行。厚生省が医療指導監査官を新設 10月26日／WHO 天然痘根絶宣言 11月30日／カンボジア難民の医療救援に日赤医療班が出発
55	1980	5月／第25回日本女医会総会、伊香保にて開催 5月24日／国際女医会議記念事業として基金より学術研究助成制度を創設	
56	1981	10月15日／日本女医会本部（青山宮野ビル）が完成、移転	
57	1982	3月27日／全国女子医学生連絡会議への後援を決定 10月1日／ぐんま思春期研究会発足	4月1日／県立小児医療センター開設 6月22日／日本学校保健会法公布 8月17日／老人保健法公布（検診は市町村自治体に） 9月9日／「救急の日」設定 10月／県立東毛病院がんセンター落成
58	1983		日本医師会編「救急蘇生法」が呈示 国立高崎病院に国立救命救急センター併設
59	1984	5月19日／東京都支部連合会創立総会を開催 11月17日／公許女医誕生百年記念式を挙行、荻野吟子賞を創設	6月30日／厚生省が「日本は男女ともに世界一の長寿国」と発表 7月7日／新潟の病院が日本初のエイズ患者を発表 県救急医療センター開所

和暦	西暦	群馬県女医会／日本女医会の動き	国内／県内のできごと
60	1985	3月17日／国際科学技術博覧会（つくば万博）医療救護協力を行う	3月17日／科学万博つくば開催 8月12日／日本航空機123便上野村山中墜落事故発生 10月11日／「核戦争防止国際医師の会」にノーベル平和賞が授与決定
61	1986	7月／第3代会長に丸茂晶子就任	12月27日／群馬県健康づくり財団発足
62	1987		3月9日／日本気象協会がスギ花粉情報を発表 群馬県地域医療計画策定 群馬大学病院に救急部発足
63	1988	禁煙ポスターを作成、社会へ普及	2月21日／日本婦人科学会が冷凍保存受精卵の使用を承認 5月1日／厚生省が新3種ワクチン（風疹、麻疹、おたふく風邪）接種の導入を決定 ツベルクリン反応検査の注射、1人1針1筒方式
平成1	1989	6月24日／日本女医会監修『女医の診察室から「健康生活の知恵袋」』（仮称）発行について事業部が担当することが決定、製本完了 日本女医会ペンダントが完成	2月17日／エイズ予防法施行 2月24日／大喪の礼 11月13日／島根で日本初の生体部分肝移植手術に成功
2	1990	1月27日／日本女医会監修『女医の診察室から、62の HealthyTalks』完成	1月12日／天皇即位の礼 4月／日本医師会認定産業医発足 8月2日／国立循環器病センターが日本初の母体外手術に成功
3	1991	3月26日／日本ペルー協会ペルーコレラ基金へ寄附 4月／『追補 日本女医史』を発行 5月／第4代会長に角田智恵子就任 7月26日／クルド難民の子供達へ寄附	4月23日／救命救急士法公布
4	1992	第1回フォーラム開催「窮屈でない靴の話」	5月17日／乳幼児突然死症候群（SIDS）が1歳未満の国内死亡原因1位 5月25日／初の救命救急士の国家試験合格者が発表 7月1日／妊娠判定薬が解禁
5	1993	第2回フォーラム開催「増えているヨースポーツ障害!!」 5月20日／第5回国際女医会西太平洋地域会議を京都にて開催 11月23日／日本女医会学術部主催の第1回シンポジウム（MRSA—現状と対策）がカナ	1月28日／宮城県の病院が白血病の小学生に骨髄バンクによる初めての骨髄移植を実施 3月／群馬県救急医療懇話会発足 4月27日／厚生省がMMR3種混合ワクチン接種を開始4年で中止

和暦	西暦	群馬県女医会／日本女医会の動き	国内／県内のできごと
		ダ大使館で開催 マザーグースの会発足	DIFI 法による妊娠日／出産の国内第 1 例 が報告 日本初の卵細胞の細胞精子注入法で妊娠 に成功
6	1994	第 3 回フォーラム開催「健やかな赤ちゃんに 育てる為に DHA の役割について」	
7	1995	第 4 回フォーラム開催「正しい知識が貴方への 想いです (エイズ)」「お母さんの知らない 息子達」 2 月 10 日／阪神淡路大震災に対し、募金、救 援活動を行う	6 月 5 日／介護救護法が参議院本会議で 可決
8	1996	第 5 回フォーラム開催「健康のコツ、脳内革 命」 10 月 25 日／阪神日・淡路大震災の医療援助に 対し、厚生大臣より感謝状授与	2 月 17 日／シーボルト生誕 200 年記念切手 が日独で発行 3 月 9 日／薬害エイズが問題化、大腸菌 O157 による食中毒が多発 4 月 5 日／らい防止法廃止
9	1997	第 6 回フォーラム開催「寄生虫の話」 5 月 24 日／選択的夫婦別姓導入につき日本 女医会から請願書提出決議	7 月 16 日／臓器移植法公布 12 月／介護保険制度設立
10	1998	第 7 回フォーラム開催「紫外線とスキンケア」 11 月 26 日／吉岡彌生記念館開館	4 月／介護保険制度開始 9 月 17 日／第 1 回少子化対策委員会開催
11	1999	第 8 回フォーラム開催「菅原道長一族の糖尿 病と現代の糖尿病」 4 月 2 日／第 25 回医学会総会にて託児所を 開設 4 月 2 日／「女性医師の働く環境の改善と支 援体制の整備拡充を求める要望書」を総理大 臣、以下閣僚等に提出	2 月 28 日／臓器移植法に基づく初めての 脳死臓器移植を実施 4 月 1 日／感染症新法施行
12	2000	第 9 回フォーラム開催「心を癒す」	4 月 1 日／介護保険制度が施行
13	2001	第 10 回フォーラム開催「中高年の心の危機」 8 月 18 日／日本女医会 100 周年記念プレコ ンサートを開催	11 月 20 日／日本医師会が医療現場の IT 化 宣言
14	2002	第 11 回フォーラム開催「病気を未然に防ぐ東 洋医学のすすめ」	3 月 1 日／看護婦および看護師の名称を 看護師に統一 東南アジアで SARS 流行 県、産業保健推進センター設置
15	2003		4 月／健康保険本人 3 割負担の実施 5 月 1 日／健康増進法施行 予防接種の県内相互乗り入れ制度発足 鳥インフルエンザ発生

和暦	西暦	群馬県女医会／日本女医会の動き	国内／県内のできごと
16	2004	9月11日／平成16年度臨時総会 第5代会長に田所浪子就任	6月／改正介護保険法成立
17	2005	7月9日／平成17年度総会 特別講演「国連総会から考える国際女医会の展望」 11月19日／平成17年度秋季講演会「勤労者の腹部疾患」	12月／厚生労働省が2005年の人口動態統計の年間推計を発表。日本の人口が1899年の統計開始以来初の自然減
18	2006	7月1日／平成18年度総会 特別講演「現代若者の性」「女性医師支援活動について」 10月28日／平成18年度秋季講演会「ホルモン補充療法と循環器疾患について」 特別招待講演「私のスキー人生」	4月／障害者自立支援法施行
19	2007	3月14日／学術講演会「女性の排尿障害診療」 7月15日／学術講演会「プライマリーでよくみる精神疾患について」 8月25日／平成19年度総会 特別講演「アレルギー疾患—最近の動向」	
20	2008	1月19日／秋季講演会（平成20年度）「腰痛・下肢痛—腰部脊柱管狭窄について」 6月1日／日本女医会理事に山田邦子、安部由美子就任 6月2日／平成20年度総会 特別講演「漢方治療について」 12月9日／学術講演会「市中呼吸器感染症におけるニューキノロン薬の役割」	1月／議員立法の薬害肝炎被害者救済特別措置法が成立
21	2009	1月10日／秋季講演会（平成21年度）「2型糖尿病の治療戦略」 3月6日／「平成20年度女子医学生・研修医等をサポートするための会」 6月13日／平成21年度総会 特別講演「骨粗鬆症と生活習慣」 7月16日／学術集会「ヘリコバクターピロリの新ガイドラインに関する臨床での応用」 11月7日／秋季講演会「在宅高齢者の栄養管理—胃腸栄養管理の実例—」	新型インフルエンザ流行
22	2010	3月6日／「平成21年度女子医学生・研修医等をサポートするための会」	

## 群馬県の女性医師たち（昭和20年代以前）

（各個人のデータは、平成22年3月31日現在確認できる文献資料を基に作成しました。）

特記事項	名 前	生年月日		卒業校	卒業年	歿年月日	
日本の女医3号	高橋 瑞子	1852年	嘉永5年	済生学舎	明治18年	1927年	昭和2年
群馬県の女医1号	真中 すず	1881年11月30日 明治14年		日本医学専門学校 (済生学舎)	明治38年	1969年1月30日 昭和44年	
救らい事業に献身	服部けさ子	1884年	明治17年	東女医		1924年11月22日 大正13年	
前橋の女医2号	青木 シゲ	1886年	明治19年	東女医			
女医専出身の教師第1号	戸田 クニ	1890年	明治23年	東女医	大正5年	1946年	昭和21年
	佐藤 志づ	1890年5月10日 明治23年				1963年10月24日 昭和38年	
	海宝 キヨ	1893年7月4日 明治26年				1972年2月20日 昭和47年	
	兼田 マリ	1901年6月19日 明治34年		東女医	大正12年		
	小沢 綾子	1901年3月15日 明治34年				1983年8月2日 昭和58年	
名帝大初女性博士 群馬県教育委員8年	湯本 アサ	1902年	明治35年	東女医		1979年	昭和54年
	田中 倭子	1903年1月6日 明治36年		東女医	大正14年		
	鯛瀬 幸枝	1904年1月27日 明治37年		東女医	大正14年		
高崎女性開業医1号	中澤 於君	1904年4月11日 明治37年		東女医	大正14年	1982年5月14日 昭和57年	
	由利 澄子	1906年12月25日 明治39年		帝女医	昭和5年		
	鈴木 静江	1906年4月2日 明治39年		東女医	昭和2年		
	佐藤 タミ			東女医	昭和5年	1972年7月20日 昭和47年	
	松本千満喜	1906年11月13日 明治39年		帝女医	昭和5年		
	栃木 雪子	1907年2月25日 明治40年		東女医	昭和4年		
	小峰 文子	1907年5月8日 明治40年					
	高間美さ保	1909年2月6日 明治42年		東女医	昭和6年	1991年1月7日 平成3年	

出身地域	勤務地又は勤務地区	業 績	出典資料	備 考
三河国 (現愛知県)	日本橋	明治15年前橋産婆開業、明治20年日本女医3号 明治21年日本橋に開業 明治23年ドイツ留学	日本女医史追補、日本女医 会史等	
前橋市	前橋市紺屋町	明治38年試験及第 明治40年前橋真中医院開業 社団法人積善会嘱託医 民生委員 県女医会初 代会長 県母子保護連盟委員長 社会福祉法人 二之沢愛育会理事長 前橋市並びに県母子会委 員長 日赤奉仕団前橋支部委員長 県地域婦人 団体連絡協議会副会長 警察署嘱託医 昭和34年 藍綬褒章 昭和40年勲五等宝冠章 昭和44年正 六位	日本女医会雑誌、日本女医 史追補、県医師会史、前橋 市医師会史、広報まえばし 等	
福島県	草津町	大正3年医師免許取得、大正6年草津に赴任、大 正13年草津・鈴蘭園開設		
	前橋市	大正5年青木明眼院開業	前橋市医師会史 明治大正 時代の医師	
桐生市	東京	昭和7年東女医専教授	県立高崎女子高等学校九十 年誌等	
	富岡甘楽地区		県医師会史 敬老+物故者 名簿	
	館林邑楽地区		県医師会史 敬老+物故者 名簿	
	前橋市	大正15年群馬日赤支部病院勤務	前橋市医師会史 昭和前期 の医師	
	館林邑楽地区		県医師会史 敬老+物故者 名簿	
箱根	神奈川	昭和14年名古屋帝国大学初の女性博士 昭和27 年を含む8年間、群馬県教育委員 昭和31年成 美学園(元横浜英和女学校、現横浜英和学院)学 園長、昭和42, 45, 48年日本女医会理事	群馬の医史 地域の公人として活躍する医師会員 名大トビックス ちょっと 名大史39	
	前橋市	昭和10年駒形病院開業	前橋市医師会史 昭和前期 の医師	
広島	前橋市	群馬県立健康相談所勤務	前橋市医師会史 昭和前期 の医師	
高崎市	高崎市	昭和3年石田眼科	高崎市医師会史昭和55年会 員名簿 県医師会史物故者	
	前橋市/東京	昭和6年由利眼科医院継承 のち東京に転出、 結婚	前橋市医師会史 昭和前期 の医師	
茨城	前橋市	群馬県衛生課予防医勤務	前橋市医師会史 昭和前期 の医師	
	富岡甘楽地区	下仁田・佐藤病院	県医師会史合同慰霊祭 東 女医卒業名簿	
	館林市本町	斉藤眼科病院	県医師会史敬老者名簿 県 女医会名簿	
	桐生市	昭和7年叔父の栃木喜和次の養女となり開業	桐生市医師会史 県医師会 史敬老者名簿	
	多野地区		県医師会史敬老者名簿	
前橋市	前橋市	昭和22~31年群馬県立保養所長 昭和36年~県 立前橋保健所長、昭和49年~群馬結核検診セン ター所長 昭和32年県知事表彰 昭和55年勲五 等瑞宝章	前橋市医師会史等	

特記事項	名 前	生年月日	卒業校	卒業年	歿年月日
桐生女性開業医 1号	岸 直 枝	1909年11月14日 明治42年	帝女医	昭和 8年	1997年 1月 2日 平成 9年
	勝 俣 栄 子	1909年 8月14日 明治42年	帝女医		1971年12月14日 昭和46年
	後 藤 マ サ		東女医	昭和 7年	
	森 喜代見		帝女医	昭和 7年	
	疋 田 静 江		東女医	昭和 8年	
	松本きね子	1911年 2月23日 明治44年	東女医	昭和 8年	
	石 澤 雪 江	1913年 1月 1日 大正 2年	帝女医	昭和10年	2004年10月28日 平成16年
	佐々木国子	1913年 7月15日 大正 2年	東女医	昭和10年	
	真 下 静 枝		帝女医	昭和10年	
	松 岡 寛 女	1913年 8月15日 大正 2年	東女医	昭和11年	1995年 8月 2日 平成 7年
	小川アサミ				
	大 竹 優 子				
	大 竹 輝 子				
	金 田 み や				
	高 橋 浅 野				
	藤 澤 シ ヅ				
	後 藤 浪 江				
	宮 田 富 美				
	宮 武 英 子				
	白 石 す て 子				
	松 岡 三 重				
	松 井 す ま				
	水 谷 達 子				



出身地域	勤務地又は勤務地区	業 績	出典資料	備 考
桐生市	桐生市相生町	昭和9年高木医院継承 県女医会2代会長 昭和36年岸会岸病院理事長兼院長就任 昭和41年社会福祉法人桐の実会わたらせ養護園理事長兼園長就任 昭和45年群馬県女医会会長兼日本女医会群馬県支部長就任 昭和54年ガールスカウト日本連盟会長就任 平成3年桐生ユネスコ協会会長就任 昭和28年県教育委員会より学校医永年勤続表彰 昭和44年県功労表彰 昭和46年日本女医会より吉岡弥生賞受賞 昭和49年全国市町村教育委員会連合会より教育委員会永年勤続表彰 昭和54年厚生大臣より社会福祉功労表彰 昭和56年勲四等宝冠章		
	高崎市白銀町		県医師会物合同慰霊祭 高崎市医師会史60年史物故会員	
	富岡市内匠		県女医会名簿	
	渋川市渋川	森耳鼻科医院	県女医会名簿	
	桐生市仲町	疋田小児科医院	県女医会名簿	
	多野郡新町	昭和56年群馬結核センター診療所	県女医会名簿 前橋市医師会史昭和56年名簿	
沼田	東京／赤城村／沼田／高崎	昭和10年産婦人科医師、東京日赤勤務、赤城村開業後、昭和22年～沼田保健所勤務、昭和29年～高崎保健所予防課長		
	前橋市	昭和15年小児科佐々木医院	前橋市医師会史 昭和21年当時の医師 前橋市医師会史会員名簿	
	邑楽郡大泉町		県女医会名簿	
	高崎市片岡町	産婦人科医	高崎市医師会史 昭和55年会員名簿 県女医会名簿	
	利根郡沼田町		昭和10年11月日本女医会名簿	
	北甘楽郡福島町田澤		昭和10年11月日本女医会名簿	
	北甘楽郡福島町田澤		昭和10年11月日本女医会名簿	
	北甘楽郡小野村高尾	昭和11年名簿 下仁田町へ移動	昭和10年11月日本女医会名簿	
	多野郡中里村		昭和10年11月日本女医会名簿	
	桐生市境野町		昭和10年11月日本女医会名簿	
	館林市鞆町		昭和10年11月日本女医会名簿	
	前橋市百間町		昭和10年11月日本女医会名簿 星野改め	昭和11年5月、真中かずとと一緒に日本女医会女医公許50周年記念式典出席
	前橋市百間町		昭和10年11月日本女医会名簿	
	都智郡大川村古海		昭和10年11月日本女医会名簿	
	山田郡葦川村		昭和11年2月日本女医会名簿	
	多野郡藤岡町大戸町諏訪神社		昭和11年4月日本女医会名簿	
	桐生市三吉町		昭和11年6月日本女医会名簿 土屋改め	

特記事項	名 前	生年月日	卒業校	卒業年	歿年月日
	石田美和子		帝女医		
	海老原ふみ江	1913年 8月17日 大正 2年	帝女医	昭和12年	1999年 3月12日 平成11年
	阿部チヨノ	1915年 9月23日 大正 4年	帝女医	昭和12年	
	袖 野 壮 乃		東女医	昭和12年	
	森田やすゑ		帝女医	昭和12年	
	野村真世子	1917年 5月13日 大正 6年	帝女医	昭和14年	2003年 1月21日 平成15年
	伊 藤 昭 子		東女医	昭和14年	
	七五三木サク		帝女医	昭和14年	
	友 松 淑 子	1918年 大正 7年	帝女医	昭和15年	
	赤 尾 和 子		帝女医	昭和15年	
	川島ウメヨ	1920年 1月22日 大正 9年	東女医	昭和16年	
	山 本 栄 子		東女医	昭和16年	
	佐 俣 つ ま		東女医	昭和16年	
	桜 井 マ リ		東女医	昭和16年	
	且 尾 雅 子	1921年 7月31日 大正10年	東邦女子医専	昭和23年	2009年 8月 8日 平成21年
	山 田 俊 子		帝女医	昭和16年	
	武 士 清 子		帝女医	昭和16年	
	星 野 志 げ		帝女医	昭和16年	
	吉 沢 光 子		帝女医	昭和16年	
	池 上 博 子		帝女医	昭和16年	
	丸 茂 晶 子	1922年 1月 5日 大正11年	東女医	昭和17年	
	高 木 弥 生	1922年 3月13日 大正11年	帝女医	昭和17年	
	高 橋 弥 生		帝女医	昭和17年	
	秋 田 喜 美		東女医	昭和17年	
	戸 塚 俊 子		東女医	昭和17年	
	齊 藤 尚 子		東女医	昭和18年	
	塩 崎 志 名 子		東女医	昭和18年	

出身地域	勤務地又は勤務地区	業 績	出典資料	備 考
	吾妻郡草津町		昭和11年6月日本女医会名簿 新会員	
	高崎市昭和町	高崎保健所勤務、海老原医院	高崎市医師会史昭和55年会員名簿 県女医会名簿	
新潟	前橋市／高崎市	昭和12年10月～前橋・長沢病院勤務	前橋市医師会史 昭和前期の医師 高崎市医師会史昭和55年会員名簿	高崎市医師会史 昭和55年名簿 電電公社歴29年と本人記載あり
	桐生市仲町	袖野眼科医院	県女医会名簿	
	草津町白根／群馬郡群馬町	二之沢草津病院	県女医会名簿	真中すずの長女
福岡県	前橋市下沖町	昭和16年野村産婦人科医院	前橋市医師会史会員名簿	
	館林市大手町	伊藤眼科医院	県女医会名簿	
	昭和村川額	七五三木医院	県女医会名簿	
	高崎市豊岡町	友松医院	高崎市医師会史昭和55年会員名簿 県女医会名簿	
	安中市板鼻	赤尾医院	県女医会名簿	
栃木	前橋市	群馬赤十字病院内科勤務	前橋市医師会史 昭和前期の医師	
	新治村布施	山本医院	県女医会名簿	
	富岡市一ノ宮		県女医会名簿	
	中之条町伊勢町	剣持医院	県女医会名簿	
	前橋市朝日町	群馬中央総合病院小児科、昭和36年あさを小児科医院 昭和62年(財)尾健康づくり助成基金創設	前橋市医師会史会員名簿	
	渋川市川島	中沢医院	県女医会名簿	
	利根村高戸谷	武士医院	県女医会名簿	
	片品村鎌田	星野医院	県女医会名簿	
	沼田市笈地新田町	吉沢医院	県女医会名簿	
	藤岡市藤岡	池上眼科医院	県女医会名簿	
熊本県	高崎市上滝町	(花見)群馬赤十字病院小児科、丸茂医院 県女医会会長 日本女医会理事	前橋市医師会史 昭和前期の医師 高崎市医師会史昭和55年名簿 県女医会名簿	
桐生市	前橋市	群馬赤十字病院内科勤務	前橋市医師会史 昭和前期の医師	岸(高木)直枝の妹
	粕川村西田面	高橋医院	県女医会名簿	高木弥生
	高崎市	高崎保健所 健康づくり財団	県女医会名簿	高崎市医師会50年史 昭和36年退会
	大胡町河原浜	戸塚医院	県女医会名簿	
	前橋市南町	斉藤医院	県女医会名簿	平井尚子か？
	沼田市清水町	塩崎医院	県女医会名簿	

特記事項	名 前	生年月日	卒業校	卒業年	歿年月日
	小林 秀子	1922年 5月25日 大正11年	帝女医	昭和18年	
	佐藤 香	1922年 2月16日 大正11年	帝女医	昭和18年	
	佐藤京子		東女医	昭和19年	
	佐藤ち江		帝女医	昭和20年	
	井田春子		帝女医	昭和20年	
	角田智恵子	1923年 大正12年	東女医	昭和20年	
	吉見水井	1923年 大正12年	東女医	昭和20年	
	市川長子	1923年10月24日 大正12年	大阪女医		1992年 7月 5日 平成 4年
	関 シズ子		東女医	昭和20年	1963年 6月27日 昭和38年
	金子栄美也		東女医	昭和20年	
	尾城政子		東女医	昭和20年	
	鈴木由紀子		東女医	昭和20年	
	田中知恵	1924年 1月 1日 大正13年	東女医	昭和20年	
	真中はるゑ	1925年 2月22日 大正14年	帝女医		1997年 4月22日 平成 9年
	大山みつ	1926年 大正15年	帝女医		
	関田芳枝		東女医	昭和23年	
	桂 アグリ		東女医	昭和24年	
	清水道子		東女医	昭和24年	
	田所浪子	1928年 7月 9日 昭和 3年	前橋医専	昭和25年	
	中島昭子		東女医	昭和25年	
	新井恭子	1928年 昭和 3年	東女医	昭和26年	
	吉浜 敦	1928年 昭和 3年			
	佐藤キサ	1928年 2月27日 昭和 3年	東女医	昭和26年	
	塚越信子		東女医	昭和26年	
	貴船 薫	1930年 昭和 5年	名古屋市立大学		
	百瀬 恵	1931年 昭和 6年			
	富田浜子		帝女医		

出身地域	勤務地又は勤務地区	業 績	出典資料	備 考
	前橋市下大島	六供医院／上毛病院	県女医会名簿 前橋市医師会史昭和56年名簿	
	前橋市文京町	協立病院／コスモス診療科	県女医会名簿 前橋市医師会史昭和56年名簿	
	下仁田町	佐藤医院 平成3年医療功労賞、平成9年県教育文化功労賞	県女医会名簿	
	前橋市	群馬県庁、ぐんま思春期研究会会長	県女医会名簿	
	伊勢崎市本町		県女医会名簿	
高崎市	高崎市	昭和20年前橋医専産婦人科学教室入局、昭和24年角田医院 県女医会会長	高崎市医師会史昭和55年会員名簿 県女医会名簿	
	高崎市新紺屋町	吉見耳鼻科医院	高崎市医師会史昭和55年名簿 県女医会名簿	
下仁田	高崎市九蔵町	整形外科	高崎市医師会史昭和55年会員名簿 高崎市医師会60年史物故者	
	高崎市／渋川市	高崎・佐藤病院、渋川で産婦人科	高崎市医師会会員名簿、県医師会史物故者	
	桐生市本町	金子医院	県女医会名簿	
	邑楽町篠塚	尾城医院	県女医会名簿	
	月夜野町後閑	塩崎医院	県女医会名簿	
	前橋市表町	駒形医院	前橋市医師会史会員名簿 県女医会名簿	
	高崎市南大類町	昭和21年当時(前橋市紺屋町・神明町市立産院)産婦人科真中医院	前橋市医師会史 昭和21年当時の医師 前橋医師会史会員名簿 高崎市医師会60年史物故者	真中すずの四女
伊勢崎市 大手町	高崎市	前橋赤十字病院眼科 その後結婚、開業	高崎市医師会史昭和55年会員名簿	
	桐生市		東女医卒業名簿	
	渋川市		東女医卒業名簿	
	下室田		東女医卒業名簿	
大阪	前橋市三河町	昭和25年前橋医専卒、昭和28年高崎保健所勤務、昭和36年田所医院開業 県女医会会長	前橋市医師会史会員名簿 県女医会名簿	
	富岡市		東女医卒業名簿	
	高崎市	小児科	高崎市医師会史昭和55年名簿 県女医会名簿	高崎市医師会50年史昭和33入会
秋田	高崎市	小児科	高崎市医師会史昭和55年名簿	秋田で生まれ、新潟で学びと記載あり
	前橋市	昭和56年県教育委員会保健課、健康づくり財団	前橋市医師会史昭和56年名簿 東女医卒業名簿	
	倉沢村		東女医卒業名簿	
大阪堺	高崎市	耳鼻科・精神科	高崎市医師会史昭和55年名簿	高崎市医師会50年史昭和39入会
	高崎市	小児科	高崎市医師会史昭和55年名簿	高崎市医師会50年史昭和35入会
	高崎市	通信診療所		

特記事項	名 前	生年月日	卒業校	卒業年	歿年月日
	平井尚子				
	群馬富美子				
	石原喜美子				
	大滝智恵子				
	高橋秀子				
	石井ツグエ				
	太田淑子				1976年4月2日 昭和51年
	田内つる				1983年6月26日 昭和58年
	今井ワキ	1927年5月15日 昭和2年	福島女医専		
	狩野登志子	1928年6月19日 昭和3年	東女医		
	鈴木政子	1931年7月28日 昭和6年	群馬大学		
	梶尾晶子	1931年9月13日 昭和6年	群馬大学		

出身地域	勤務地又は勤務地区	業 績	出典資料	備 考
前橋市	昭和21年当時	前橋市百軒町(新町25 日赤病院)小児科	前橋市医師会史 昭和21年当時の医師	
前橋市	昭和21年当時	前橋市萩町(前橋医専)小児科	前橋市医師会史 昭和21年当時の医師	
前橋市	昭和21年当時	前橋市岩神町(前橋医専)小児科	前橋市医師会史 昭和21年当時の医師	
前橋市	昭和21年当時	高崎市喜多町(神明町市立産院)産婦人科	前橋市医師会史 昭和21年当時の医師	角田智恵子の旧姓
前橋市	昭和21年当時	前橋市(国領町66 前橋医専附属医院)内科	前橋市医師会史 昭和21年当時の医師	
前橋市	昭和21年当時	前橋市国領町(前橋医専・群馬師範学校医)内科	前橋市医師会史 昭和21年当時の医師	
桐生地区			県医師会史物故者名簿	
前橋地区			県医師会史物故者名簿	
前橋市	昭和56年	今井医院	前橋市医師会史昭和56年名簿	
前橋市	昭和56年	狩野外科医院	前橋市医師会史昭和56年名簿	
前橋市	昭和56年	協立病院	前橋市医師会史昭和56年名簿	
前橋市	昭和56年	梶田医院	前橋市医師会史昭和56年名簿	

---

## 群馬県女医会会則

### 第一条（名称）

本会を群馬県女医会と称する。

### 第二条（目的）

本会は会員相互間の親睦を深めるとともに学術の向上を図り地域医療・地域保健への貢献に努めることを目的とする。

### 第三条（会員）

本会の会員は群馬県内に在住又は勤務する女医とする。

### 第四条（役員）

本会に会長1名及び副会長2名、理事若干名、顧問をおく。

会長、副会長、理事は会員の互選による。

顧問は会長がこれを任命する。

各都市に1～2名の代表をおき本部と各郡市との連絡をとる。

代表は会長これを委嘱する。

### 第五条（役員任期）

任期は2年とする。但し再任を妨げない。

### 第六条（会長、副会長、及び理事）

会長は会を総括、代表し会務をつかさどる。副会長は会長を補佐し会長事故有るときはその職務を代行する。

理事は庶務、書記、会計2名及び各郡市代表とし、会の運営について各分野を担当する。

### 第七条（監事）

本会に監事2名をおき会計の監査をおき行う。

監事は会員の互選により会長が委嘱する。

### 第八条（会議及び事業）

総会は年一回会長これを招集し行いを建前とする。また適宜講師を招き研修会を行う。

地域の要望に応じ、地域医療、地域保健に有益な事業を行う。

理事会は会務運営に関し必要に応じ会長これを召集協議する。

### 第九条（会費）

当分の間徴収しない。

### 第十条（事務局）

事務局は会長宅におく。



第十一条（会則の改正）

本会会則の改正は総会に於いて承認をうけるものとする。

昭和62年 6月20日

## 群馬県女医会会則（平成4年改正）

第一条（名称）

本会を群馬県女医会と称する。

第二条（目的）

本会は会員相互間の親睦を深めるとともに学術の向上を図り地域医療・地域保健への貢献に努めることを目的とする。

第三条（会員）

本会の会員は群馬県内に在住又は勤務する女医とする。

第四条（役員）

本会に会長1名及び副会長2名、理事若干名、顧問をおく。

会長、副会長、理事は会員の互選による。

顧問は会長がこれを任命する。

各郡市に1～2名の代表をおき本部と各郡市との連絡をとる。

代表は会長これを委嘱する。

第五条（役員任期）

任期は2年とする。但し再任を妨げない。

第六条（会長、副会長、及び理事）

会長は会を総括、代表し会務をつかさどる。副会長は会長を補佐し会長事故あるときはその職務を代行する。

理事は庶務、書記、会計各々2名及び各郡市代表とし、会の運営について各分野を担当する。

第七条（監事）

本会に監事2名をおき会計の監査を行う。

監事は会員の互選により会長が委嘱する。

第八条（会議及び事業）

総会は年一回会長これを招集し行いを建前とする。又適宜講師を招き研修会を行う。

地域の要望に応じ、地域医療、地域保健に有益な事業を行う。

理事会は会務運営に関し必要に応じ会長これを召集協議する。

---

第九条（会費）

年1回維持費として2,000円を徴収する。

第十条（事務局）

事務局は会長宅におく。

第十一条（会則の改正）

本会会則の改正は総会に於いて承認をうけるものとする。

平成4年6月改正

## 群馬県女医会会則（平成16年改正）

第一条（名称）

本会を群馬県女医会と称する。

第二条（目的）

本会は、会員相互間の親睦を深めるとともに、学術の向上を図り地域医療・地域保健への貢献に努めることを目的とする。

第三条（会員）

本会員は、群馬県内に在住又は勤務する女性医師で、本会の趣旨に賛同する者とする。

第四条（役員）

本会に会長1名・副会長2名・理事をおく。

会長・副会長は会員からの推薦を受け、選挙により決定する。

群馬県内を各地区に分け、それぞれに1名の理事をおき、会長がこれを委嘱する。

第五条（役員任期）

任期は2年とする。但し再任を妨げない。

第六条（会長・副会長・理事）

会長は会を総括・代表し、副会長は会長を補佐し、会務をつかさどる。会長事故ある時は、副会長がその職務を代行する。

理事は庶務・書記・会計各々2名及び地区代表とし、会の運営について各分野を担当する。

第七条（監事）

本会に監事2名をおき、会計監査を行う。監事は会員の互選により会長が委嘱する。

第八条（会議及び事業）

総会は年一回会長が召集し行う。

地域の要望に応じ、地域医療・地域保健に有益な事業を行う。  
理事会は会務運営に関し、必要に応じて会長がこれを召集・協議する。

第九条（会費）

会費は、年間2,000円とする。

第十条（会則の改定）

本会会則の改定は、総会において承認を受けるものとする。

平成16年9月11日改正

平成16年11月1日施行



## あとがき

昭和22年当時希少であった開業女医の集まりから始まった女医会は、前橋、桐生、高崎、前橋と事務局を引き継がれ、設立60年を超えるに至りました。当初の先輩方のご苦勞・ご活躍から、現在女子医学生が医学生の40%を超える時代の変革の中で、この歴史を会史として残し、これからの女性医師の活躍において指標・参考に資するよう「群馬県女医会史」編纂事業が平成18年群馬県女医会総会において議決されました。

田所浪子会長、女医会役員を中心に、群馬県女医会史編纂委員会を立ち上げ、平成19年1月から始動いたしました。先ず、印刷会社に計画と見積もりを試算してもらい、女医会の会計と照らし合わせ、発行費用の捻出から始めました。収入会費を積み立てるために、年間事業講演会に、製薬会社協賛を募りましたところ、多数の申し出がありました。女医会は、これまで会費のみで運営してきた学術団体でありましたのに、協賛を入れる事には躊躇いがありましたが、一方では、女医会の社会的知名度の高さを再認識したような錯覚も感じたことは否めませんでした。

毎月8日に編纂会議を開催し、朝日印刷高橋弘氏と、フリーライター中村ひろみ氏には、資料の収集、整理、構成、校正と、素人集団である編纂委員をよく導いてくださったと感謝しております。

資料集めは、各会員に分散していた総会資料、女医創世記の資料を多数提供していただき、その貴重さ懐かしさには編纂会議も中断する場面が多々ありました。

日本3番目の女医高橋瑞子先生、真中すず先生、岸直枝先生等伝説上の女傑としてしか想像できない編纂委員諸子には、中村氏による日本中の資料から集められた記事は貴重なものでした。女医会発足当初の状況は、丸茂皁子先生、角田智恵子先生、田所浪子先生の歴代会長との座談会から、第2次世界大戦直後、群馬県で孤軍奮闘していた開業女医が、時には集まって、美味しいものでも食べながら、日頃の苦勞談、情報交換、自己研鑽の交流会として、自然発生的に発足してきたこと、先輩女医が新米女医を親身になって支援指導していたことなどが話され、今もこの伝統は続いていると感心したものでした。

純粋な地域医療貢献の精神は、これからも女医たちのモデルとなり引き継がれていくことを期待し、この群馬県女医会史が後世に役立つこととなると確信して編纂を終了いたします。

資料を提供して下さった会員の方々、原稿文を執筆して下さいの方々、編纂委員の方々、朝日印刷編集者高橋弘氏、フリーライター中村ひろみ氏に感謝いたします。

平成22年4月8日

群馬県女医会副会長・編纂委員 山田邦子



後列向かって左から 北條みどり 木村寛子 太田美つ子 伊藤洋子 望月和子  
前列向かって左から 柳川洋子 田所浪子 山田邦子 山下由起子

(編集会議 平成22年4月1日)

## 群馬県女医会

会 長	田 所 浪 子	
副 会 長	山 田 邦 子	山下由起子
庶 務	太 田 美 つ 子	北條みどり
書 記	望 月 和 子	柳 川 洋 子
会 計	伊 藤 洋 子	木 村 寛 子
監 事	角 田 智 恵 子	善 如 寺 恵 子

### (地区理事)

東毛地区	関 田 芳 枝
西毛地区	矢 島 晶 子
南毛地区	山 田 邦 子 (兼任)
北毛地区	國 府 田 利 江

(平成22年度現在)

## 群馬県女医会60年史

発行 ■平成22年 6月24日

発行者 ■群馬県女医会

群馬県前橋市城東町 4-11-17 (山下医院内)

企画編集 ■群馬県女医会60年史編集委員会

印刷製本 ■朝日印刷工業株式会社

群馬県前橋市元総社町67



